
命題と恋愛

高居望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命題と恋愛

【Nコード】

N3596V

【作者名】

高居望

【あらすじ】

僕には彼女がいる。かわいいけどちょっと変わっている彼女がいる。そんな彼女と僕の約束。週に一つ”命題”について語り合うこと。命題を通して恋愛はどのように進んでいくのか。これはそんなお話。

「自分の存在している上での責任についてどうおもうかしら？」

・・・自分の存在している上での責任。

唐突にして意味不明な出だしにあっけにとられた方、読む気をなくした方、憤りを覚えた方、そんな簡単なこと聞くなよと思った天才肌の方、他にも十人十色、さまざま印象を持った方がいることだろう。

言いたいことはわかる。僕もそちら側の立場だったなら同様のことを思うかのしれない。いや、絶対思う！

それでも、それを承知の上で頼みたいことがある。

僕の話を少し話を聞いてほしい。判断は、それを聞いてからでも遅くはないだろう？

それではこの物語の語り部、この僕、十坂春じっさかはるから事のいきさつを説明しよう。

現在、僕は彼女の家の彼女の部屋に彼女と一緒にいる。ありてい
に言えば、自宅デート中だ。

彼女というのは、『間淵幻』まふちあそび、彼女についても少し語ってみよう。
背丈は女性の平均か、それより少し上ぐらいの160ほど。腰に
届くか届かないかほどの流れるような黒いストレートの髪。目つき
が少々悪いことを除けば誰といても見劣りしないような美貌。思わ
ずテレビの中の人かと思うほどのスタイル。

これが間淵幻の外見だ。彼女の内面については、ここであえて説
明しなくとも、すぐにわかるだろう。

何？ 問題はそんなことじゃないって？ 確かにそうだが、冒頭で
皆々様がさまざまな感情を抱いた原因は、幻の人物像がつかめなか
ったからではない。

おそらく、というか明らかだが、その原因は彼女の台詞、彼女の

発言にあるだろう。

” 彼氏彼女 ” の会話としてはあまりに似合わない、あまりに幸せボケしていない、そんな会話に驚かれたと見受ける。

大丈夫、最初は驚くかもしれないけどすぐになれるさ、なんて何の解決にもなっていない言葉で満足してはくれないだろう。

何故僕たちがこんな哲学のような会話をしているのかと言うと、それには詳しいわけがある。ここまで読み続けたその我慢強さを評して、敬語で説明しよう。

遡ること一ヶ月の夏休み。幻との出会いと、今の始まりについて。まだ知り合っていなかった彼女は、公園でたそがれていた僕に、「あなたの生きている理由って何？」なんてトンデモな事を聞いてきたのです。

突然のことに驚いてしどろもどろになったのです。主人公補正は、どうやらかからなかったみたいです。

そして、なぜか彼女はそんな僕を気に入ったらしく、僕の発言の言葉尻をとらえて脅迫まがいのことをしたのです。これについては、僕の責任といえばそれまでですけど。

僕は警察のお世話にならないように必死に交渉したのです。

そして、今の関係になったのです。

そういうことなのです。敬語だと話しくいので、前言撤回、そろそろ普通に戻させていただこう。われながら我慢弱いな。

まあ、そういうことで、彼女が僕に三つの条件を出すことで事なきを得た。その三つの条件とは、

- 1、週に一度何かしらの命題についての討論
 - 2、学校へ一緒に登下校すること
 - 3、上の2つを高校卒業まで守ること
- この出来事がきっかけで彼女と僕は付き合うことになった。

ここまで聞けばもうお分かりだと思うけど、冒頭のあれは今日の

命題なのだ。そして僕たちはそれについて語り合うところなのだ！
ペアルックで。

・・・ペアルックな理由は、彼女が三十分前にとてもうれしそうな顔で、「服を買ってきたわ。よかつたら着て」といって差し出したきたペアルックを断れずに受け取ってしまった、この僕の愚かさ無力さにある。

まあ、そんなに悪い気はしないけど。

最後に討論のルールについて。

僕たちは、一方が問題提起と追加質問、もう一方が答える側、という春の幻ルール（幻命名）を用いている。ちなみに今週は僕が答える側。

そろそろ皆様も状況できただろうから（あれ、ここまでたどり着いた人数が数えられるほどもない気が・・・）、本題に移ろう。

「己の存在に対する責任か。僕は自己の存在が様々な犠牲の上に成り立っていると考えている。身近なところで言えば家族関係。やむをえない場合はもちろん除くとして、自分の存在が家族に迷惑をかけているといえる状況は割とあるだろう。普通は、”家族なんだから”ってことで許されてしまうけど、負担があることは確かだろう。大きなところでは、ものの消費。全体から見ればとても微量だけど、僕は間違えなく、資源を消費している。どんな視点から見ても、それは避けようのない事実だろう」

「それは確かにそうね。その考え方でいくと、あなたは責任を果たすために死ななければならなくて結論に至るわけ？」

「いやいや、違うよ。何で僕を殺したがるんだ？」

自分の死が話の落ちって・・・洒落にならないな。

でも、自分が迷惑をかけていることを認識しながらも、それに気づかないふりをして、目をつぶって生きている。間違ったことをしてはいけないと言っているそばから、間違ったことをしているように。

しかもその矛盾に気がついてても、僕は生き続けるという矛盾。ひねくれたものの見方かな？

「ここまでは僕の存在するデメリット。ここからはメリットについて語ってみよう」

僕はマゾではないので、自虐で終わり、といったつまらないことはしない。この話にはもちろん続きがある。

「僕は何かを消費していると同時に何かを生産してもいるんだ。何かを犠牲にしていると同時に、いい意味で誰かの犠牲になっているんだ。消費をマイナス、生産をプラスって考えて、その帳尻で最終的にプラスへもっていくこと、それが可能な人にとっては、存在している上での義務だと思う」

ひどく乾いた理論が出来上がった。

「あなたが今まで語ってくれたのは、社会に対する義務よね。なるほど確かにいい心がけだと思うわ。人間をプラスマイナスで判断するのは、いささかドライな気もするけれど」

ドライか・・・きつとドライなのだろう。

僕のこの意見は、人を人として見ていない。道具、歯車、無機物、なんと例えてもいいが、僕は人を人として見ていない。

「まあ、そんなあなただからこそ、あの時声をかけたのだけれど」

「なんか、全く喜べない選別だな」

なんて網にかかってしまったんだろう。

「で、そのほかにはないの？」

彼女の抽象的な問いの意図がいまいちつかめないままに、僕の発言ターンになる。

「ほかには・・・どうだろう。とりあえず基本的にはもらったその分ちゃんと返す、もらいっぱなしにしない、つてのが普通に生きていくうえでの義務だと思うけど」

「じゃあ、これにはどう返してくれるのかしら」

彼女はそう言うと、おもむろに立ち上がって僕のほうへ飛び込んできた。文字通り飛び込んできた。

「うわっ」

突然の光景に驚く僕。そして衝突。当たり前だが高校生の女の子とはいえ、人が飛び込んでくるのを受け止めるのには相当なパワーが必要だ。

当然僕にそんなスーパーパワーがあるはずもなく、彼女ともども後ろに倒れる。

ただ、彼女が怪我をしないように、僕も怪我をしないように、それくらいのことはできた。

「愛もただもらってるだけじゃなくて相手にも伝えなくちゃね。あなたのポリシーによれば」

「・・・そうだね」

僕は抱擁のお返しに、頬にキスをした。

もらうだけじゃなくきちんと返す。それは恋愛における鉄則なのかもしれない。

ある考えがほかの問題にも通用することもある。今回はそんな、言われれば当たり前だと思うこともわかった。

『自ら気づいた事実の自覚』と『外から教わった事実の理解』の違い。これはまた今度の命題だな。

影の登場、命題の理由

「命題だつて？ 面白いことやってるじゃない。いまどきの彼氏彼女が集まってやることじゃあないけど、それは面白いね。おや失礼、自己紹介がまだだったね、ぼくは間淵影^{まふちかげり}、幻の兄^{おとぎ}だよ。もっとも幻には僕のほかに四人の姉がいるから、二人っ子ってわけではないよ。君のことはもう知っているから自己紹介はいいよ、春くん。君は今、幻と付き合っているそうだね。いやいや、勘違いしないでくれ、ぼくは何も反対しようってわけじゃあない。むしろ応援してあげたいぐらいだよ。それにしても命題ね・・・こんな時期から命題に触れているとは、幻は本気で君のことが好きなようだね。君と幻が結ばれるには命題は不可欠だからね。ははっ、といっても今はまだわからないだろう。まあこういうことは幻に聞いたほうがいいだろうから、ぼくは余計な口出しはやめておこう。こういうことは当人同士でやるのが一番だからね」

始まり早々に長々と語っていらっしやるのは本人の言うとおり、幻のお兄さんの影さんだ。

僕と幻が彼女の部屋で遊んでいたら、急に部屋に入ってきた。

ちなみに遊びというのはテレビゲーム。幻は実はゲーム漫画アニメのオールラウンダーだったのだ（これは本当に驚いた）。

僕はあまりゲームをするほうではないので、さつきから幻に助けられている形だった。

・・・話が脱線してしまったので無理やり元に戻そう。

この部屋には今、僕と彼女と彼女の兄がいる。ゲームはゲームコーナーの画面になっている。幻は僕のひざの上に座っている。

・・・これが修羅場ってやつか。この言い訳のできない状況、ここからどう挽回すればよいのだろうか。

なんて考えていると影さんが口を開く。どんな叱咤が出てくるのだろう。

「幻、今日はあくまで挨拶にきただけだから落ち着きなさい。ぼくも自分の妹が付き合っている男に興味がないほどに、無関心な兄ではないからね。今日は春君がどんな子なのか見に來ただけだから。それももうすんだことだし、邪魔者は立ち去ることにするよ。ぼくはこれから出かけるから。それじゃあ中睦まじいお二人さん、ごきげんよう」

そう言つと、影さんは去つていった。

本当に去つていった。

・・・僕たちの格好に一切触れてこなかったな。放置されるのもそれはそれで気まずいのだけど。

部屋に静寂が訪れる・・・なんてことはなく、幻が僕に座つたまま語りだす。

「ついに影兄さんに見つかってしまったわね。まだ兄弟との遭遇はさけたかったのに・・・でも見つかってしまったからにはしょうがないわね。いいわ、あなたに隠していた真実を、今ここで打ち明けましょう。まさかこんな序盤で明かされるなんて、思っても見なかったけど。実を言つと、私の家は芸術一家というのかもしれないのか、とにかく芸術を好いているのよ。まあここまではちよつと珍しい一家ということぐらいですむのだけれど、問題はここから。家族ルールで、恋人ができたら家族全員からの命題に答えること、というのがあるのよ。お父さんが哲学好きでその影響なんだけど。そして家族全員の命題に答えること、これが結婚の条件でもあるわ。つまりはそういうことよ」

突然の急展開についていけない僕。

そんなことにはお構いなしに、幻が再び話を始める。

「勘違いしないでね、何もあなたに暗に結婚しなさいと言っているわけではないのよ。これはもしもそういうことになったら、という

時に少しでも力になるようにやっていることなのだから」

彼女の”勘違いしないでね”には真に残念なことに、ツンデレの要素が完全に欠落していた

。これは主柱のない家、タイヤのない自転車、主人公のいないドラマ、そういう類のものだった。

惜しい！ 素直にそう思った。いや、本当に。

そういえば冒頭でお兄さんも”勘違いしないで”って言ってた様な・・・はやっているのだろうか。

しかしこの場合、そんな瑣末なことはどうでもいい。

問題なのは命題に隠されていた理由。まさかそんな重大なことが隠されていたとは。

さっきは混乱してしまった僕だが、実際幻とのかを考えると、このまま付き合って結婚まで行きたい、と思っていないことはなかった。むしろ口にくそ出さなかったが、そのことは考えていた。その条件が命題ってわけか。なるほどなるほど。

命題という、なんだかんだ言ってもやはり不自然なものに答えが与えられて、頭がすっきりした。

やっぱりなんて言っても変だったもん！

すっきりしたついでに少し幻をいじってみる僕。

「なるほどね、話は大体分かったよ。つまり君は僕と結婚したいから、こうして毎週命題について語り合っているというわけだね」

「な、何を言っているの、勘違いしないでって言ったでしょう。別にあなたと結婚したいってわけじゃないんだからね！」

おおっ、ツンデレ度が少し含まれていた。

ツンデレってたな！

「まあ冗談はさておき、そういうことならもつと命題に励まなくちゃね」

「・・・それはどういう意味かしら」

「おいおい、最後まで言わす気かい？ 命題の理由を考えてみれば

明らかだろう。つまりは、そういうことさ」

かつこいい台詞で占めてみる僕。

今日は珍しいことに僕が主導権を握れたな。これはたぶん、影さんのおかげだろう。ありがとう、影さん。

会話をリードできて少し機嫌のいい僕、僕の言った言葉の意味に気づいて少し頬を染めている幻。

結婚という途方もなく遠い位置ではあるが、確実に存在するそれを意識して、僕たちはそこに向かって一歩、歩き出した。

幻おとぎの兄、影かげりさんと対面してから三日後、今日は命題の日だ。場所は相変わらず幻の部屋。

「今日は僕が出題の日だったね。それじゃ早速、今日の命題は”名前にはどのような意味があるのか”。名前って生き物にはもちろん、無生物につけることもあるだろう。それってどういう意味があるんだと思う」

命題については事前にメールで知らせるのがルールなのでここで話がとまってしまうことはまずない。彼女もすでに考えてきた持論を発表する。

「名前を付ける、名付けるね。まず名前をつけることで生まれるのは、他との差異。無数にいる同種のなかで他との違い、大勢の仲間の中で個性を作るため。別に名前だけが個性というわけではないけど、名前が個人の特徴のなかで決して小さくないのは確かだわ。よく店とかで、自分と同じ苗字もしくは同じ名前が呼ばれたりすると思わずドキツつとすることってない？ あのドキツが名前がアイデンティティの中の大きなひとつであることの証拠といえるわ。子供に珍しい名前をつけるというのも具体例のひとつね。あれも名前が個人の大きな要因であることが真だからこそのことでしょうね。もっとも、私はそういう奇をてらったようなものはあまり好みじゃないんだけど」

さすがは幻。言われてみればそうだけど、実際に考えたことがない、もしくは考えたことを忘れてしまっている、そんなところを拾ってくるとは。やっぱりこういうところがスゴイと思わせるところなのだろうか。

「名は体を表すってことか。じゃあ無生物については？」

「無生物へのネーミング、それもやはり他との差異というのが大きいと思うわね。名前を付けると愛着がわく、まったく同じものは実

際はたくさんあるけど、自分が名付けたこれはこれだけ。でも生物の場合と違う点もあるにはあるわ。生物に名前を付けるのはあくまでその生物のためでしょう。でも物に名前を付けるのは、そのものを所有する自分のため。物のためではなく者のためってね。ふふ、面白い冗談だわ。」

自分の言ったジョークに笑う幻。でもいまのが面白かったかどうかはかなり微妙だ。

「ん、何？ あなたも笑ったら？ 別に今笑っても私を蔑んでいるなんて勘違いしないから安心して。さあ、笑っていいのよ」

笑いフリ来た！！ これはどうすれはいいのだろう。

僕は何とか笑おうとして見せる。たぶん、いや間違えなく引きつつていただろう。

「もしかして・・・春君、今の面白くなかった？ そんな・・・ヒドい・・・」

急に悲しい表情になる彼女。え？ いや、そういうつもりだったんじゃないのに・・・

この窮地を切り抜ける手段は一つ、それは・・・

「そんなに落ち込むなよ。さっきのジョーク、結構よかったじょう、クックック」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・え、いいじょう、クックック・・・」

「・・」

「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・すみませんでした・・・」

「」

あれ？ やらかした？ この場を収めようとしたつもりが、クーラー要らずのクールな部屋を作ってしまった。

なんかいろいろ終わったけど、命題についてはもう終わっていた

だろう。名は個性、それに尽きるね！

「・・・ふふっ」

アレ！？ さっきのがいまさらになってきた？ というか駄洒落好き？

彼女の一面がさらに見れた、そう思えば凍える大火傷をした甲斐があつたってもんだね！

2（後書き）

こんにちは。

もうお分かりだと思いますが命題に取り組む話では数字、それ以外では話の題名がサブタイトルになっております。

すでにラストまでの流れは決めてあるので、一日一話投稿できると思います。

稚拙な文ですが、どうぞお付き合いください

初めての外デート、場所はもちろん

今日はデートだ。僕と幻まゆの初デート。

二人で会うときは必ず幻の部屋という、インドア派な印象を取り払ってみました。・・・いや、実際はインドア派だけど。僕は読書派だし、幻もゲームとかやるし。・・・本当はアウトドア派だった的な発言をしてすみませんでした！

よし、謝罪はこれくらいでいいだろう。今僕たちがいるのは、デートの定番（なのか？）、遊園地だ。今日は十月十五日、平日だから別に学校をサボったわけではない。というのは、学校の設立記念日なのだ。平日ということはつまり、今日の遊園地はかなり空いている。乗り物に乗り放題だ。普段なら下手をすると何時間も待たなければいけないような乗り物に、五六分待てば乗れるというのはとても気持ちがいい。

一応言っておくけど、今日は命題の日でもある。今日の命題は”読書をする意味”だ。僕はもちろん、彼女も本を読むので、この命題はなかなか面白い。今日は僕が答える番なので、帰りの電車でも答えるか。とりあえず今はデートを楽しもう。

「次はアレに乗りましょう、春君」

幻が結構怖めなジェットコースターを指差す（彼女は意外と絶叫物好きだった）。

今日の幻の格好は、動きやすそうなジーンズにランニングシューズ、上は白いカーティガンを羽織っている。対する僕はジーンズに運動靴、上はジャケットという幻と似たり寄ったりの格好だけど、なんていうか・・・幻のほうが数段目だって見える。くそ、これが美人補正か・・・神様め、なんて非道なことを。

「何をばおつとしているの、もしかして・・・怖い？」

「な、何だとー！　僕がジェットコースター如きに怖がっているだと。面白いことを言うじゃないか。だったら勝負だ。これから僕と

幻が順番に乗り物を選んでいってそれに乗る、そして先に根を上げたほうの負けだ」

幻の馬鹿にしたような言葉に僕は対抗する。大丈夫、女の子なら誰もが恐れるアレが、ここにもある。しかもうわさによるとこの遊園地のそれは、全国で一二を争う怖さだそうだ。この勝負勝ったな！「ふっ、面白い提案ね。なら、勝負をより面白くするために罰ゲームを設けましょう。罰ゲームは、そうね、勝ったほうが負けたほうに三つ命令できるとおいうのはどうかしら？」

「三つ！？」

ランプの魔人かよ！しかし確実に勝てるカードを持つ僕としてはここで引き下がる理由はないな。

「いいだろう。受けてたとう」

こうして僕たちの戦いは始まった。

一時間経過。現在僕たちは食べものを食べられる休憩コーナーにいる。ちなみにまだ決着はついていない。

これまでに僕たちが乗った乗り物は、ジェットコースター×三だ。やはり、怖いものというとジェットコースターになってしまうのだろう。僕はそういう系に特に抵抗はないが、こつも連続で乗り続けると、さすがに気持ち悪くなってくるな。

いいだろう、そろそろ切り札を使うか。時間もプラン通りだ。

「もう暗くなってきたし、次がラストとだな。僕のとっておきを見せてやる」

別に自分がつくったわけではないけど、少し自慢げに言ってみる。

「いいでしょう、それでそのとっておきというのは？」

「それはついてからの楽しみだ」

まだここでは僕の狙いは内緒にしておく。自分の目で直接見たほうが驚きも倍増するってもんだだろう。

それから、僕たちは目的地にたどり着いた。そこはそう、お化け屋敷だ。

”黒き洞窟”というのがその名称だが、これは・・・話で聞いて

いた以上の雰囲気だ。怖がりの人ならまず入ろうと思わないな。

僕は幻の反応を確かめようと横を見る。そこには、震えて青ざめている少女がいた。え……もしかして怖がりさんなの？

「あの、今ここで負けを認めるなら、入らなくてもいいんだけど」「何を言っているの？ 私が逃げる理由はないわ」

ああ、強がっちゃってるな。これはもう、入るしかなさそうだ。

空いてるだけあり、並んで五分ほどで僕たちの番が来た。彼女は依然として震えているが、逃げるといふ選択肢はないようだ。ここ、ゴールまで十分かかるらしいけど、何分で根を上げるかな。

僕はため息をつき、彼女とともに入り口へと向かっていく。

初めての外デート、場所はもちろん（後書き）

ラストの方がミスで抜けてしまっていました。

現在は修正した形になっております。

修正前の状態を読んでくださった方、申し訳ありませんでした。

お化け屋敷から今出てきたところだ。現在、僕はすすり泣いている。^{おとぎ}幻を背負って遊園地の出口に向かって歩いていて。彼女はなんと、最初の仕掛けでギブアップした。そこからずっとおんぶ状態。お化けの人も気を使って過度な怖がらせ方はしなかったが、機械の仕掛けはそんな僕たちにもお構いなしに仕事をしてきた。ぜひ空気を読める機械を作ってほしい、と切実に思った。

彼女は根を上げてから一度も喋っていない。僕もそんな彼女をいじることはせず、遊園地を出て、駅のホームについた。

「そろそろ落ち着いた？ あそこのベンチに座ろうか」

やはり駅にもそれほど人がいないので、僕たちは近くのベンチに腰掛けた。

「ありがとう」

素直に礼を言う彼女。あれほど泣いたことだし、相当疲れたのだろう。

「ええ、もう大丈夫よ。今私をおびえさせているのは、春君に私への三つの命令でどんなことをされるのか、ということだけだから。先に言っておくけど、あんまりエッチすぎるのはだめよ。ちょっとなら、まあ、問題ないけど」

「そんなことするか！」

どんな誤解をされているんだ。これはあまりにもひどいんじゃないか。僕が今までそんな想像をさせるようなことをしてきたわけが・・・いや、意外としてる？

「ふふつ、冗談よ。それより、そろそろ命題について話してもらいましょうか」

命題、なんかすっかり忘れていたが今日は僕が答える番だったな。今日の命題は”読書をする意味”だ。

「読書をする意味か。これは前に話した”勉強をする意味”と似て

いるね。やっぱり僕の考えも前と同じ、自己形成のためだな。今回の命題のほうがより具体的だけど」

”勉強する意味”は僕と幻が初めて語った命題だ。わずか一カ月半ほど前の話だけど、もうずいぶん前のことのように感じる。

「本を読むこと、それで得られることはいくつか思いつくけど。まずは言葉、ボキャブラリー。ボキャブラリーが多いってのは、話していて面白いというのにつながるし、選べる言葉が多いほうが、自分の思っていること、自分の内にある感情をより伝えられるよね。もちろん持っている言葉が多いことだけが、面白い会話の条件ってわけではないけど、決して小さな要因ではないはずだ」

僕ももう少しボキャブラリーが多ければ、幻ともっと楽しい会話ができるのかな？

「もうひとつは思想、個性。個人的にはこっちのほうが言葉よりも重要だと思う。それに、これはこの前の”ほかとの差異”ってのに関係するね。評論はもちろん、小説でも作者のあらわしている主人公の考え方、主人公を通して伝わってくる作者の思想、そういうものがあるだろう。それが自分の思想の糧になるんじゃないかなって思う。僕自身もそういう経験があるし、幻だってあるだろう？ 読書とは、それに含まれている思想、意見によって自分の考え方、人間性に厚みを与えていく、そういうものの一つ、それが僕の考えだ」

僕の考え。これも考えてみると面白いな。

「僕の考えつてのも、僕の読んだ本がその形成に大きく関わっているのだから、はたして本当に”僕の”と言っているのかな？ それにその本を書いた作者も、おそらく何かしらの本を読んでそこから何かを得ているだろうから、そうしてどんなさかのぼっていくと、どこに行き着くんだろう？ 古代人かな？」

「もしあなたの思想が、みんなの思想が、その人が読んだ本から感じたことから成り立っているものだとしても、それを行ったのはあなた自身、その人自身じゃない。だったらそれはその人のものだわ」

そうか、そう考えることもできるのか。何か、今回は僕が語って彼女に何かを感じさせる役だったのに、逆に彼女からまた教えられたな。幻の言葉、これも間違えなく僕の思想を深めてくれているのだろう。

「どこに行き着くのかというのは、どうなんでしょうね？ 思想が人間から人間へ伝わっていくものだとなると、はるか古代に生きていた人たちなのかもしれないわね。もしくは、神とか？ だとしたら、ゴッドジョブね！」

ゴッドジョブ！・・・グッドジョブ！か。最後に余計なことを言った幻。このギャグが僕の思想に反映されるのは避けたいな・・・「今回はここまでにしておきましょうか。まだ降りる駅まで三十分ぐらいあるわね」

彼女はかなり眠そうだ。もともとインドア派なのに加えて、今日のはしゃいだり泣いたりとずいぶん体力を使ったから、そろそろ限界だろうでも、たぶん彼女は自分からは寝ない。僕に気を使って、このまま雑談でもしようとするだろう。だったら僕にも考えがある。「ところで、僕は三つの命令の一つを使いたいんだけど、いいかな？」

彼女は僕の唐突な質問に少し怪訝な顔をする。

「もう使うのね。まあ約束は約束だし仕方ないわね。で、何に使うの？ ここは公共の場なのだから、節度は守ってね」

相変わらずひどいことを言う幻。そんなに信用ないのかよ・・・「それわもちろんわかってるよ。僕はここで三つとも使おうと思う」

これから僕のやることを自分で考えてみても、もったいないなうって思う。

「一つは、僕はさっきから肩が寒いからそれを暖めてほしい。二つ目は暖め方の指定。そのままこっちに倒れてくるようにして。そう、そんな感じ。そして三つ目、そこで動かれると気になるから、寝ていてくれると助かる。降りる駅が着たら教えるから」

三つの命令で僕は僕に寄りかかって寝る幻を完成させた。彼女は
その意図がわかったようだが、命令なら仕方ないわね、と言ってす
やすやすと眠った。

楽しいこと尽くしだった今日の外出。外に出かけるのもたまには
いいな、としみじみと思い僕も彼女のほうに寄りかかった。

夕食会への招待状

今日、僕は幻おしきの家で月に一回行われる夕食会に招待されている。どうやら、影かげりさんの仕業らしい。”夕食会”という言葉に、なんだか壁を感じる。やはり家が屋敷なだけあって、そういう催しがいろいろあるのだろう。

ちなみに今日はおとぎの家族は全員いるとのことだ。幻と幻の両親、それに影さんとまだ知らない余人のお姉さん。

それにしても、家族に挨拶とか半端じゃなく緊張する。彼女と付き合っている以上、こんなイベントが発生することは想像できなくもなかったけど、それはあくまで想像。実際に起きるとやはり緊張せずにはいられない。キャナットヘルプ、ブイイングだな！

・・・失言だったかな？ まあいいや、話を戻そう。

僕は今、幻の家の前にいる。現在時刻は午後二時。夕食にはまだだいぶ早い時間だが、この時間に呼ばれた。話によると、今回の夕食会はいつもと違って参加者は間淵まふち一家と僕だけ、料理は幻のお姉さんとお母さんの手作りだそうだ（幻は料理がからつきできない）。こんな屋敷に住んでいるだけあって、普段はシェフに作ってもらっているらしいが、今回は僕の歓迎の気持ちを込めて手作り料理を振舞ってくれるらしい。

なんて現状把握をしていると、間淵家の門が開いた。そして中から三人の女性が出てきた。そして僕のほうに歩いてきた。

「こんにちは。あなたが春君ね。私は間淵なぎ風、お母さんってよんでいいわよ」

風さんの年はどう考えても四十近くあるはずだが、三十台、いや二十台後半と言っても通用する見た目だ。背は幻よりも高い170センチってところだろうか、雑誌に載っていそうな見事なプロポーションを持っている。彼女の表情はどこか、人を安心させるようなところがあり、優しいお母さんという感じだ。

「へえ、君が春くんか。思ってたより可愛いじゃん。あたしは長女の間淵光^{ひかり}。こっちが四女の間淵白^{ましろ}。よろしくな！」

今喋っている光さんは幻や凧さんを凌駕するプロポーションと抜群の美貌の持ち主だ。髪は少し赤みがあり肩を超えるぐらいの長さで、ポニーテールにしている。口調が男っぽいかっこいい感じで、それと見た目とのギャップがまたいい。

彼女の後ろでもじもじしているのが白さんか。第一印象はお嬢様背は150ちよつとの小さめで、ドレスのような服を着ている。髪は金髪のカールだ。おそらく恥ずかしがりやなのだろう。僕と目が合ったとたん真っ赤になってしまった。

「ま、白です。よろしく願いしましゅ」

・・・沈黙が訪れた。いい間違えなのかわざとなのか分からないので、とりあえず黙ってみる。

すると、彼女は消え入りそうな声で「よろしく、お願いします」といい直した。やっぱりいい間違えか。まあ本当は分かっていたけど。

「えっと、よろしく願いします。三人でお出かけに行ってくるんですか？」

「いえいえ、あなたも一緒に行くのよ」

「そうそう、これから夕食の買出しに行くんだ。一緒に来てくれるだろ？」

夕食の買出し。そこからすでに手作りなのか。

「はい、そういうことなら。店までは歩いていくんですか？」

「いえ、車で行く予定だけど乗り物に酔っちゃう人かしら？」

「あ、いえ、大丈夫です」

会話をしていると家の方から車が走ってきた。僕はあまり車に詳しくないので車種は分らないが、外車であることだけは確かだ。運転手の方は執事だろうか？

「よし、乗った乗った。母さんは助手席であたしたちが後ろな。後ろは狭いから白は春くんのひざの上だな」

「「えっ!!」」

僕と白さんがシンクロした。いや、それはさすがに・・・

「あははは、冗談冗談。つめれば三人ぐらい座れるぜ。なんならあたしが春くんのひざ上に座ってもいいけど」

「もう、からかうのはよしなさい。大丈夫よ、十分に座れる広さだから。気になるならもう一台車を用意するけど」

「だ、大丈夫です!」

僕はあわててそう答える。よく見れば三列シートだし、もう一台車を用意するなんてそんな贅沢なことは、貧乏性の僕には考えられないことだった。

僕たちは車に乗り込む。

「それじゃあ出発!」

光さんの掛け声とともに車が発進した。非常に特徴のあるメンバ―をのせて。

そして二時間後。買い物を終えて再び家に帰ってきた。車の中は、そこが車の中と感じさせないような車の中だった。きっとものすごくいい車なのだろう。

「今日買ったものは重ねると危ないから三列目のシートに置こうか」という明らかないたずらによって、帰り道はいすが二つで乗る人が三人、つまり本当に僕がひざを貸す羽目になりかけたが、トランクという救済によって僕は無事に三列目に座れた。光さんのいたずら心、半端ないな。

ようやく光さんから解放された僕。車の荷物は家の人（メイドだろうか）がやってくれるらしいので、僕たちは家に入った。

「おじゃましまーす」

彼女たちはこれから料理作りを開始するらしく、僕はそのまま幻の部屋に行くように言われた。ちなみに買い物には付き合ったが、何を作るつもりなのかまったく分からなかった。幻の部屋へはもう何度も来ているので、案内なしでつくことができた。

僕はノックをした。

「幻、僕だけど、入るよ」

そういつて入ると、中には三人いた。

一人はもちろん幻、あと二人は知らない女性だ。と言っても間違えなく彼女の姉だろう。

「あらもう着いたの。お疲れ様、じゃあ早速だけど参加してくれるかしら」

幻たちはゲームをしていたらしい。そして僕に参加を促した。

いや、その前にその二人の姉さんを紹介してくれよ！ ほかの二人もそう思ったらしく、僕のほうを向いた。

「その前に自己紹介させてね！ わたし、間淵祭、ヨロシクねっ！
！」

ハイテンションな彼女はスポーツでもやっていそうなさわやか系美少女。髪は茶色で、肩に届かないぐらいのさっぱりした髪型。彼女の例に漏れず見事な体形をしている。

「私は間淵^{まづみ}。間淵家の三女よ。春君だっけ？ よろしくね」

もう一人は凜としているお姉さんって感じた。見た目は幻に似ているけど、幻より背が高い。

これで僕は幻のお父さんを除く全員と顔を合わせたわけか。なんていうか・・キャラ強すぎ！ 家族のうち誰一人として”ノーマル”な人がいない、そんな印象の間淵一家であった。

料理の得意な

ゲーム開始から二時間、夕食ができたので僕たちは幻の部屋おとしむを後にした。ゲームしていて分かったことだが、三人ともゲームうますぎっ！明らかにやりなれている感じだった。

僕たちは居間へ向かった。今に入るのは初めてだが、これはなんというか、とても大きな円いテーブルがそこにはあった。家族全員で食べるには明らかに不必要な大きさだ。一人ひとりに十二分なスペースが与えられている。

「おまたせ」

凧なぎさんが僕たちに座るように促す。椅子は十個。ちょうど一人一席に座るようになっていて。僕の右隣に幻が左隣に白ましさんが座った。「後かげりいないのは、影兄貴と親父だけか。あたしが呼んでくるな！」そういつて光ひかりさんは部屋を後にする。

今、テーブルには七人ついていてるが、誰も食事をとりにいこうとしない。おそらくメイドか執事が持ってきてくれるのだろう。なので僕も黙って座っていることにした。

二三分後、光さんと影さんとお父さんが居間に入ってきた。

「や、春君」

影さんは気さくに声をかけてきた。今日は眼鏡をかけている。

「君が十坂春君じっさかだね。私は幻の父、間淵啓あきいだ。今日は食事を楽しんでいきなさい」

「はい、よろしく願います」

幻のお父さんは、紳士代表のような紳士だ。身長180という大柄にも関わらず、相手に威圧感を与えない、見た目で判断するべきでないといわれるかもしれないが、それでも一目でしっかりした大人なんだとわかる。

「さあさあ、そろそろ料理を持ってきてもらいましょうか」

凧さんがそういうと、奥の厨房から一度に十人もの人が料理を運

んできた。全員メイドだ。本当にいたのか、メイド・・・

僕の前に料理が次々と並んでいく。何かのコース料理なのだろうが、手作りでコース料理って、凧さんすごいな。

そんなことを考えていると、メイドの方に、「お飲み物はいかなさいますか？」と聞かれた。こういうときは何かカクカナの名前を言わなければいけないのかと思ったが、幻が普通にお茶を頼んでいたので僕もそれに倣った。

それから、招待客の務めであろう、料理についての賞賛を述べた。

「いや、それにしてもすごいですね。コース料理が作れるなんて、凧さんは料理が得意なんですね」

「いいえ、料理を作ったのは主に白で、私と光は簡単なものを手伝っただけよ」

そういわれて、僕は隣の白さんを見る。彼女は恥ずかしそうに、でも少しうれしそうに微笑んできた。

「そうなんですか。料理のできる女性って素敵ですね！」

そういうと間髪あけず、幻が僕の足を踏んだ（誰にも見えないように）。しまった、彼女は料理ができないのだった。

それを見ていなかった白さんは、ありがとう、とさらに赤くなっ

た。

「ははっ、春君、白のことをくどいてやんの！」

光さんが余計なことを言う。何でそんなことを！ そんなつもりじゃなかったんだ！

ぼくは明らかに不機嫌になった幻と、僕にほめられて少しうれしそうなお白さんに挟まれて食事を食べた。食事に手をつける前は幻を起こらせたことを気かかっていたけど、一口食べてみると、そのあまりのおいしさに僕は夢中で食事を食べた。

そして食事終了、僕はいくつかおかわりをさせてもらった。全員でご馳走様の挨拶を終えるとすぐに、幻は僕を部屋に連れて行くとした。間淵一家もそうしなさいといったので僕は挨拶をして今から出ることにした。

「今日は食事に招待してくれてありがとうございます。とてもおいしい料理がたべれてうれしいです」

僕は率直な感想を言った。

「満足してもらえてよかったよ。食事は月に一度あるから、君さえよければまた来なさい」

啓さんはそういつてくれた。

「ところで君はもう聞いたかな？ 命題について」

「あ・・・はい」

命題について、この家では結婚の条件が家族全員の命題に答えることなのだ。

「そうか。命題については、私からいきなり聞くということはしない。君がもし幻と結婚したいと思ったときは、君からそういつてくれれば私は命題を出そう。だから、そんなに緊張する必要はないよ。ああ、結婚相手については別に幻でなくてもかまわないよ」

・・・。

最後に余計なことを付け足したお父さん。この人も意外といたずら好きなのだろうか。みんなの視線がいつせいに白さんに向かう。白さんも僕と目が合い、今にも倒れそうなほど真っ赤になった。

「ありがとうお父さん、そろそろ私と彼氏の春君は部屋に戻ろうと思います」

幻は怒りを隠そうともせずになんて言っつて、僕を引っ張っていく。

このあと僕と幻との間で出んな会話があったかは、言うに及ばないだろう。

それから約一時間、幻から説教されて（おもに白さんのこと）僕は解放された。

最後に彼女は、少し不安そうな、そんな表情で僕に問いかけてきた。

「料理ができない人は嫌い？」

・・・ああ、あのことを気にしていたのか。そんなの、答えは決まってるじゃないか。

「
たしかに料理が上手なことは、魅力的なポイントだ。でも、それがすべてじゃない。そうだろう？」

間淵家まぶちでの夕食会の二日後、今日は日曜日。僕は再び幻おとぎの部屋に
来ている。

そう、今日はおなじみの命題の日だ。そろそろこの展開にも慣れ
てきただろう。

だが、今日はいつもとちょっと違う。具体的に言うと、いつもよ
り二人多い。

二人。それは間淵家の次女と四女、祭さんまつりと白さんましろだ。祭さんが、
僕が遊びに来たのを見つけて、たまたま家にいた白さんとこの部屋
にきたわけだ。机を中心に円く座っていて、向かい側に幻、右側と
左側にそれぞれ、白さんと祭さんが位置している。ちなみに、三人
ともかわいらしい部屋儀を着ている。

祭さんとか、どう見てもアウトドア派なのに、日曜日に家にいる
んだな。そういえば、先日のゲームもかなりの腕前だったけど、ま
さかのインドアとアウトドアの両立派か？ そんなバカな・・・

「はるっちは今日も命題ごっこするの？」

はるっちって・・・今まで一度も言われたことがない、たとえ
思いついても一般的な人ならばまず口にしないような、そんなファ
ンシーな呼び名に少し当惑する。・・・ファンシーって使い方あっ
てるっけ？ あと、命題ごっこって言うな。

「そうです。私たちは今から命題ごっこなので、ご退室ください」

幻、お姉さんたちにも容赦ないな。でも確かに、彼女たちがここ
にいても退屈なだけだろうからな。

「幻ちゃんはずれないなっ！ 邪魔なんてしないからいてもいいで
しょ？ お姉さんたちはひまひまなんだから。お願い！ 絶対邪魔
しないから、いたずらもしないし。ね、白ちゃんも話聞いてたいよ
ねっ？」

「うん・・・春さんと幻ちゃんがいいなら」

相変わらずのかわいらしさの白さん。年下だったら白ちゃんって呼びたいかわいさだ。

・・・いや、「冗談だけど？

「僕は別にかまわないけど」

ここで出て行けと言うほど気の強い人間では、僕はない。それは気が強いというか、ただひどいだけかもしれないけど。幻も「そこまで言うなら」と、無理に追い出そうとはしなかった。きっと、普段から中のいい姉妹なのだろう。

「さて、今日は私が答える番ね。命題は”愛情と憎悪”だったわね」僕はうなずく。そう、今日は僕が出題者なのだ。

「愛情と憎悪、愛と憎しみ。これらは一本道の端と端のとても遠いところにあるように感じられる言葉ね。でも、だからといってこれらは一方から一方に移らない固まっているものというわけではないわ。むしろ簡単に入れ替わる、動きを持ったものなの」

「それはレポートみたいなものなのかにや？」

白さんがかんだ。にやって・・・ナイスだね！！

やはりというか当然というか、白さんは恥ずかしさのあまり、耳まで真っ赤になった。ああ、これで年上なんて、世の中には不思議なこともあるんだなあ、としみじみと思った。

「ええ、そう思っただけじゃない。身近な例で言うと、気になっていた人の悪い一面を見てしまった時、また、気に入らなかった人の思いがけない一面を見た時、愛情と憎悪の入れ代わりが起きるでしょう。これは”愛情と憎悪”というより”好きと嫌い”をあらわしているけれど、愛情と憎悪についても同様のことが言えるわよね」

「なるほどなあるほど、つまりはギャップがミソってわけだねっ！！」

相変わらずハイテンションな祭さん。でもまあ、結構的を射ているな。良くも悪くもギャップが鍵か。祭さんはこう見えても間淵家の一人であるだけあって、こういったことは得意なんだな。ちよつと見直した僕。・・・これもギャップか？

「そうですね。入れ替わり可能とはそういう意味です。ほかには、愛情と憎悪は大きな視点から見れば、”思う”というおなじ枠の中に含まれるというところかしら。これは別に”愛情と憎悪”に限らないことだけど。ちなみにこのときの対義語は”思わない”にあたる無関心ね。”愛情と憎悪”と言われて思いつくのはこれくらいかしら」

視点の切り替えか。一見対義語に見えるものも、大きくみれば同じカテゴリーに含まれているってことか。

「なるほど、幻ちゃんさすがだねっ！ 対義語が仲間に見える、この関係は、名付けて・・・うん、何だろう？」

名付けないのかよ！？ シュールなギャグをかましてくれた祭さん。ならば僕が代案を考えるしかないな。名付けて、赤白語！！・・・いや、赤と白はなんか対極っぽいし、”色”の種類に含まれるからってことなだけど・・・ダメか。

「うん、思いつかないなあ。さすがに赤白語ってのはセンスないしな」

・・・言わなくて正解だったな。ほっとする僕。

「ground or sky」

白さんが唐突に代替案を出してくれた。しかも・・・ウルトラかつこいい！！

「おお、それで決まりだね！」

祭さんも満足したようだ。白さんはネーミングセンスもあるのか。「もうこんな時間だ」。白、お腹すいちゃったから夕飯作って！！はるっちも食べるよねっ？」

時計を見ると、時刻は十二時半。ちょうど昼時だった。

「じゃあお言葉に甘えて。いいですか、白さん？」

「よ、よろこんで。それで、あの、メニューは何がいいですか？」

「じゃあ、パスタで」

「わ、わかりました。三十分ほどでできるので、それまでお待ちください」

それからちよつと三十分後、僕たちは白さんが料理してくれたパスタを食べた。
味はもちろん。

慣れないことは続かない、でも

今日は特に幻との予定はない。命題の日でもないし、遊びに行く約束もしていない。つまりは僕の日常だ。……。つまらなさそうで悪かったな！ 高校生男子の日常が面白いほうがどうかしてるぜ！ なんて理にかなっていない失言をはいてみる。

土曜日で学校も休みの今日、時刻は午前五時（朝型なのだ）、僕はランニングに出かけようとしている。普段はランニングなどしない僕だが、機能の親の一言でランニングを決心させられた。あの、恐ろしい一言が現状の引き金となったのだ。

昨日のこと、僕が居間に飲み物を飲みに来たところ、テレビを見ていた母親が僕を見てこう言った。

「あれ、何かあんた前より丸くなった？」

これは帰宅部の高校生男子に言ってはならない言葉だ。禁句だろうが！ しかしそういわれて僕は不安に駆られた。ちなみに僕は今まで太ったことがないし、現在も太っていないので、この種の変化にはそれほど敏感ではない。

体格の変化、それが勘違いであることを確かめるために、風呂上に体重計に乗ってみた。

「まさかな、そんなことあるはずがない。テレビのモデルたちを見た直後に僕を見たからそう思ったただだろう、まったくはた迷惑な」しかし・・・測定結果は僕の不安を確かなものにした。なんと、前に計ったときより三キロ増えていたのだ。

三キロなんて些細なことを、と思うかもしれない。僕も他人の話だったらそう言うだろう。しかし、僕は最近特に生活習慣を変えたわけではないのだ。特に不摂生な生活をしていたわけではない。つまり、このままだと少しずつでも確実に、体重は上昇の一途をたどることとなるのだ！

ここまで現実を見せつけられて、黙って引き下がる僕ではない。

体重が増ええたら、元に戻せばいい。太るのがいやなら、運動すればいい。

と言うわけでランニング。運動部には所属していないけど運動音痴ってわけではないので、途中でへばることはないだろう。いざ行かん！

十五分後、僕は今公園のベンチに座っている。幻と初めてあった公園。

僕はここで感慨に浸っているわけではない。へばってしまったのだ！ 今思えば、出かける前のあの言葉がフラグだったんだな。だとしたら、僕はやるべきことをやったというわけだ。

……。これ以上行っても悲しいだけなので黙って休もう。

僕がベンチに座って何となく公園の散歩コースを眺めていると、そこに知っている人が見えた。

身長は165ほど、普段から運動をしているのが見てわかる、きれいな体形だが、同時に魅力的なプロポーションも持ち合わせている。髪は茶色で肩に届くぐらいの長さだが、今は動きやすいように後ろでひとつに結んでいる。彼女は僕に気づいていないようで、そのまま走っていこうとしている。僕は、止める必要はなかったかもしれないが、声をかけてみる。

「祭さん^{まつり}」

僕の呼びかけに気づいた彼女は、そのままこちらのほうへ走ってくる。僕の正面まで走ってきて、さわやかな笑顔をみせる。

「おっはよう、はるっち！ 朝からランニングかい？ 今まで走ってるの見かけたことないけど、いつも走ってるの？」

「いいえ、今日からです。でもそれも今日で終わりそうですが」

「男のがそんなに弱気じゃダメだぞ！！」

祭さんは人差し指をたててウィンクした。こういう一挙一動がさわやかなんだよなあこの人は。

彼女は見た目はさわやかなまま、でも少し緊張した面持ちで僕の

ほうを向いた。

「ねえ、じゃあさ、もしよかったらなんだけど」

彼女は少しもじもじしている。何だろう、彼女らしくないな。

「はるっちさえよかったら、その、これから一緒に走らない？」

「これから一緒に走る？」

「うん、あ、嫌ならいいんだけど・・・」

「いえ、僕もそろそろ走れますし、ゆっくりでお願いしますね」

「うんっ！ あ、いや、そうじゃなくて。今日も走るけど、これからもってことで・・・」

そういうことか。正直、願ってもないことだ。一人より誰かとやったほうが長続きするだろうし。向こうから誘ってくれるなら断る理由はないかな。

「では、これからもよろしくお願いします」

「本当っ！ よかった。断られたらちよつとショックだったよ」

ほつと胸をなでおろして、再び笑顔になる祭さん。

「じゃあ、今日から毎日、朝五時にここ集合だよっ！ それでいいよね？」

「え、毎日ですか？」

意外に多いな、彼女はきつと毎日走っているのだろう。でも僕は週に二三回で十分なんだけどな・・・

「そうだよっ！ こういうのは毎日やらないとダメだし！ あ、でも、もしかしてだけど、わたしと毎日会うのは嫌？」

少しうるうるした目で上目遣いにそう聞いてくる。うん、これを断ったら、さすがに人間失格だろう。

「あまり速く走れませんが、それでもよかったら一緒に走らせてください」

「うんっ！ ありがと！ 大事なのはスピードじゃなくて継続だし、でも毎日走ってればスタミナもスピードもつくよ。だからそんな心配 unnecessary！」

いいことを言ってくれるな。そういわれると、やる気もでてくる。

「よしっ、休憩終了。そろそろ走ろっか！」

「はい！」

こうして、僕は祭さんと毎日ランニングをすることになった。
ん
？ これも何かのフラグ？

三十分後。場所は再びさっきの公園のベンチ。

前回はこれで終わり！　って雰囲気な締め方だったけど、実はまだ続いているのだ。

ベンチにいたのは、ばててベンチに座り込んでいる僕と、まだまだ走れる感じの祭さん^{まつり}。

こんなにも体力に差があったのか・・・運動しているとはいえ相手は女性だなんて考えていた自分が恥ずかしい。

「あはは、初日にしてはすごいよっ！　これならすぐに、もっと走れるようになるって！」

気を使ってくれているのかもしれないけど、そんな雰囲気を一切出さない祭さん。さすがさわやか系美少女と呼ばれることだけはあ
るな！　まあ僕しか呼んでないけど。

「運動後は水分補給が大切だよっ！　白ちゃん^{ましろ}特製のスポーツドリンク、はるっちにもわけてあげるよ！」

彼女は背負っていたナツプサックから水筒を僕に手渡す。でもこれって、さっきまで祭さんが飲んでたやつじゃ・・・

「ん？　どうしたの？　もしかして水がいい？　だったらちよっと待ってて、自販で買ってくるから」

「え、いや、大丈夫です！　いただきます」

そのまま走っていきこうとする彼女を止める。さすがにそんなことをさせるわけには行かない。

僕は改めて水筒を見る。こういうのって、意識しなければなんてことないし、そんなことを考えていると思われるのも気まずいし。僕は何も気にしていない風を装ってスポーツドリンクを飲む。

「わあ、これってもしかして、間接チューだねー！」

ブッ！！　口の中身を吹き出してしまった。

「わわ、大丈夫！？　ごめんね、冗談だよ冗談。まさか、そんなに

反応するとは思わなかったよ」

僕の反応を予想外だと言う彼女。いや・・・想定範囲に入れておいてほしかった。

「明日から、はるっちの分も作ってきてもらうから。それで許してね？」

許すというほど怒ってもないけど、ちょっと仕返しというか、いたずらがしたくなってきた。

「……………」

黙ってみる。

「あ、あれ？　もしかして怒ってる？　とってもとっても怒っているの！？」

「……………」

「ご、ごめん！　じゃなくて、ごめんなさい」

「……………」

「……………」

まずい、泣かせてしまった。ちょっと悪ふざけが過ぎたか。

「なんちゃって、怒ってませんよ」

「ぐすっ、もうっ！　はるっちのバカ！！」

こっちが怒らせてしまった。結構喜怒哀楽の激しい人なんだな。

「すみませんでした」

「本当にどうしようって思ったんだから！　…………でもわたしもかわかったし、これで一対一だね！」

ランニングに誘ってくれたのと、飲み物をくれたのも考慮すると、どう考えても一対十ぐらいだけど、それはあえて言わなくてもいいだろう。

「ふう、今日の運動はここまでだね」

「そうですね」

「ねえ、はるっちはいつもおいかちやんと命題めいだいこっこしてるよね。あれってさ…………わたしもしてくれるの？」

命題、僕と幻はそれについて毎週語っている。そして命題は、もし僕が間淵家まふちの人間と結婚する際には、とても重要な役割を持っている。

祭さんはよく幻の部屋に来て僕たちの会話を聞いているので、実際にやってみたくなっただろう。でも、そんなの自分の彼氏とやればいいのに。この人に、まさか彼氏がいないなんてことはないだろうに。

まあ、暇つぶし程度の提案なんだろう。だったら断る意味もないか。

「ええ、いいですよ。やりましょうか」

「うんうん！　じゃあわたしが出題ね。じゃあね、”どうして運動をすると気持ちいいのか”、今話し合うにはぴったりの命題だよね！」

運動が気持ちいい理由、か・・・

普段は事前に命題を伝えてあるので十分に考えてから話すことができるけど、今回は下準備が一切ないから、思ったことをそのまま言う形になる。難易度が高い分、自分の本当の意見、飾らない考えが出てくる、おもしろい形式だな。

「ちよつと時間をください、三分でまとめるんで」

「いいよ！　三分と言わずいくらでもいいよ！　あ、でもいくらでもはダメか、えへへっ」

・・・隣で面白いこといわれると、集中力が途切れる。

「祭さん、目、つぶってもらえますか？」

「ええ？　な、何でかなっ？」

「お願いします」

「わ、分かったよ・・・」

素直に目をつぶった。・・・この人、社会に出たら危険な気がする。

僕はその間に考えをまとめる。

・・・三分経過。彼女は眠ってしまったている。・・・でこピンするか。

「てい」

「うわっ！ あれ、いつの間にか眠っちゃってた・・・」

おでこをさすって周りを見渡している。現状把握だろうか。

「もうまとまりましたよ。それと、かわいい寝顔でしたよ」

「見たの！？ かわいいって、お姉さんをからっちゃダメなんだからねっ！ もうっ！！」

からかいがいのあるリアクションだ。お姉さん、そう、彼女はこう見えても（読んでも？）二十一歳なのだ。

もうちょつとからかってみたい気がするけど、これ以上からかうともつきりがないので、そろそろ本題に移ろう。

「お姉さんが寝ている間に考えはまとまりましたよ」

「本当？ 聞かせて聞かせて！！」

”お姉さん”には触れなかったな。きっと気づかなかったんだろう。もしくは、気づいてスルーしたのかだけど、・・・、たぶん前者だろう。さっきまでの経験的に。

「それではお聞きください。そうですね、運動というのを具体的に、登山にたとえてみましょう」

特に登山経験はないけど、ぱつと浮かんだ例がこれだった。

「山登りは体力面のみを見れば、かなりのエネルギーを消費しますよね。経験者はもちろん、初心者だったら、半端じゃない疲労を伴う。あえてプラスかマイナスかと言うなら、マイナスと言えるでしょう。それにもかかわらず、疲れるにもかかわらず、多くの人が登山を楽しんでいる。そして、その中には初心者も少なくない」

祭さんは僕の話に耳を傾けている。彼女は運動だけでなく、こういったものにも興味を持っているのだ。

「さつき、初心者の方がより大きな疲労を伴うといいましたけど、それだけじゃない。初心者は当然ですが経験者ではありません。つまり、登山がどの程度疲れるものなのか性格には分かっているじゃない。」

どのくらい疲れるのかと言うのは、他人の話や本を読んでも結局のところ、自分でやってみないと分からない。それに、経験者にとっても、どの程度疲れるのか分かっていたとしても、それは言ってしまうと、気休め程度のこと。それが分かったところで、疲れるものは疲れる。それでも、それなのに、予想される疲労、又は未知の疲労をおしてまで多くのチャレンジャーが挑戦する。それはどうしてなのか？」

「うんうん、どうしてどうして？」

祭さんがわくわくした顔で続きを促してくる。結構聞き上手な祭さん。相手が興味津々だと話し手もやりやすいな。

「どうしてなのか、それは、ゴールがあるからです」

ここで一度区切る。こういうところは少しもったいぶったほうが、面白く聞けるだろう。

「ゴールがある、目的がある、目標がある。もちろんゴールするまでの過程にも面白いところはたくさんあるだろうけど、今はゴールに注目してください。登山で頂上まで登ったらどうしますか？」

「うーん、景色を見るかな？」

何かを思い出すような顔をしてそう言う。きっと、過去の登山経験を思い出しているのだろう。なんとなく、山登りしたことありそうだし。

「そうですね、そのとき何を感じますか？」

「ええ？ そりゃ、普段見られないような素敵な景色に感動するんじゃないかなあ」

「その感動、つまりゴールしたことで得られる達成感、これが途中の辛さを大きく上まっている。辛さよりも感動が勝る。だから、気持ちいい」と感じるんだと思います」

達成感、ゴールの満足、それを得るためにがんばっている。

「今のはゴールが比較的”近い”例でしかたけど、普段の運動でも自分の”遠い”目標に一步一步進んでいる。それも達成感の一種と言えるでしょう。その感動が”気持ちいい”に関係しているとれる

でしょう」

「そっか。山登りとかの大きなイベントじゃなくても、日々の運動でも理想の自分にゆつくりとだけど、確実に近づいている。だから気持ちいいんだねっ！」

「そうですね。つまりは、運動することで自分の目標、自らが持つ理想に近くなっていく。それが気持ちいいにつながっていく、こんな感じですかね」

まとめてみた。やっぱり事前にゆつくり考える時間がないと、難しいものだな。登山をマラソンにするぐらいの心遣いはあってもよかったのに。

「なるほどにゃん。やっぱり、はるっちはすごいね！わたしだったら、どうして気持ちいいのかだって？、たくさん動いて汗をかけば、体の空気が入れ替える気がする、それが気持ちいい！って言うっちゃいそうだよ」

……。なんかそっちのほうがしっくりくるのが悔しい。あれだけ長々と語ったのに、そんな一言のほうがふさわしい感じがする。

ああ、そうか。問題は長さじゃないのか。大切なのは、相手にそうだと思われること。自分の考えをあてに納得してもらう、それに長さは関係ない、か。

彼女を素直にほめるのは何か悔しいから、最後に少し無駄口を言ってみるか。

「すごいって言っても、祭さんの彼氏ほどではありませんよ」

「ん？ 彼氏？ わたし、彼氏とかいないけど？」

あれ、彼氏いないのか。少し意外だ。

「気になる子なら、いるけどねっ！」

笑顔でウィンクしてくる。気になる子か、彼女に気に入られているんだから、さぞかし変わった奴なんだろうな。

「ふう、そろそろ帰ろっか！今日は楽しかったよ。じゃあ、また明日ね！遅刻したらダメだぞっ！..！」

「はい、また明日」

別れの挨拶を終えて、彼女は爽やかに走って帰る。僕はゆっくりと歩いて帰る。

四人でお出かけ

「はっ、はっ、はっ」

言っておくが、これはくしゃみ三秒前なんていう、次につながる可能性が皆無な状態ではない。もちろん、僕が否定しているのは、『くしゃみ』というフレーズであり、秒数は問題ない。三秒が二秒になっても、ましてや一秒になったところで、正解にたどり着くことはない。

僕は今、おそらく皆の想像の通り、息が上がっているのだ。

それはなぜかと言うと・・・これも月並みな展開だが、サイクリングをしているからだ。

サイクリング。目的地は町外れにあるある丘。メンバーは、僕、おとぎまつり幻、祭さん、そして白さん。ましろ

どうしてこんなことになっているのか、それには少し説明が要る。しばしのお付き合いを。

さかのぼること三日前、僕は幻の家に、月末の計画を立てるために遊びに行った。月末、僕たちはまたどこかに出かけるつもりだった。

「前は遊園地だったから、今回は近くの自転車でいける場所がいいわね、祭姉さんもさそってみようかしら」

幻がそう言い終わるか終わらないうちに、まるでその台詞を待っていたかのような、非常に絶妙なタイミングで祭さんが現れた。

「そういうことならお姉ちゃんに任せなさい！ サイクリングだったらい場所知ってるからねっ！」

胸を張って自信満々にそう言った。

登場するタイミングが良すぎるけど・・・偶然だよな？

「じゃあわたしに任せてね！ その日はどうせ白ちゃんも暇だろう

から誘っておくよ」

そう言ってそそくさと去って行ってしまった。

僕も幻も、まだ任せるとは言っただけ……

「まあ私たちはそういうことに詳しくないし、やってくれるというならお姉さんに任せましょうか」

それもそうか。

さっきはなんとなくごねてみたが、祭さんは言うならばこういうことが得意分野だ。彼女ならきつと、楽しいサイクリングを計画してくれるだろう。

そうだ、回想ついでもうひとつ報告しておこう。

祭さんのランニングはこの日に幻に報告した。

幻は「朝早くおきれないから」という理由でランニングへの参加は辞退したが、もつとも、彼女はスタイル維持はしっかりできているようだから、やせるための運動は特に必要ないのだろう。

それについてはうらやましいと思うけど、おそらく見えないところでなにかしらの努力をしているのだろう。

もしくは、食べても太らないという、特異体質なのかもしれないが……たまにそういうこと言ってる人いるんだよね。そんなことあるはずないのに！

……少し取り乱して失礼。

まあそういうことで、ランニングは僕と祭さんの二人だけでやっている。もう十日ほど続いているが、これは祭さんのおかげというのももちろんあるが、継続の秘訣はもうひとつある。

それは、白さんの差し入れのお菓子だ。

やせるために運動してるのに、お菓子食べてちゃだめじゃん！とツツコミを入れてくれた諸君。お菓子の作り手をもう一度確認してみてくれ。そう、白さんだ！

彼女は、砂糖控えめ低カロリーにもかかわらず抜群においしい、商品化すれば間違えなく大ヒットな、そんなお菓子を作ってくれて

いるのだ。

もう何度も彼女には感謝しているが、もう一度改めて御礼を言いたい。

ありがとう、白さん！

という感じなのだがお分かり頂けただろうか。要するに白さんのお菓子は最高というわけだ！

・・・訂正。要するに、僕たちは今、祭さん主催のサイクリングに参加しているというわけだ。

それと僕が今ゴールを切望して息を切らしているのは、僕の体力が異常にないから、道が険し過ぎるから、などではない。勘違いしないでね！

僕は今、背中に大きな大きなリュックサックを背負っているのだ。中身はピクニックセットと四人分の昼食。ちなみにピクニックセットというあいまいな名称のついたセットが、この重さの主な原因だ。なぜ僕がすべてを持っているのかというと、それは二、三行の説明ですむ。

「幻ちゃんと白ちゃんは体力的に荷物を運ぶのは辛いから、わたしとはるつちとで分担しようねっ！」

祭さんは僕と半分ずつ運んでくれるつもりだったろう。彼女の口調からも、それが感じられた。

でも、日ごろお世話になっている恩に加えて、今回の計画をしてくれた彼女に、重い荷物を持たせられようか？ いやできない。

という経緯から現在の僕に至るというわけだ。現在の僕の状況を説明しているうちに、やっとゴールが見えてきた。

「はっ、はっ、はっ」

ゴールまであと、三百メートル、二百、百、五十、そして、目的

地にたどり着いた。

「うおお」

他の皆がどの辺りにいる確認しようとして、後ろを振り返ったとき、目の前に現れた光景に僕は、柄にもなく目を奪われた。

一面に広がる雲ひとつない空、その画面下側には、紅葉も終わりすでにたくさん葉を落としている木々。自分の家はあの辺りだろうか？ 僕の住んでいる住宅街が、カラフルな砂がちりばめられているように位置している。あんなに大きな幻の家でさえ、砂粒が小石になった程度にしか見えない。

僕の住んでいる町も少し足を伸ばせば、こんなにも自然の広がっている土地があったのか。

しばらくぼつとしていたが、ふと、本来の目的を思い出す。改めて皆を探すと、白さんがゴール三十メートルまで来ていた。

「お疲れ様でした」

「お、お疲れ様です。私の荷物まで運んでいただいて、ありがとうございます」

おしとやかにそう言った。この一言で、ここにくるまでの僕の疲れがすべてすつと消えた。

言葉による癒しって、本当にあるんだなあ。

それから僕たちは、昼食を食べるスペースを作り始めた。もちろん休んでいてくださいと言ったけど、根がまっすぐな彼女は一緒に手伝ってくれた。

二人で荷物を座りやすい場所まで運んで、そしてその中からブルーシートではない、もっと高級そうな何かを出した。

何だろう、これは・・・？

この柔らかな肌触りの正体が気になったが、あえて聞かなかった。聞いてしまえば、僕のような一般人は恐れ多くて座ることなどできないだろうから。

かくして、座れる空間を作り終えた。

「少し休憩しましょうか」

「そうですね。二人が来るまで休んでましょう」

僕はシートに横になる。白さんも服がしわにならないように気を付けながら座った。

「疲れましたね」

「そうですね。白さんは普段、運動とかするんですか？」

「いいえ、どちらかというと、家の中にいるほうが好きですの」

「そうなんですか。僕もどちらかというとインドアですね」

こんな感じの雑談をして、二人の到着を待った。

三分後。あいも変わらず白さんと雑談をしていると、後ろのほうからさわやかな声が聞こえてきた。

「ふう、到着！ 運動は気持ちいいっ！ 幻ちゃんは、ばてちゃったかな？」

声のした方を見ると二人の人影、こちらに手を振っている祭さんと、最後の力を振り絞り、もう一步も動けないという感じの幻が到着したところだった。

すべての力を出し切った幻は、祭さんの肩を借りて、シートまで向かってくる。

「ひどい目にあったわ。こんなところ、軽いノリで来ていいところではなかったわね」

シートに着くなりそう言って、寝転がってしまった。そうとう疲れたようだ。昼食の準備ができるまでは休ませてもいいだろう。

「じゃあわたしたちで昼食の準備しちやおっか！ 今日のお弁当も白ちゃんが作ってくれたんだよ！」

白さんの弁当、これは間違えなく極上の品だろう。

「ありがとうございます、白さん」

「い、いえ。お料理好きなんです・・・」

料理好きでこの性格、おまけにお嬢様な美人とくれば、どれだけもてるのだろうか。ちょっと気になるけど、白さんにそんなことを聞いても、いたずらに場を面白くするだけだろう。日ごろからお世

話になっている僕の中には、そんな選択肢はない。

「準備はこれでオッケーですね。おい、幻、準備できたぞ」

一度寝転がってから身動きひとつしていない幻に声をかけると、彼女はすぐに起きた。どうやら眠ってはいなかったらしい。というか、外で居眠りしてしまうのは祭さんぐらいか。

シートの上に並んでいるのは、様々なサンドイッチにお菓子のクッキー。どれもとてもおいしそうだ。

「これで準備万端だねっ！ それではお手を合わせて、いただきますすー！」

いただきます、祭さんの号令とともに昼食が始まった。

メインテーマ

「ご馳走様でした!」

「いえいえ、お粗末さまでした」

昼食終了。

全員自分の分を残さずに食べきった。これは当然の結果だろう、白^{ましろ}さんの料理を残す輩がいたとしたら、そいつには味覚がないとしか考えられないな!

「ふう、満腹満腹大満足だねっ! ご飯も食べたし、体力も回復したよね? そろそろ遊ぼうよ!」

そう言って、祭^{まつり}さんは荷物の中からフリスビーを二つ出した。

・・・こんなものまで持ってきていたのか。通りで重いわけだ。「二つ持ってきたから、二人一組になってキャッチフリスビーやろうよ!」

「楽しそうね。でも、フリスビーなんて家にあったかしら?」

「フリスビーは買ってきたんだよ! それじゃあチーム決めよっかわたしと幻^{おとぎ}ちゃん、はるつちと白ちゃんでもいいよね!」

おそらく到着順だろう。文句を言うべきところではないので、皆がうなずく。

僕は白さんとか。彼女がどの程度運動できるのかわからないからとりあえず軽くやってみよう。

「よ、よろしく、お願いします」

「よろしくお願いします」

「そうだ、言い忘れていたけど、このゲームには特別ルールがあります!」

特別ルール? まあ確かに、ただフリスビーを投げ合っつても味気ないし、そういうものがあつた方が盛り上がるかもしれない。こんなところにまで粋な細工をしてくるとは、さすがは祭さん。

「なんと、なんとなんと! フリスビーをとれなかった方は、相手

に犬、メイド、妹のどれかになって次にどちらかが失敗するまでな
りきることに！ それと、はるっちは男の子だから、お兄ちゃん、執
事、カエルのどれかね！」

祭さんを除く全員がずっこけた。な、何だって！？

「異論はわたしが認めません！　じゃあ開始！！」

年長者の強制開始しやがった。年功序列制、こんなところにも潜
んでいたのか……

幻と白さんは、ルールの撤回をあきらめているようだ。

きっと家族間では日常茶飯事な無茶振りなのだろう。ならば僕も
二人に倣って従うとしよう。

混乱のあまり、カエルという突っ込み待ちをスルーしてしまった。
でも、これくらいのミスは許してほしい。

「じゃあ、とりあえずゆっくり投げらんで。まずは腕慣らしからに
しましょう」

「は、はい。どうぞ」

一投目、僕がなげる番だ。まさか始めから失敗するわけには行か
ない、最初なのだから確実に取れるように投げよう。

僕はできるだけ力を抜いて、万が一にも取れないなんてことがな
いように、ゆっくりと、相手が一步も動かなくていいように、そん
な気持ちでこめて投げた。

フリスビーのほうも空気を讀んだらしく、僕の狙い通り、顔の前
に手を出せばそれだけで取れるような軌道を描いて白さんに向かっ
ていった。

そして……万が一がおきた。

「いたっ！」

理想の軌道で進んでいったそれは、そのまま、彼女の顔面に激突
した。

「あ」

やはりというか、セオリー通りというか、彼女は運動音痴だった。

「だ、大丈夫ですか？」

「へ、平気です」

鼻に当たったのだろう、彼女は涙ぐんで、それでも僕を心配させないように、微笑んでそう言った。

・・・今僕に、半端じゃない罪悪感がのしかかっている。

「白ちゃんアウト！！ 罰ゲームを忘れちゃだめだよ」

このミスをもみ消してしまおうかと思ったけれど、それは祭さんによって阻まれた。

退路を断たれた白さん。そして、彼女が口を動かす！！

「申し訳ございません、ご主人さま」

メイドとか語尾かみの混合技！ 言葉だけで吹っ飛ばされそうになった。

彼女は真っ赤になりながらも、実によどみなくそう言った。

・・・きつと普段から罰ゲームと称して、間淵家で愛でられているのだろう。

「そ、それでは、今度はこちらから投げますね」

ひゅっ。

キャッチはあんなに残念な感じだったのに、投げるのはそれなりだった。

・・・この勝負、もう展開が見えたな。

三十分後。僕たちは再びシートに座っている。

ゲームのその後の展開を、ざっくりと説明しておこう。

ゲームの終盤は彼女も多少取れるようになっていたが、僕は終始ノーミスだったので、罰ゲームは彼女のみが受けていた。

それに、彼女も最初こそ恥ずかしがっていたものの、途中からは彼女の演劇スイッチがはいったらしく、ドキッとするワードがいくつも飛び出してきた（彼女は実は、料理だけでなく、演劇もできるのだ！）。

すべてを紹介して、彼女の魅力を知ってもらいたいところだが、

そんなことをすれば万単位の文字をお読みいただくことになる。それは、こちらとしても避けたいので、一部抜粋というところに落ち着かせてもらおう。

「お兄ちゃん、とってとって！」

「こっちに投げてほしいワン」

「あ！ 申し訳ございません」

「べつに、とってくれてもうれしくないんだからね！」

「きやうくん」

以下略。

そして、僕の心を幸せにしてくれた白さんはゲーム終了後、スイッチが切れて急に恥ずかしさを取り戻して、どこかへ走り去ってしまった。

「春君、あなたがルールにかこつけて白姉さんをあんなにいじめるなんて・・・正直引いているわ」

「はるっちひどかったよ！ 悪魔だったねっ！！」

僕は現在、二人からお叱りを受けている。どうにも納得できないけど。

だってさ、そんなのってないよな！

しかしそれを口にすることはできないので、謹んで説教を受けていた。

それからさらに五分たって、白さんがもどってきた。目が少し赤くなっている。

「大丈夫だった？ お姉ちゃんがちゃんと言っておいたからね！」

いや、本を正せばあなたのせいなんですけど・・・

「大丈夫、それにゲームだったんだから。春さん、勝手に走っていつてごめんなさい。いやな気分になったでしょう？」

「い、いえ。そんなことありませんよ。こちらこそ、何かすみませんでした」

「うんうん、悪いと思ったら素直に謝る。それが大事だねっ！」

完全に天然百パーセントの祭さん。でも、この場にいる中で一番ひどいのは、祭さんと一緒にさんざん僕を叱った、幻だろう。策士幻！　なんか強そうだな。

とにもかくにも、こうして僕への言われなきいじめも終わった。

それはよかった。本当に。

「さて、一件落着いたところで、今日のメインイベントに移りましょうか」

幻が促す。

メインテーマ。

今日の本題。

ここまで自転車で来たことや、自然の中での昼食、それに先ほどのフリスビーは、言うならば序章。メインは別にあるのだ。

「そうだね、そろそろ始めよっか！　わたしもちゃんと考えてきたよ！」

「私も、大丈夫です」

皆準備はしてきたようだ。当然だが、僕もそれを怠っていない。

「それでは、はじめましょうか。四題命題」

6 (四題命題その一)

四題命題、これが本日のメインイベントだ。
とりあえず、軽く説明しておこう。

四題命題とは、命題を一人ひとつ考えて、それをカードに書く。
全員が各々の書いたカードを持って円形に座る。そしてカードを隣の人に回していく。十分に回したらシャッフル終了。自分の手元に来た命題について十分の思考時間を設けて、その後開始。カードシャッフルの号令役から時計回りに担当の命題について答える。

これは、この前祭さんと命題の話をしたときに思いついた方法だ。事前の準備なしでやることで、脚色していない生の意見が出てくる。ちなみに四というのはこの場に四人いるからそう名付けただけで、その時その時によって数字は変動する。

こんな感じかな。まあここで説明を聞くより、実際に見たほうが早いだろうってことで、そろそろ始めよう。

「それでは、カードをシャッフルしましょうか。終わりの合図は私が出すわ」

幻が号令役を買って出た。普段はそこまで積極的ではないけど、ことが命題名だけあってわくわくしているのだらう。かくいう僕も、初めての経験に少しドキドキしている。

「それでは始めましょう」

号令とともに自分の右隣にカードをまわしていく。ちなみに現在の並び方は、僕から見て右が幻、左が白さん、正面にいるのが祭さんだ。つまり、答える順番は、幻、僕、白さん、祭さんとなる。

「もうそろそろいいでしょう」

シャッフルを始めてから一分たって幻は終わりを告げた。

そしてそれぞれが手元のカードを確認。ここで自分の書いたカードがきたらもう一度やり直しなのだが、今回はうまくいったようだ。僕の元に来たカードは、「それぞれの常識の違い」だ。ちなみに僕が書いたのは「自由とは何か」。誰の元へ言ったのかはわからないけど、ぜひ意見を聞いてみたい命題だ。

今は思考時間だ。前回の教訓から、さすがに十分はないとまとめられないということから設けられた時間。それに、祭さんと白さんは初心者なのだから、これくらいの時間がちょうどいいだろう。僕も手元の命題に考えをめぐらす。

「それぞれの常識の違い」か。とりあえず、常識とは何か、どうやってそれを獲得するのか、ってところから入っていきうかな。それから、その違いがもたらすこと、どうやってそれを解決するのか、なんてところまで突っ込めれば万々歳だけど、それは欲張りかな？限られた時間で考えられるところまで考えて、それをまとめよう。

十分後。思考時間終了。

僕は何とか自分でじっくり来るぐらいにはまとめられた。前回は三分だったからなあ、より過酷な条件で経験しているので、それが役に立ったのかもしれない。

「それじゃあ始めましょうか。私に来た命題は『本音と建前』、なかなか興味深い命題だわ」

本音と建前か。

それは僕の出した命題とは違うから、白さんが祭さんのものだろう。だとすると・・・二人のことを初心者なんてなめるべきではないな。命題の題名を聞いただけでも、その人の感性は多少なりとも伝わってくる。

考えてみれば彼女らは間淵家まふちの次女と四女。命題については幻以上に触れているのだ。この場で一番の初心者は、僕じゃないか。

「本音と建前、まずはどんなときに本音を、どんなときに建前を使

っているのか考えてみましょう。そうすると、ほとんどの場面で、私たちは本音ではなく建前を使っていることが想像できるのじゃないかしら。私の考えを言うと、会話の九十九パーセントは建前からできているわ」

いきなり大胆な仮説。でも確かに、僕たちはいつ、本音を言っているんだろう？

「ここで誤解してほしくないのは、建前というのは悪いものではないということ。好きでもないものを好きといたり、つまらないものを面白いと笑ったり、建前と聞くとそういうものが思い浮かぶでしょう。建前というのは自分の感情を押し殺した虚構であるように思いがちだけど、それが悪であるとは限らないのよ」

彼女はここで一回お茶を飲む。その間、話すものは誰もいない。きつと皆が「本音と建前」について考えているのだろう。

命題は、答える側だけが考えるというのではなく、聞いている側も自分なりに考える。

普段は自分の考えた命題についての意見を聞いているからけど、今回は他人の命題を他人が答えている。

だから、自分もその場で考えざるを得ない。

他人の意見を聞くには、ベースとなる自分の意見がないと話にならない。それこそ会話にならない。

だから皆考える。幻の話を理解するために。

それもこの形式の醍醐味だろう。

のども潤し終わり、彼女は再び口を開く。

「私の言う建前というのは、一言で言えば架け橋。人と人が円滑にコミュニケーションできるようにするための潤滑油。誰もが点前を忘れて本音を言い合う世界を想像してみてください」

建前のない世界。聞こえはいいけれど、それは本能の世界だ。

おぞましい、なんてものじゃ言い表せない世界だ。

「建前というのが悪だけじゃないことがわかったでしょう。本音とというのが善だけではないことがわかったでしょう。これなら社会は

建前であふれていることも飲み込めるんじゃないかしら。でもここでひとつ問題が発生」

ピツと指を立てる。

「建前は悪だけじゃない、でもそれは善でもない。どう飾ったところで、どんなに言いつくろったところで、建前は建前。建前は社会に必要不可欠、なければ会話ができない。だけどそれはつまり、私たちは建前の世界で生きているということ。そんな世界で、いつ、誰に本音を話せるのか、本音で話せるのか」

本音がないと世界は成立しない。でも、だからって本音はどこでも言えないのか？

虚構だけの世界で、嘘が本当に、本音が建前の世界で生きなければいけないのか？

それが、生きるためのルールだとも言っのか？

それは。

あまりにもつらい。

あまりにも悲しい。

それとも、本音と建前を意識しなければ、そんなことを考えなければ、思考をとめれば、生きていけるのだろうか？

でも、それは本当に生きているといえるのだろうか・・・

「まだ話は終わってないわ。話の途中で勝手に結論を下すのはやめて頂戴。人の話は最後まで聞くものよ」

幻が少し怒った。

周りを見ると二人とも暗い顔をしている。きっと僕も、同じ顔をしているのだろう。

そうだった、話はまだ終わってなかった。

九十九パーセントの建前。だったら、残りの一パーセントは？

「社会で生きていくためには建前が必要。でもそれ以外では？たとえば家族だったら？恋人だったら？本音をいえるんじゃない

？」

家族、恋人、本音を言える仲。

そうだ、僕は今ここでなら、この人たちとなら、本音で会話していたじゃないか！

家族となら、建前なしで接していたじゃないか！

「本音を言える関係になるには、たくさんの時間が必要、多くの会話が需要。でも、それさえクリアできれば、本音を言えるはず。もちろんすべて本音というわけにはいかないわ。でも、少なくとも言いたいことを曲げることは、思ってもないことを言うことは、必要ないわ」

建前の世界の中でも、本音で話せる人がいる。そうだ、そうじゃないか！

「全員と、自分の関わっている全員と本音で接することは無理でも、誰一人とも建前でしか話せないわけではない。それだけで、救われるものじゃない？」

考えてみれば、命題だって本音を語ること。自分の意見を述べること。

それができる人同士は、きっと本音で話せるんだろう。

「いやー一発目から心に残る話だったね！ブラボー幻ちゃん！」

祭さんが歓声とともに拍手をする。僕と白さんも拍手をする。

「お疲れ様、お菓子食べる？」

白さんは務めを果たした幻に癒しのマドレーヌを渡す。終わったらもらえるシステムなのだろうか。だとすると、僕の番が始まる間から、終わりが待ち遠しく感じる。

「さてさて、次はお待ちかね、我らがスターのはるっちですっ！

いったい君はどんな本音を聞かせてくれるのかなっ！」

ハードルを上げてくる祭さん。彼女は天然だから、別にハードルを上げている自覚はないのだろう。

きつと、この場を盛り上げるためにやっているのだろうが、忘れ

てはならない、彼女は今回の大トリ。そのあおりが、自分に何倍にもなつて帰ってくることにまだ気づいていない。

「それじゃあ次は僕の番ですね。力及ばずながら、精一杯努めさせていただきます！」

祭さんの本音に乗って、僕も本音で話すとするか！！

6 (四題命題その一) (後書き)

ここから四題命題の始まりです。

あまり堅苦しくならないように、命題以外も交えていこうと思います。

7 (四題命題その二)

四題命題、二番手は僕だ。

「僕のところに来た命題は『それぞれの常識の違い』。常識の違いか・・・」

頭の中で整理した内容を再確認。大丈夫、バッチリだ。

「そもそも常識とは何か？ これは物事を判断するときのもののさし。一人一人が持っている自己判断のふり。そう考えてくれればいい。まず最初に言いたいことは、常識とは天から降ってきたものじゃない」

さっきの幻まぼろしのように、結論から言ってみる。

自分で言ってみるとわかるけど、この方法は、この手法は緊張する。自分の考えに自信がないなら絶対に使ってはいけない業だ。みんなの注目を集められるけど、その分失敗は許されない。

こんな方法をそれとなく使うなんて、さすがは幻だな！

念のため三人の反応を見る。出だしはまずまずってところか。

ここからの肉付けで良し悪しが決まる。

「常識、個人の倫理観っていうのは、その人が生まれてから教わったこと、経験したこと、その他諸々の後天的なものから成り立っている。親のしつけ、子供のときに読んだ本、最近見た映画、友達との会話、他にもいろいろなものが組み合わさって、それができている。それは神様から授けられてものなんかじゃない。生まれたと同時にもらった出生お祝いの品でもない。自分で、自分自身が生まれてからこれまでにやってきた努力の積み重ね、成功と失敗の盛り合わせ、それが今自分の持っている常識の糧となっているんだ」

先天的でなく後天的。

才能でなく努力。

個人の常識はそうやって、時間をかけて積み上げられたものだ。

「そして、それは今、このときも変化している。一箇所にじつとし

ているんじゃないくて、あちらこちらへと絶えず動いている。三年前の自分と今の自分じゃ、手持ちも常識はまるつきり違う。昨日の僕と今日の僕ですら小さくても、間違えなく変化している。それが進化なのか退化なのか、はたまた横っ飛びなのかはわからないけど、確実に変わっている。そう、常識とは天からのギフトでないだけでなく、がしつとした固体でもないんだ。先天的なものであり、流動的なものであるんだ」

完成なんてない。明日も明後日も、十年後も二十年後も、生きている限り自分の常識は、個人の価値観は変わり続けるのだ。

常に動き続けるっていうと、魚の、あれ、何だっけ？・・・そうそう、カツオだっけ。なんかそれみたいだね！

停滞は死！　って感じ？

・・・うんちくすらまともに言えない自分って・・・

事前の準備なしだとこういうところではるが出るな。まあ、地の文だからいいか。・・・いいのか？

あ、僕が黙り込んでいる間に、皆がこっちを向いている。次の言葉への期待が高まっている！

言葉と言葉の間の空白って、話してる側からはこんな風に感じるのか。だとしたら、さっきの幻の『お茶を飲む』とか、もう別次元の話だな。

異世界の住人！　いや、ただ言ってみただけで何のフラグでもないけど。

皆の期待につぶされる前にそろそろ話を再開しよう。

「だから、だからこそ違いが生じる。ひとつひとつがお手製で、材料も加工方法も違って、その上ずっと動き続けるものだからこそ、違いが生まれる」

たまたま発言者の主張みたいところでよかった。あれだけでもいたいぶって（そんなつもりはなかったけど、そう取られただろう）、もしさっきの言葉がどうでもいい所の話だったら、それこそカツオの件とかだったら、確実に終ってたな・・・

とりあえず僕にはまだ、味な演出は使えないってことだ、同じ失敗を繰り返さないように、もう本題に戻ろう。

「家族兄弟ですら異なる倫理観を持つているのだから、学校の友達とか、会社の同僚とかならなのおさだろう。生まれも違えば暮らしも違う、そんな人同士が同じ常識を持つていろって方が無理な話だ。そうだろう？」

一人っ子で学生の僕が、兄弟や同僚とか言ってみた。でも、あくまで想像だけれど、それは間違っていないだろう。

「さすがに、命は大事とか、人を殺してはいけない、みたいな大きな常識はどこでも教わるだろうから、誰の中にもあるだろう。でも、卵にはケチャップ！ とか、ツンキヤラは最後にはデレなければいけない！ とかの常識は、その人の育ち次第、読んでいる本の傾向次第で、誰もが共有しているものじゃない。そういうところで違いが生まれている。国の風習が違えば、前に言った二つも決して共通の常識ではないしね」

女の子にツンデレの話とかしてしまっただけど、この一家はわりと幅広い『常識』を持ち合わせているので、特に変な顔はされなかった。この常識は共有していたようだ！

「だから、常識の違いは必ず生じるものなんだ。それで、問題はそのこと、『常識が異なるなんて常識』という常識を皆が共有しているわけじゃないってことだ」

なんだかまどろっこしい言い方になってしまっただけど、ここまで読み続けてくれている読者（いるのか？ いると思おう！）なら理解してくるだろう。一応語り部の義務としてやっておくけど、わかりやすく言えば、違いを認識していない人もいるということだ。わかり易かったかな？

「常識の違いを認めなければ衝突や誤解が生まれる、相手に自分の常識を押し付ければ、争いが生まれる。進行の違いから起きた戦争なんて、歴史を紐解けば例を挙げるに事欠かないだろう」

世界史でそういう類のものを習った気がするけど、名前は思い出

せない。

受験生の僕、ピンチ！ 冗談じゃなくて本当に！！

「だから、違いを認めること、常識の差異も常識の内っていえるようになること。これが大事だね。以上で僕の発表を終わりにします！」

ふう、語りきった、今日は今までで一番語ったな。

「常識の違い、これって言われてみればそっかゝって納得できるけど、自分から、そうだ！っていう風には思いつけないよね！ コロンプスの卵的見たいな感じ？」

言われてみれば当たり前、でもそれを思いつくこととは話が別。

いい比喻を使うな、ナイスチョイス、祭さん！^{まつり}

「お疲れ様でした。お飲み物はいかかですか？ ……いかがですか？」

相変わらずの語尾かみ。これは彼女にとっての常識なのだろうか？ 恥ずかしがってるし違うか・

「ありがとうございます。じゃあ水をいただけますか？」

「えっ？ あの・すみません、お茶しか持ってきてません・嫌ならコンビニまでいってきますが」

「すみません間違えました。僕は今お茶が飲みたかったんだ！ キャンプにはお茶！ それがじょうしきですよねっ！！」

あわてて訂正する僕。

コンビニって・とりあえずここからは見当たらないけど。何キロ先にあるんだろう？

キャンプではお茶が彼女たちの常識なんだろう。僕は水派だけど。まあ、違いを認めるってことが大事だってさっき言っただけだし、僕もそれに従おう。お茶も嫌いってわけじゃないし。なんか自家製っぽいから間違えなくおいしいし。

「春君、面白い意見だったわ。私も違いを認める寛容な心をもっているわ」

もう持っている！？ この話を聞いてとかじゃなくて！？

・ 僕の話をはめてるふりして、最後は自分褒めに落ち着くのかよ・

相変わらずの幻に少し笑ってしまう。

「それじゃあ次はお待ちかね、私の妹にして幻ちゃんのお姉さん、春君にとつては専用コックの白^{しろ}ちゃんの番です。用意はいいですか？ アーユーレディー？ ヤー！！」

自分で答えちゃうのかよ！ あと、専用コックじゃない！

一度に二つもボケを出されたので、普通なツツコミになってしまった。ゴメン！

それにしても、またハードルあげるのか・・・ 自分の番にはどうするんだろう。

自分にも厳しく、のスタンスでいくのだろうか、それとも・・・ まあそのときは僕が代行しよう。

あれ、地味に緊張が高まるし。というかこれに白さんが、僕の知る限りダントツ一番の恥ずかしがりやさんが絶えられるのだろうか。そつと、隣を見てみると・・・ 固まっていた。緊張を通り越して固まっていた。

なんてことを！ 姉妹なんだからこうなることぐらいわかっていたろうに。

すると、幻が白さんの耳に何かを吹き込む。

数秒後、白さんは一度目をつぶった。そして、目を開けたとき、彼女の緊張は完全におさまっていた。

・・・何をしたんだろう？ 僕は隣に戻ってきた幻に聞いてみる。「ああ、ちよつと役者のスイッチを入れてきたのよ」

なるほど・・・これは僕も今日知ったことだが、彼女は意外というか、想定外というか、演技派なのだ。

恥ずかしがりやを克服するために手に入れたスキルだそうだ。

ものすごい荒療治だとおもったけど。

「わかりました。次は私、間淵家が四女、間淵白の意見をお聞きください」

・ ・ 何役なのだろう。高貴なお嬢様って感じだけど。
でもそんなことより、白さんの命題の話を聞くのは初めてだ。
れほどのものなのかとても気になる。

「それではしばらくの間、お付き合いください」

彼女の担当する命題は、僕の出題か？ それとも・・・

7 (四) 命題その二 (後書き)

まだ続きますよ

あと二題!!

8 (四題命題その三)

白^{ましろ}さんの演技している役は、高貴な雰囲気を漂わせるお嬢様、彼女のデフォから恥ずかしがりやを引いた、会話には適した人格だろう。

何か物足りない気がするが、四題命題を円滑に進めるためには致し方ない、謹んで我慢しよう。

「さて、私のお話する命題は『自由とは何か』ですわ。ふふつ、答えがいのある命題ですわね」

口調がガチお嬢様になっている。

こ、これはっ！！ 新たなキャラ、だと・・・

こんな隠し技まで持っていたとは。恐るべし、白さん！

「自由、日常会話でよく使われる、比較的なじみのある言葉ですが、それは何を意味しているのでしょうか？ いきなり結論を言ってしまうのではつまらないですし、何より説得力がありませんわ。ですので、少し寄り道をしながらいききたいと思います」

結論にたどり着くまでの寄り道、今までに使ったことも使われたこともない手法だ。

いきなり道の展開・・・お手並み拝見、いやご指導をいただきこう。命題においては確実に彼女のほうが先輩だし、学ばせてもらう気持ちで聞こう。

「まずどういう時に不自由と感じるのか、というのが妥当ですわね。好きなことができないとか、思い通りに行かないみたいなお子供じみたことは言わないで下さいね。それは自由はないというよりは力がない、不自由というより無能というべきものなのだから」

ふふつ、と笑う白さん。

・・・そういうことは言わない約束だろう！ そこは建前使わないとっ！！

というか、何このブラックキャラ！？

白というより黒^{まじくろ}だけどこれは短絡的か、名付けて暗黒^{よるのくろ}姫でどうでしょう？ 微妙か・・・ 定評のダメ名付け。

それにしても完全に役になりきっている・・・ 正直ちょっと怖い。これが地という説もあるが、それは考えないことにしよう。

「不自由を感じる時、それは自由を認識した時。何かを認識するためには、その反対に位置するものも知らないと不可能。この場合は自由と不自由でしょう。人は本来不自由な生き物であり、自由を知ったとき、己の不自由を同時に思い知るというのは私の持論です。そこから墮落するか、自由を目指すかはその人次第ですわね」

持論の宣言、これをされると聞き手としては相手の自身を感じられるから話を聞く気になる、続きも気になる。だけど僕が話してなら、こんな大胆なことはできないなあ・・・

こ、これは別に僕がチキンなんじゃなくて、暗黒姫が勇者過ぎるだけなんだからねっ！！

暗黒かつ姫かつ勇者とか、RPGに出てきたらビックリのマルチポジションだな。

苦情殺到間違えなし！

「さて、そろそろ自由とは何か？ という命題に進みましょう。自由についての言葉通りの意味を言うのでは意味がないので、少し違った視点から見てみましょう」

確かに、「自由とは、縛られていないことですわ」とか言われたら、正直がっかりだ。ここまで引張ってそれ！ とか、そんなのいわれなくても知ってるよ！ なんて台詞が飛び出すこと間違えなしだ。この当たり前は、『コロンプスの卵』を持ち出しても力バreshiれないな。

「自由とは、二段仕掛けのからくり箱なのですよ」

・・・個性的過ぎる比喻、これは、何を意味しているのだろうか？ 続きを聞かないことにはさっぱり分からない。

「二段仕掛けというのは、文字通り、二つの扉を開ける必要があるということですね。まず一段目、これは開くというより開けっ放し

になっています。それは自由という言葉を知ること。この扉を開けていない人はおそらく皆無でしょう。そのほとんどがここで終わっているのも事実ですが」

ここで終わっている？　ということはまだ続きがあるのか？

「そして二段目、これは自由について考え、不自由について考えた末に、自分の不自由さ、世界の不自由さを知ること。そしてそれでもなお、自由を追求する人、そんな人にだけ見える隠し扉があるのですわ。それが二段目の扉ということです」

扉の奥にある扉。

真実の奥に隠れた真実。

マトリョーシカ。

・・・最後の中身に中身が入ってるって感じで、ほら、・・・、すみません蛇足でした。

雰囲気壊してゴメンなさい！！　これで満足か？

「でもよく考えてみれば、二段というのは私がたどり着いた扉の数というだけ。二段あるなら三段四段ともしっかりとたくさんあると考えるのが妥当ですかね。それなら、二段構えというよりは、人間試しとでもしたほうがいいかもしれませんね」

見る人によってどこまで見えるかが異なる、人間試しとは言い得て妙な表現だな。

僕はどこまで見えているのだろう、幻はどこまで、祭さん^{まつり}だったらどこまでたどり着いているのだろう。

「以上が『自由とは何か』に対する私の考えですわ。結局の所、まだ分からないというのが現時点での結論なのでしょうか」

僕みたいな初心者からすると、問いには何らかの答えを出してみたい、出さなければいけないと思ってしまっけど、今回のような考えもあるのか。自分なりの考えで無理やりなことを言うよりもよっぽど、命題に対して誠実な人だからこそできることだろう。

「お疲れ様！　さすがは私のお姉さまというところですね」

あれ、幻のやつ、またしても自分褒め！？

その言葉を素直に受け取ったらしい白さんは、純粋な笑顔で賞賛へのお礼を言っている。

ピュアだなあ・・・ 純粋無垢とは、彼女が生まれることを予期した預言者が、その時にそれを表す言葉に惑わないようにと、先に作っておいてくれたものなのだろう。

ちなみに命題の結論を言ったところで役者モードは終了して、元の白さんに戻った。

素へ戻ったときの白さんは、さっきまで意気揚々と話していた自分を思い出して、少し赤面した。

やっぱりこっちの方がしっくりくるな！ 黒よりも白、これが彼女、白さんだろう。

「これで三人目も終わり、白ちゃんお疲れさまっ！」

さてさて、もはやおなじみになってきた祭さんのハードル上げ。

まさか彼女ともあるう方が自分にだけ甘く行くなんてことは無いと信じているけど、もしも、もしももしも、仮の話だけど、彼女が自分の命題に集中していてそれをすっかり忘れていたりしたら、その時は僕がしっかりと代行してあげよう。

忘れちゃったのなら仕方が無いしねっ！

「それでは、この長きにわたった四題命題も残すところ最後の一人となりました。最後の一人、大トリをやらせていただくのは、このわたし、間淵祭でありますっ！ 一回二回、三回とわたしの妹とラニンングパートナーが活躍を見せてくれました。わたしも先の三回ですばらしい意見を述べてくれた三人に恥じないような、そんな考えを発表したいと思いますので、どうぞご期待ください！！ その御期待をに沿うだけではなく、上回れるように、力をつくさせていただきますっ！！！！ イエーイツ！！！！」

・・・自分にもしっかりと仕事をした祭さん。ビックリマークが四つ並ぶほどのはじけっぷり、流石としか言いようが無い。天然もここまでくると、もうワンランク上位の存在だろう。

何かもう、尊敬に値する人だな。疑ったりして、マジすんませんしたっ！！

幻と白さんは、いつもの事ぐらいに、お菓子を食べながら見ている。

人間、慣れとはすごいものなんだなあ、この光景を見て、そう思った。

まあ、いろいろ思うところはあるけど、ついに四題命題も次が最後。

彼女の担当する命題が何なのか、まだ僕は知らない。今日の最後を飾る命題とは、いったいどんなものなのだろうか。

期待と期待もうひとつ期待を胸に持って、彼女の口が開くのを、言葉を発するのを待つ。

9 (四題命題その四)

四題小説も残すところあと一つ。最後の話し手は祭さん^{まつり}。

白さん^{ましろ}同様、祭さんの命題を聞くのも今日が初めてだ。単なる序列で言えば、祭さんは幻や白さんよりも上。

でもその理屈でいくと光さんが一位つてことになるけど・・・それはどうなんだろう？

「ついに私の出番ですっ！ 出番なのです！！ わたしはね、三人の命題を聞いて、早く自分もやりたいなっ！ 話を聞いてほしいなっ！ って、ずっと楽しみにしていたのですっ！！」

始まり早々、いや、まだ始まってもないけど・・・とにかくのっけからノリノリの祭さん。

普通なら、そんなに興奮したら途中で疲れちゃうよ、とか言いたくなるけど、相手は祭さん。

彼女には、日ごろの運動で培ってきた無尽蔵のスタミナがあるので、そんな心配は無駄なのだ！ えっへん！

まあ、僕が威張れることでもないけど。

「えつとね、わたしの考察した命題はね、『カリスマとは何か』だよ！」

・・・カリスマとは何かだって？ そんなもの、十分の思考時間で自分の意見を言えるほどにまとめられるのだろうか？

少なくとも僕には不可能だ。たとえその猶予が二十分に延びたところで、その確信は覆らないだろう。

できない確信というのも、情けない話だけど・・・

それでも、それとも、彼女ならそれができるといっただろうか？

祭さんには可能だといっただろうか？

そうなら、そうだとしたら、彼女は飛び抜けすぎている。

僕はともかく幻や白さんのいるステージとは、一線を画している。

僕は彼女の言葉を待つ。
期待と恐れを持って。

「カリスマっていうのはさ、一言で簡単に言っちゃえばさ、人を引き付けるポイント、つまりは魅力だよな！ だから、『カリスマとは何か』を『魅力とは何か』に変えて考えてみよー！ オーー！」
カリスマと魅力。確かにそれらは、同類というか、入れ替えても意味が伝わるほどにはリンクしている。

命題を自分の考えやすい物に変える、取っ掛かりが見えなければ自分が移動する。

時間が少ないからといって焦らず、闇雲に取り組むのではなく、全体を見通して、どのように進めば近道になるかを考える。

命題の変形、位置の変換、それは確かに効率的である。

でも、わずか時間しか与えられていないのに、そんなことを考える余裕があるうか？ そんなに正しくいられようか？

刻一刻と迫ってくるタイムアップにひるんで、我先にと近くにある取り掛かりに走っていつてしまわないと、言えるだろうか？

それは、そんなことは、命題に慣れすぎるほどになれていなければ無理だ。

幾度となく考え抜いた人間でないと不可能だ。

凡人には不可能だ。

つまり、彼女は、一線の向こう側、熟練者の一員なのだ。

最も大トリに相応しい人だったのだ。

「魅力とは何なんだろうつて考えるには、まずは自分がどんな人に魅力を感じるのかを考えることから始めてみよっか！ これが第一歩だねっ！」

これまでのことは一步にも含まれない、彼女にとってはスタート前の深呼吸、単なる前準備と同じレベルの話だったのか。

ますます凄さが際立ってくる。

「わたしが魅力を感じる人はね、そうだなあ。頭がよくていてそれを鼻にかけない、そんな人かな！ お勉強ができてもそれは数ある個性のひとつ、そういうる人に憧れちゃうかも。白ちゃんはどんな人に魅力を感じるかな？」

ほかの人に話を振ることはもちろんルール違反じゃない。むしろ、自分以外の人の意見を取り入れるという、命題を考えるにおいては有効な手段だろう。

問題は、自分の意見の発表に集中している一方で、それをやってみせるほどの余裕があるかどうか。

ちなみに、祭さん以外のメンバーはそれをやらなかった。できなかったのかはわからないけど、やらなかった。

さらに言えば、僕はできなかった。

「えっと・・・自分に自信を持っていて、それでいて人の話も聞いてくれる人、です」

「うんうん、続いて幻ちゃんとはるっちもお願い！」

「私は、そうですね、ゆるぎない自分を持っている人には惹かれるかもしれません」

「僕は、どうだろう・・・。文武両道な人というか、オールラウンダーに魅力を感じます」

四人それぞれの、魅力を感じる人について聞いてみると、結構バラバラっていうのが正直な感想だな。

何に魅力を感じるかってのは、人によってこんなに違うものなのか。

「皆答えてくれてありがとね！ これでわかったと思うけど、どんな人に魅力を感じるのだったのはあんまり一貫性がないよね。強いと言えば、すごいっ！！ ってことくらいかな。どうしてそうなるのかっていうとそれは、人は、自分の理想を体現している人に憧れるからだって思うのです！」

自分の目標を達成している人がいたら、その人のことをすごいと思ひ、魅力を感じて、憧れる。

それがカリスマ。

「でも理想ってのは、叶わないからこそ、現実になりえないからこそ理想であるわけです！ それに、皆が憧れるには、皆の理想を満たしていないといけないってことになっちゃう。これは、ちよつと無理だよな？」

不可能と想定されているものを達成する。それもひとつだけでなくいくつも。

それは、マンガの世界、空想の話だろう。現実にはありえない。

「それでも実際に、カリスマを持っている！ このひとはすごいっ！！ って言われている人は存在するよね。それはどうして？」

確かに、よくテレビとかでカリスマって紹介されている人がいるけど、その人たち全員が達成不可能な理想の体現をやって見せたとは思えない。

「それはね、そういう人たちには魅せる力があるからだよ」

魅せる力、それはどういうものなんだろう。

「もちろん、努力による実力がないとただの大口のペテンシになっちゃう。だからそういうのはあるんだろうけど、それはあくまで必要条件。それだけじゃ足りない、不足です！ それで、そこに足されるべきものは、自分を理想だと思わせる力だと思うんだ！」

自分を理想だと思わせる力、正直まだよくわからない。

「それは平たく言っちゃえば、演技力とでも言うのかな。人にそうと思わせるように振舞うこと。聞こえは悪いけど、これはぜんぜん悪いことじゃないし、すごすぎるぐらいすごいことだよな！！」

演技とか言われると何か”嘘”のようなイメージをもつけど、それは違うつてことなのか。

「それをやるには、何よりも自信が必要！ 自らを信じる自信が、自らの力を信じる自信が、自分がカリスマを持っているという自信が」

「カリスマとはそれを演じる自信。能力を持っている上で、それを演じるための、不敵すぎるぐらい素敵な自信が必要。・・・えっと、こんな感じでどうかな？」

正直、まだ整理できていない。彼女が言った事を理解しきれていない自分がいる。

今僕が感じているのは、彼女のカリスマ性。人を引き込む力。

これも、彼女の自信によるものなのだろうか。自信があるからこそ、引き付けることができる。

「みんな、そんな難しい顔しないでっ！ わかり難かったかな？」

今日はもう終わりにしようよ。こういうことは夜布団に入ってからゆっくりと時間をかけて考えればいいんだからさっ！

今この場でこれ以上考えても、ますますわからなくなるだけな気もする。祭さんの言うとおり、リラックスした状態で少しずつ考えることにしよう。

「それにしても疲れちゃったね！ 一日に四題もの命題について考えるなんて、ピクニックでもなきややってられないよ！ 何かお菓子食べたいな、白ちゃん、チョコレートとかって持ってきてるよね？ 疲れた頭にはチョコレートが一番！ 二番はかりんとうかな？」

あれだけ語り倒してもまだそんなにしゃべる元気があるのか。

これぞカリスマ！！

それからは普通のピクニックの様に、お菓子を食べたり、他愛も

ない会話をしたりで夕方までくつろいだ。

「そろそろ帰る時間ね。日が暮れてからの坂道は危ないから、そろそろ帰りましょう」

あと一時間もしたら日が沈んでしまいそうな赤い空を見て、幻はそう言った。

「そ、そうですね。ではそろそろ片付けましょうか」

「そうだね、帰りは下り道だからそんなに疲れはしないけど、暗くなつてからは危ないからねっ!!」

「それじゃあ、帰りますか」

四題命題、白さんの思考、祭さんの手法、今日はたくさんのお話を学んだ。

『本音と建前』、『それぞれの常識の違い』、『自由とは何か』、そして『カリスマとは何か』。これらの命題からもたくさんのお話を学んだ。

でも、一番の収穫は、僕がまだまだアマチュアなんだと知ったこと。まだまだ、彼女たちのステージまでたどりつけてない。そんな苦い自覚を胸に抱き、カリスマを持つ彼女たちとともに、いつもの町へ、日常へ帰っていく。

9 (四題命題その四) (後書き)

これで四題命題は終わりです。

次回からは、またストーリー編を少し多めで投稿したいと思います。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。

主導権、何それ？

午前九時三分前。僕はもはやおなじみとなった公園で、あの人を待っている。

ちなみに、夜中に降った雨のせいで今朝のランニングは中止だったので、今日はまだ、あの人にあっていない。

十一月も中ごろになり、少しずつ冬が近づいてきている。こうしてじつと立っていると、体中でそれを感じる。

少し冷たくなっている手をこすりながら、どんなものかいいかなと考えていると、待ち人が来た。

「お待たせ！ 時間内に来たつもりだったけど、もしかして遅れちゃった？」

「いいえ、ぴつたり時間通りですよ、祭さん^{まつり}」

待ち人とは祭さんのことだったのだ。白いサルエルパンツに黒色の暖かそうなコート、道ですれ違ったら思わず振り向いてしまいそうな、普段の印象とは違ったおしゃれな服装だった。

「それじゃあ行こうか！」

僕たちがこれから行くところ、それは駅前に先月できたショッピングモールだ。今いる公園からでも、歩いて二十分程度なので、僕たちは自転車でなく徒歩で行くことにした。

ショッピングモールに行くのは、当たり前だけどウィンドウショッピングをするためではない。目的は僕のランニング用の靴を買うこと。それにどうして彼女がいるのかというと、僕はそういった靴を買ったことがないので、祭さんに一緒に来てくれるように頼んだからだ。彼女は「はるっちとお買い物、楽しそう！」と言って快く引き受けてくれた。

このままショッピングモールへ行って、無事にランシューを買って、祭さんにはアイスでもご馳走して、そんな平凡ながらも楽しい

お出かけになるはずだった。

しかし実際はそううまくはいかない。というか、そんな日常めいたことが物語に登場するはずがない。徒歩開始三分後、まだ出発したばかりに、祭さんが何てことない風に、口を開いた。このノーマルイベントをアブノーマルにひっくり返してしまうほどの台詞を。

「そういえばさ、今日わたしはるっちのお買い物に付き合っただけで、はるっちはわたしに何をしてくれるのかな？」

「ん？ いまなんて？」

彼女はそのかわいらしい瞳で、とてもわくわくしながら、そう聞いている。

これは、アイスをおごるとか、そんなありきたりなものじゃあ満足してくれない顔だ。むしろ怒るかもしれない。

「……どうしよう。」

「何をしてくるのかな？」

この場合もつともふさわしいのは、彼女を怒らせないもので、かつ本当にはやらなくてもいいことだ。はるっちおもしろい！！とか言われるものが望ましい。

「……どうしたの？」

「僕のこれから言うことはあまりにもすごいことなので、溜めが必要なんです」

「ええ！ それはすごいね！！ わくわく」

まずい、とつさに言った悪手で事態をますます悪くしている。これ以上黙っていても、現状が良くなることはないか。

しかし、僕のひらめいたアイディアは今のところ一つ。そしてそれは、思いつくと同時にゴミ箱行き担った代物だ。でも、背に腹は変えられないか……

「祭さん！！」

「な、何でありますか！？」

「僕と、一日デートしましょう!!!」

「え、えええええ、ええ!？」

あれ、何か思ってた反応と違う。それもたいぶ。

彼女は耳まで真っ赤になって、口をパクパクさせ、白さんのようだった。いや、このしつちやかめつちやかぶりはそれすら凌駕している。

「でーと？ でーとってあのデート？ わ、わわわわ」

「あの、嫌だったら違うのにしますけど」

「違うのっ！ それで、それがいいかなっ!!! 一日デート、楽しそうだよ!!!」

そうかな？ そうとは思えないけど・・・

「デートに決まり！ そうしよっ！ デートっていうなら、敬語は禁止だよ!!! 破ったら罰ゲームだからね!!! それと呼び方も今日は春ちゃんと祭ちゃんだよ!!! デートなんだからね!」

テンションが三オクターブぐらい上がった祭さん、いや祭ちゃんだっけ。これはいまさら撤回できる雰囲気じゃない。

かといって、配送ですかと従えるほどのランクのものでもない。

無理かもしれないけど、一応交渉してみよう。

「えっ？ いや、それはさすがに・・・祭ちゃんというのは、それのため口も、その、年上の方に失礼じゃないかと・・・」

「敬意を示すってのは、さんを付けたり敬語を使うことだけが正解じゃないんだよ!! その人がいいって言ってるのに、無理やり逆らおうとするのは、それこそ無礼なんだよ! 無礼はるっちだよ!」

何だ、その理論は？

その人がやってほしいことをするのが礼儀・・・なのか？

そこまで断言されると、むしろそっちのほうのほうが正しいような気がしてきた。

そうだ、一日ぐらい、遊びに付き合ってもいいじゃないか!

それに、そうくるならこっちにも攻撃方法がある。

彼女はこの前、彼氏はいないって言っていた。あの口ぶりからすると、恐らく昔にもいなかった。気になる子とはどうなったか分からないけど、休日に僕にかまってるぐらいだから、うまくはいっていないのだろう。つまり、彼女はデート経験なんてないのだ。

それなら、日ごろから幻に鍛えられている僕のほうが経験量は上なはず。ということとは、今日は彼女をからかい放題なのだ。彼女にうらみなんてのは全くないけど、からかえる時にはからかっておく、それが僕のポリシーなのだ。

「じゃあデートにしようか。祭ちゃん、手、つなごうよ」

異性との手つなぎ、僕は確かこれで悶絶した。

ならば、彼女もきつと慌てふためくはず!!

「うーん、それだとはぐれちゃうかもしれないし、こっちの方がいいよ!」

そう言って、彼女は僕と腕を組んだ。

「んんっ!!」

当たってる!

彼女の決して小さくない、むしろ大きいほうに当てはまるアレが、当たっている!!

ちなみに道は全く込んでいない!!

「わわ、どうしたの!? 顔、すごく赤いよ? 熱があるのかも」
そのまま彼女の顔が僕に接近。

これは・・・おでことおでこのやつ!! (動揺のあまり過去最低のネーミングをしてしまったけど、今はそんな場合じゃない)

マズい、これはマズいぞ!

とっさに判断で僕は、彼女の両頬を手のひらで挟んだ。

そして・・・そのまま引っ張った。

「うっ!?! ほ、ほうひはのはな?」

「あ、ゴ、ゴメンなさい!!」

僕はあわてて指を離す。

この指には今もお、あの見た目よりもずっとやわらかい、マシユマロとでも形容すべき、ぷにゅとした感触が残っている。これが、僕と祭ちゃんの初体験となった。

・・・いや、ほったですけど？

「びゅくりしたよ」。わたし、男の子にこんなところ触られたの、初めて・・・」

繰り返しますが、これはほったの話ですよ？

彼女は僕につねられて赤くなった頬をさすっている。

「ところで、さっきさ、ゴメンなさいっていったよね？」

急に雰囲気が変わる。決して声をあらわしているわけでもないし、怒った顔をしているわけでもない。むしろ微笑んでいるくらいだ。

だけどわかる。彼女は、怒っている。

つねったことには気にしていなかったようだから、怒りの対象はゴメンなさいか？

「最初に、敬語は禁止だよって、言わなかったっけ？」

「言ってた様な・・・」

「言ったよね」

「うん、言ってたね」

言ってました、と言いそうになったけど、今そんなことをしたら何が起きることか・・・

「ゴメンなさいって、敬語じゃない？」

「え、いや」

「違うの？」

違うないけど！ そうだけれども！

それでも、無理やりにも敬語じゃなかったことにしないと、敬語を隠蔽しないと、何かが危ない！！

「あれは僕が小学校二年生ぐらいのころだったかな。僕は当時はかわい小さい子供で、親にお願いして動物園に連れて行ってもらったんだ。僕はそこでサイを見た。サイを見るのはそのときが初めてだった。でもサイってなんとなくじみだよね、だから僕はそれをよ

く見ずにカンガルーコーナーへと走って行ってしまったんだ。でもそれって、かわいそうだろ、サイだって生き物なのに、無視されるのは悲しかっただろう。それをさっき急に思い出して、『ごめんなサイ』って思わず言ってしまった。事の真相は、つまりはそういうことだったんだよ」

「・・・。どうだ、ごまかせたか？」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。そうだったの？ わたし、てっきり自分に言われたことだと思っちゃって、疑ったりしてゴメンねっ！ わたしって最悪だね・・・よく聞きもしないで春くんを責めたりして。春くん、もうわたしとお買い物に行く気、なくしちゃった？ そうだとしてもわたしは誤ることしかできないな・・・でも、ほんとうにゴメンねっ！！」

「え？ えっと、分かってくればいいんだ、僕も紛らわしい言い方をしちゃったし。でもそうだと分かってくれたならそれだけで十分だよ」

「・・・なんだろう、胸の奥をギリギリと痛めつけるものは。」

これが罪悪感？　これが良心の呵責？

こんなことならいつそのこと、敬語使いました！ スミマセンでした！！　って白状したほうが良かったな・・・

「そういえば、罰ゲームってなんだったの？」

「相手に好きなことを一つしてもらうつてやつだったんだけど、わたしは家を買ってもらおうかなって思ってたんだ。一人暮らししてみたいし」

「・・・。」

あつぶねえ・・・　もう少しで破産するところだった。

というかそれって、罰ゲームの度を軽く越している気がするんだけど。

彼女は常識人だと思っていたけど、金銭感覚は破綻しているよう

だ。

まあ、お嬢様だしなあ。

「そっか、残念だったね」

「ううん、春くんが約束を守ってくれたことが分かったし、そっちのほう良かったよ」

ものすごいさわやかなことを言っている。だめだ、気にしちゃ負けなやつだ。

「じゃあ誤解もとけたことだし、目的地へ向かおう！ 腕組んでいいよね？」

「うん・・・」

再び腕を組む僕たち。僕はもうそれに逆らわない。

下手に逆らって家とか交わされる羽目になったら、もういろいろ終わるし。

とりあえず今分かっていることは、主導権は完全に祭ちゃんに握られたってことだ。

僕が手綱を握れる、そう思っていた時期が僕にもあったとさ！！

予想外はつきもの

今現在、僕の前には、ここに来る前には想像だになかった光景が流れている。

何なんだ、これは？

どうしてこんなことに？

さまざまな疑問が僕の頭で、浮かんではまだ解決しないままに次に疑問に押しやられていった。

次から次へ湧き出る疑問、そのどれ一つにも答えを見出せない。

彼女は、そんな僕の心情にまるで気づいていなく、今もこちらへさわやかな笑顔を見せてくれる。

きつと、彼女はただ楽しんでいるだけなのだろう。そしてそれは確かに悪いことでもないのだろう。

ただ、僕にはついていけないだけで、僕には慣れていない出来事なだけで、僕とは次元の違う世界の話だというだけで。

誰にも迷惑をかけていないし、もちろん法律やらなにやらの、社会のルールにも引つかからない。

ただひとえに僕の世界の、人間の小ささが、事を大げさに見せているだけなのかもしれない。

それでもやつぱり、目の前の現象は、僕のような人間には、異常としか言いようがない。

僕たちは当初の予定通り、ショッピングモールにたどり着いた。ここまでではよかった、予定通りのバッチリだ。途中にほんのちょ

つとだけ些細なこともあったりしたけど、それを織り込んでもよくできているほうだと思う。

「ここがショッピングモールが。想像してたよりも大きいんだね。さて、靴屋はどこにあるだろう」

「あそこに大きな地図があるよ！ あそこで調べてみましょう！」
祭さんまつりの提案通り、入り口付近に設置されている地図を見に行った。

「靴屋は二階にあるんだね。後は食事できるところとかチェックしておこう。祭ちゃんはどこが見たいところある？」

「はい！ わたしここ行きたいな！！」

彼女の指差した場所を見ると、そこは『服屋通り』と書いてある。名前の通り、さまざまなブランドの店が集まって一つのエリアをつくっているらしい。そのエリアは一階にあり、ここからそれほど遠くない。

「じゃあ行ってみようよ」

「うん！ 春くんに服見てもらいたいし！！」

こう言われたら、かわいい女の子に（年上だけど）頼りにされたら、誰だって断らないだろ？ それにこちらとしては買い物に付き合ってもらっている身なのだから、それぐらいの寄り道は認めるのが筋つてもものだろう。

「うん、構わないよ。女の子の服ってあんまりよく知らないから、役に立てるかはわからないけど」

「春くんが似合うって思った服なら、それが一番の服なんだよ！！」
うーん、それは違うと思うけど？ もしそうだったなら、僕はファッションの仕事に就くべきだろう。

この場合は、祭ちゃんにとって一番の服なのだろう。一番かどうかは例の”気になる子”の好みで判断するのが普通な気がするけど。一緒に買い物するほどの仲までは進展してないのかな。彼女が誘って断る男なんて存在しないと思うけど・・・まあそれは彼女

の問題だから、僕があれこれ言うことでもないか。

「それじゃあ行こう、服探しの旅に！」

「祭ちゃん、服屋通りはあっちだよ・・・」

ため息をつきながらもこの時はまだ、これから起こることをこれぼっちも予想していなかった。

「まずはここのお店に入ろうよ!!」

まず？ ああ、ノットオシャレな僕には信じられないことだけど、オシャレな人は一度の買い物でいくつもの店をはしごするって、聞いたことがるな。彼女はスポーツ少女でかつオシャレガールでもあるから、お店はしごなんて普通のことなんだろう。

「はやくはやくう！」

「はいはい、わかってるよ」

店は女性服専門店だけど、中には男性もそこそこいる。彼女と服を見に来ているようだ。

祭ちゃんはどこに行ったのだろうと探していると、彼女はすでに何枚か服を持っている。

「春くん、こっちこっち！ 服持ってくるとうれしいな！」

彼女のさりげなくもない『服持って催促』をうけて、僕は差し出された服を受け取る。

「えへへ、ありがとね！」

お礼を言いながら、次々と服を選んでいく。選ばれた服にはあまり一貫性がないけど、どの服もそれなりにかわいい。どうやらファッションセンスは確かなようだ。

「すみません、試着したいのですけど、いいですか？」

「はい、試着室はこちらになります」

服も十分に選び終え、店員に試着室へ案内してもらう。

ちなみに僕が現在手にしている服は計十五着。ちらりと周りを見てみても、どの人も三着から六着程度しか手にしていない。

普段から服をかうオシャレさんたちから見ても十五着というのは異常なのだろう。さつきからたくさんの人からじろじろ見られる。

「こちらでどうぞ。何か御用がありましたらお呼び下さい」

実に丁寧な口調でそう告げる。きつと店を潤してくれるお金持ちだと思っっているのだろう。

まあ、祭ちゃんはお金持ちだけだね。

「それじゃあ試着タイムだねっ！　どの服が似合ってるかちゃんと見てね！！」

そう言ってカーテンを閉める。数秒後には中からゴソゴソと音が・・・こういうシチュエーションって少し緊張するな。

待つこと二、三分。お待たせ〜と言っただけで彼女はカーテンを開く。

「どうかな？　結構かわいいって思ったんだけど」

中からは胸元にレースのついたワンピースを着た女の子が現れた。正直、想像以上にかわらしい。

今日着てきた服とはタイプが違ったから、似合うのかな？　なんて思っていたけど、そんな心配は無用だったようだ。

忘れがちだけど、彼女は元からかなりかわいらしい。それに加えて、プロポーションもかなりのものなのだ。

「・・・」

「ど、どうかな??」

「似合うんじゃないかな?」

「そう?　ありがとう!!」

素直にかわいいというのは恥ずかしいので、少し濁してそう答えた。

「それじゃあ、次の服にすぐ着替えるから、待っててねっ！」

ここにいたってもまだ、かわいい女の子がかわいい服を着るのを見るだけなら、むしろこっちがうれしくらいだね、なんて考えていた。

一時間後。

「これとこれも下さい！」

依然として買い物をしている。彼女は次々と服を買っている。

僕は少し疲れてきたけど、女の子の買い物はこんなものなんだろう、と我慢していた。

二時間後。

ここが冒頭のシーン。シーンというか、僕の思考だけど。

ちなみに現在状況は、五軒目の店で服を買い終わったところだ。

彼女はすでに十着以上の服を買っている。どうやら本当に気に入った服しか買わないようだ。

「もう結構買ったなあ。にもつもいっぱいになっちゃったね」
「もうそろそろいいんじゃない」

本当にもう終わりにして欲しい。そう願いながら提案してみた。

「そうかなあ？ もうちょっと買ってもいい気もするけど」

まずい、これ以上は僕のヒットポイントが持たない。どうかしないと・・・

「祭ちゃん」

「ん？ なに？」

「服を買う、自分を着飾るものを買う。それは確かにいいことだ。

服は人の外見を着飾ってるだけだっていう人もいるかもしれないけど、それは違う、服はそれを選んだ人の内面も表しているんだ。つまり服とは、その人の外見と内面をあらわしてしまう、だからそれに気を使うことはいいことだ。だけど、今祭ちゃんに本当に必要なのはそれじゃない。そうだろう？」

「いま必要なもの？ それって、なにかな？」

「それは、昼食だ！！」

「え？ ご飯??」

「そう、服はあくまで自分を飾るもの。つまり、服を着る人、祭ち

やん自身が万全の状態じゃないとその効果も十分に発揮できない。
いま、お腹がすいているだろう?」

「あ、確かにすいてる。服選びに夢中になってたからぜんぜん気づいてなかったよ!!」

「ということは、次はどこに行けばいいのかな?」

「ご飯だねっ!!」

やった。何とかご飯に誘導できた。

これ以上の疲労は僕を爆発へ導くかもしれないから（嘘）、
本当によかった。

「じゃあご飯にしようか! でもちょっとだけ待ってね、荷物取り
に来てもらっちゃうから」

荷物?

そういえば僕は今、かなりとまでは言わなくても、そこその量の
荷物を持っている。

でも、取りに来てもらうって、どういうことだろう?

彼女は携帯電話を取り出して、電話をかけた。

「あ、もしもし。荷物を取りに来てもらえますか? あ、はい、今
いる所は・・・」

電話相手に現在位置を伝え電話を切った。

「三分で来るって! ちょっとトイレに行ってきたいいかな?」

「あ、うん」

トイレに行ってしまった。ということは、僕が荷物を渡せばいい
のだろうか?

誰が来るのかわからないから緊張するな・・・

三分後。彼女はまだトイレから戻ってきていない。

そして、僕の前に一人のメイドが立っている。

「お久しぶりです、春様。祭様のお荷物は私が家に運んでおきます」

「あ、はあ・・・」

突然のメイドに対応できるほどに僕のレベルは高くない。しどろもどろな返事をして、なんとかこの場をやり過ごす。

「それでは、お嬢様とのデート、お楽しみください」
きれいなお辞儀をして、彼女は去っていく。

ほかの人からデートとかいわれると、少し恥ずかしいな・・・

「お待たせ！ メイドさんに荷物渡してくれてありがとう」

メイドさんが去ってから、メイドの語源を考えているうちに彼女が戻ってきた。

語源はわからなかったけど、たぶん外国語だろう。そうあいまいな結論に落ち着いておこう。

帰ったら調べようと思うけど、おそらく忘れてしまっているだろう。

「それじゃあ、待ちに待ったご飯にレッツゴー!!」

待ちに待ったのは僕だけだね。まあ無駄口はたたかないでおこう。これじゃあ靴屋までたどりつけるかなあ、なんて思ったりもするけど、とりあえず昼食だ。

これからの憂いよりも今食べることを優先して、レストランへ向かう。

しょうがないよ、だって人じゃん？

幸運は生まれつき？

僕たちの当初の目的、『ランニングシューズを買う』は驚くほどあつけなく終わった。

時間にしてわずか十五分。祭りちゃんの”ついで”のお買い物何分の一だろうとも思わなくもないけど、僕の想像を絶する幸運を経験した身としては、そんな小さなことを言うつもりはない。

ここからは、僕の幸運自慢になってしまっけど、お付き合い願いたい。

「靴屋さんはここだね！」

昼食も食べ終わり、現在時刻は一時十二分。本当は靴を買ってから昼食を食べ、そのあとはショッピングモールをふらふらするつもりだったけど、まあこれもこれでいいだろう。少なくとも靴は買えそうだし。

「春くんは靴をいくつ買うの？」

「ひとつだよー！」

ブルジョアと一般庶民の会話は、時々かみ合わなくなる。それがまた、面白かったりもするんだけど。

「それじゃあ、春くんのお気に召すような、そんな素敵シューズを探し出そうー！」

そう高らかに宣言して、靴屋さんに入っていく。

靴屋さん、”さん”なんてついていると、なんだか狭い場所ですりすりとやっていて、お客様はみな常連客って風なものを想像してしまうかもしれないけど、実際はそんなことはない。むしろ真逆といっても過言ではない。

正式名称は『ハピネス』で、看板には『靴はあなたを素敵な場所

へ導く』なんて洒落たことが書いてある、置いてある靴も買いに来る客も従業員さえも、皆が総じてお洒落なストアだ。

ここでは、さまざまなブランドの革靴、スニーカー、ウォーキングシューズがあり、スポーツ用のシューズなんかも豊富なジャンルをそろえている。もちろん、お目当てのランニングシューズもおいてある。

「こんなたいそうな店を」さん」なんてつけて呼んでいる祭ちゃんのセンスは、やっぱりどこかずれている。

「これとかいいんじゃない？」

祭ちゃんはさっそく一足の靴を持ってきてくれた。まだ入店してから何分もたっていないけど、祭ちゃんのオシャレ嗅覚はすでに獲物を捕らえていた。

さきほどは彼女のセンスがずれていると言ったけど、なぜかファッション関係に関しては例外なのだ。分野別ナンセンス（？）という奇妙なスキルの彼女の魅力のひとつだったりする。

「これこれどうかなっ？」

僕に手渡してくれた靴を見る。それは一つ目にして、カラーもフォームも僕の好きな、直球真ん中ドストライクなシューズだった。

「こ、これは・・・」

驚いてみせる。みせるというか、素直に驚かされた。

「格好いいデザインだよね！」

念のため、サイズを確認してみる。

「えっと、これがサイズかな？」

何度確認しても、サイズはぴったりだ。

イカした靴だけどころと大きいじゃん！！ 見たいな落ちを恐れていたけど、どうやら今回はイタズラの神様のお目こぼしがあつたようだ。イタズラの神様に目をつけられている僕としてはうれしい限りだ。

「これってどこにあったの？」

「こつちこつち！」

そう。僕にはまだ確認しなければいけないことが一つある。それは……

「ここにおいてあったんだよ！」

彼女の指差すところは、ランシューエリアのお買い得ゾーン。ここにはセールになっているものがおいてあるようだ。セールゾーンに張ってある広告を見る。

『衝撃の大特価！！ ハピネスの創設者の誕生日記念で幻の九十パーセントオフ！ 対象商品はここ、注目の品ゾーンのみ！ 早い者勝ちです！！』

……。創設者サンクス！！ ハッピーバースデー！！！！

商品がいくら気に入っても、最後の一つの関門を潜り抜けられなければそれを得ることはできない。その関門とは、そう、値段だ。

こんなことを言うとなんだか小さな人間だと思われるかもしれないけど、値段つてのは重要だ。

なんたって、このナイスな靴との出会いをラッキーイベントにするか、はたまた笑い話にするかは、この靴の値段、プライスが握っていたのだから。

「どうかな？ もうとつと違うのも見てみる？ とりあえず、その靴はもどしてくるね！」

僕の靴を受け取るうとする彼女の手を、僕は空いている手で受けて、そのまま握手した。

「え？ ど、どうしたのかな？ 急に握手なんて……」

「いや、これにしよう。これに決めた！！」

「ん？ これって？」

「僕が今、手にしているものさ！」

「わわ、それって…… いいいったい何に決めたのかな？」

「これは、僕が貰い受ける……！」

「ええ?? そ、そんないきなり……」

いきなりって・・・靴を買うのに時間が必要なのだろうか？

まあ、ここはもつともな理由でも言って、さっさと買ってしまったおう。

「確かに出会ったのはついさっきだ。だけど、僕はこれを一目見てほしいと思ったんだ！」

「ほしい??・・・。ってあれ？　ついさっき？」

「正確には五分前だけど」

「?　??　何の話しているの？」

「もちろん、このランシューさ!!」

とたんに、さっきから赤かった彼女が、耳の先まで真っ赤になった。

どうしたんだろう？

「あれ？　どうかしたの？」

「へ？　あ、ううん。なんでもないよっ!!」

あからさまに何かをごまかしているけど、本人がなんでもないって言うのなら、下手に聞かない方がいいのかもしれない。

「それじゃあこれで決まりってことで」

「う、うん！　即断即決、男前だねっ!!」

僕は最後のセール品であったこの靴を持って、会計まで行く。今の気持ちは、ハッピーの一言に尽きる。

「お会計は二千百円になります」

本来なら二万千円！　ほぼ二万円引き!!

少し冷静さを取り戻した頭は、この店の経営を心配し始めたけど、きつとトップの人間が、そんなことどうでもいいレベルのお金持ちなんだろうなあ、なんて思っておこう。

「本日商品をお買い上いただいた方には、クジを引いていただいております。よろしかったら彼女さん、いかがですか？」

「クジ？　面白そう！　春くん、私が引いちゃっていいかなっ??」
「うん」

いいともさ！

よく考えてみれば、僕にこんな幸運が訪れるはずがない。ということは、これは祭ちゃんの幸運が引き起こしたものだろう。だって、くじを引く権利は祭ちゃんにあるし、あわよくば何かいい商品でも引き当ててくれるかのしれない。その確率は間違えなく僕よりは高いだろう。

「え〜と・・・これにしようかな！」

中から三角に閉じられた紙を引いた。店員さんに手渡して、確認してもらった。

「あ！ い、一等です！！ 店内の商品どれでも一つ、無料で差し上げます！！」

「わあい！ じゃあじゃあ、春くんが買った靴と同じのをもらおうかなっ！！」

・・・さすがとしか言いようがないな。

二千円ちよつとで二万円台の靴を二足。これを幸運といわずして何が幸運なのだろう！

「えへへ、おそろいの靴だね！！」

こうして僕の靴選びは予想以上の安値で終わった。

ありがとう、創設者の人！ ありがとう祭ちゃん！ ありがとうイタズラの神様！

今、僕の心の中は、さまざまなものへの感謝でいっぱいだった。

「次はどこに行こうか。それともまだちよつと早いけど、帰っちゃう？」

「あ、もうちよつといよいよ！ わたし、行ってみたいところがあるのー！！」

「へえ、じゃあそこに行こうか。ちなみに、どこに行きたいの？」

「えつとねえ、ゲームセンターなのだ！！」

ゲームセンターか。そういえば祭ちゃんはゲームの上手だったかな。なまじお嬢様だけに、そういうところには行ったことがないのかもしれない。

「ゲームセンターは一度外に出てから、別の入り口ではいるみたいだね。じゃあ出発！」

「オー！！ あ、その前にちょっと待って」

彼女は形態を取り出す。どうやら再びメイドさんを呼んだようだ。「荷物はないほうが遊びやすいもんね！」

「はあ・・・」

まあ、もう驚くのはやめよう。

疲れるだけだし。

何の特もないし。

リアクション放棄！！

・・・。まあうそだけど。そんなことをしたら、僕の存在意義がなくなるからねっ！！

リアクションが存在意義な僕って・・・。

そんなこと言っている間に、メイドさんも到着。

「かしこまりました、お嬢様」

いかにもメイドっぽいことを言って、再びどこかへ去っていく。どこで待機しているのだろうか。

「それじゃあ気を取り直して、レッツゴー！」

彼女の号令で、次なる目的地に向かった。

魔法は解けた

ゲームセンター、祭^{まつり}ちゃんの幸運のおかげで約二万円の得をした僕は（彼女は一足の靴を無料で得たが）、ここでの代金をすべて請け負うことにした。まあ二人でゲーセンに行ったところで二万円も使うはずがないのだから、ここでの支出をかんがみても十分得をしているのだけれど。

ゲームセンターでは、神プレイと称されるほどにテクニックに長けている人の周りには、いかなる場合でもギャラリーがつくものである。僕自身も上手な人を見かければ思わず足を止めてしまっし、その手さばきに見入ってしまうことだってある。

このような現象は、別に僕に特有なものではないし、言ってみれば当たり前のこと、わざわざ言うほどのことでもなかっただろう。ただひとつ、ここで認識しておいてもらいたい。多くのギャラリーがそうであるように、僕は常に『見ている』側で、『見られている』側になったことなんて一度たりとも無いということだ。

「スゲー、あいつらこれで何人抜きだ？」

「兄ちゃんのほうはそうでもないけど、あの姉ちゃんは相当の腕だぜ」

「ああ、見かけない顔だけど、ありゃきつとどこかのゲーセンの有名人だぜ」

僕たちは格闘ゲームをやっている。二対二のタッグマッチ方式のよくあるゲームだ。どこにゲーセンにもおいてあるもので、僕自身もプレイ経験はある。

「次のチャレンジャーは誰だ？」

「あ、あいつらはメテオロックじゃねえか」

「ついにプロ同士の戦いか！」

現在三十九連勝中。ゲーセンに入ってから一時間経過、使用金額

は百円。

「兄ちゃん、そこは防御防御！」

「とりあえずアンタは生き延びておけ、姉ちゃんはそろそろ相手K
Oするぞ！」

「うおお、また勝利かよ、これで四十連勝だぜ」

連勝記録がまたひとつ延びた。そろそろ状況は理解してもらえた
だろう。目の心理描写に移り他のんだけど、いいかな？

何だこれ！？ 何だこれ！？ 何だこれ！？

どうしてこんな状況に？

まあ？連発してみたけれど、実際のところ、この原因はとてもシ
ンプルだ。

祭ちゃんが神プレイヤーでした！ これだけだ。

彼女のテクニクは僕の不手際を補っても余りあるものだったた
め、僕たちはワンコインで一時間も遊び続けている。そしてそのテ
クニクは、周囲にギャラリーを形成してしまっている。

この感覚、皆に見られている中で連戦連勝を重ねた時に感じるこ
の感覚、僕は今日始めて経験するものだが、これは思っていた以
上に緊張する。確かに僕が見られているわけではない、それは重々
承知している。皆の関心は祭りちゃんであり、僕はその隣にいる人
間程度にしか見られていないだろうが、それでも緊張するものは緊
張する。もしかしたら、他人の力で、祭りちゃんの力で連戦連勝を
しているこの背徳感、居心地の悪さが『緊張』の正体なのかもしれ
ないが。

なんと言ってもいいが、とにかく僕はそろそろ限界だ。この居心
地の悪さにはもう耐えられない。この空間に、い続けたくない。

「祭ちゃん、そろそろ終わりにしない？」

「あれれ？ 楽しいのに、もう飽きちゃったかな？」

「そうだね、そろそろ違うゲームをやるうよ」

「うん、わかった！！」

聞き分けよく従ってくれる彼女。自分が注目されているにもかかわらず、それをあつさりと放棄する。いや、もしかしたら注目されていることすら気にしていないのかもしれない。相変わらずの器の大きさだ。

「えゝ、皆さん。応援ありがとうございます！ 私たちはもう疲れちゃったので終わりにします！ さようならゝ」

ギャラリーに挨拶をする。ここまで注目されてしまえば、終えるのも一苦労かもしれないな。

「えゝもう終わり？」

「もつとやってきなよゝ」

案の定、まだ終わるな攻撃が来た。どう切り抜けようか・・・

「シヤラツ！！ 今日にはもう疲れちゃったから終わりなの！！！」

・・・。何てことを。

ギャラリーの中には柄の悪いお兄さんもいたりするのだから、そういうことは避けてほしかったのに。そしてやはり、イカツイお兄さんが一人、こちらに近づいてくる。この状況、どうすればいいんだ？

「いい加減にしろ！」

怒鳴った。一同がしーんとする。

あれ？ 怒るられちゃった？

「ゲームはやりたいやつがやる、やめたいやつはやめる、それがルールだろ？ お前らのわがままでこの人たちに迷惑かけるんじゃないえ！」

・・・どうやら怒られているのは、終わるな攻撃をしかけたお兄ちゃんたちだったようだ。彼らは、山さんすみません！！ と先ほどのお兄さんに謝っている。

「まったく、気をつけろよ！ お二人さん、ここの者が迷惑かけてどうもすみませんでした。連中も悪気があってやったわけじゃないってことは、わかってください」

「いいよん、気にしてないし！！！」

まるで極道のような展開に怖気づくことなく、さわやかに返事をする祭さん。度胸の大きさというか肝の太さというか、やつぱりすごいな。

「それじゃあ行こうか、春くん！」

「ああ・・・」

何事もなかったかのように退出しようとする。

「また来てください、姉さん！」

「お疲れさました！　姉さん！」

「そっちの兄ちゃんもまあまあだったぜ！」

山さん一同はさまざまな声をかけてきてくれた。祭ちゃんが敬語で、しかも姉さんなんて呼ばれているのはちよつと笑える。

ゲームセンターを後にして僕たちは喫茶店に入った。中はカラフルな色合いになっていて、若い女の子やカップルが多く席を占めている。

僕たちは一番奥のテーブル席を用意された。店員さんにカップチーノとモカを頼んでひとまず落ち着いた。

「ふう、何か面白い人たちばかりだったね」

「そうだね、姉さん」

「姉さんって、からかわないで！　兄ちゃん！」

二人は大笑いする。プチ任侠にもあの時は緊張したけど、今思うと笑えてくる。山さんは皆のリーダーだったのだろうか。

それから、店員さんが飲み物を持ってきた。僕は普段喫茶店に入らないので、これらの飲み物良し悪しはいまいちわからないけど、たぶん普通ってやつだ。

飲み物を一口飲んでからはしばらく、今日のこと、今までのこと、他愛もないこと、いろいろとしゃべった。祭さんとの会話は面白いので知らず知らず時間が過ぎていった。

おしゃべりにも一区切りついて、彼女は座ったまま背伸びをした。

これまでの会話に終止符を打つように、大きく大きく、背伸びをした。

そして、両手を広げた状態で口を開いた。

「ふう、今日のデートごっこもこれで終わりかな」

祭さんが手をパチンとたたく。まるで魔法が解ける合図かのように、これで終わりだというように。

「デートごっこ、はるっちは楽しかった？ わたしは結構楽しかったよ！」

いきなりのことに少し驚いているけど、終わりといったら終わりなのだ。それに順応しよう。

「僕も楽しかったですよ。祭ちゃん、あ、すみません、祭さんの意外な一面もいろいろ見れましたし」

魔法は解けたのだから、彼女はもう祭さんなのだ。

「えへへ、そういつてくれるとうれしいにゃ」

彼女は飲み物を少し飲んで、それからまた口を開く。

「ところで、さ、ちょっと聞いておきたいことがあるんだけど・・・」

「

「？ ええ、いいですけど」

「はるっちつてさ、わたしのこと嫌いかな？」

「えっ？ ぜんぜんそんなこないですけど、そんな風に思わせることしましたか？」

「ううん、ただ聞いてみただけ。聞いてみないとわからないことってあるかもだし。じゃあさ」

彼女はそこでいったん口を止める。

「その前に、店出よっか」

僕たちのカップにはもう何も入っていない。今出るのは、状況としては自然だけど、会話としては不自然だった。

店を後にして、彼女は歩き続けた。僕もその後をついていく。

二人の間に会話は無い。何となく話しかけられなかった。

「うん、ここで話しよつか！」

そこは、あの公園だった。僕たちが毎日ランニングを行っていて、今日も集合場所にいた公園だ。

彼女は公園の端にある、屋根つきの休憩場所に向かっていった。時刻は午後六時、もう十分に暗いので、そこには誰もいなかった。

彼女はテーブルを挟んで、僕の向かい側に座った。ここからだ、暗さのせいで彼女の顔がよく見えない。そんな中で会話は始まった。「それじゃあ、さっきの続きだけどさ、はるっちはわたしのこと、好き？」

「んー・・・えっと、好きですよ。祭さんと話していると面白いし、毎日お世話になっているし」

そんな当たり前のことをどうして聞くのだろう。嫌いな人と好き好んでかわるほどに、僕は変わった人間ではないのに。

「そつか・・・そういう好きかぁ・・・」

彼女の表情はよく見えない。

「じゃあさ、わたしたち、これから友達かな？」

「ええ、当たり前じゃないですか、そんなこと」

僕は笑ってみせる。彼女の表情は見えないけど、きっと笑っているだろう。

「・・・うん、わかった。これから友達、だね」

彼女席を移動する。僕の隣へと席を替えた。ここからならと、彼女の表情はよく見える。

彼女の表情は微笑だ。しかし、その奥に何かがあるような、そんな微笑に見える。

「一分だけ、いいかな」

彼女は僕に全体重を任せて、寄りかかってくる。僕に抱きついてる上体だ。

正面と正面からの抱擁、僕は驚きながらも、何かを口にしようとした。しかし、それはできなかった。

彼女は泣いていた。僕に泣いているのを気づかれないように、声

を抑えて、しかしそれでも僕には聞こえてしまった。

どうして泣いているのかはわからない。だけど、そんな彼女を引き離そうとは思わなかった。

そして、彼女は僕から離れた。

「えへへ、ごめんね。昨日読んだ本のラストを思い出したら、なんか涙が出てきちゃった。でももう大丈夫だよっ！ 間淵祭、元気だけがとりえの女の子、もう回復したのでありますっ！！」

いつも通りのさわやかな笑顔。いつも通りだからこそ、逆に気になる。

彼女の言っていることはたぶん違う。彼女の泣いた理由はわからないけど、きっとそんなことではないだろう。それでも、ここは彼女の言葉を信じておいたほうがいいのか。

「ああ、なんか心の中のものもややしたものがすっきりしたよ。そろそろ帰ろっか！」

祭さんは立ち上がった。僕も立ち上がる。

「それじゃあ、また明日ねっ！！」

陽気に手を振って、彼女は走って去っていく。僕もそれを見送ってから、ゆっくりと歩いて帰っていく。

無視する彼女の攻略法

今日は隣町の図書館まで散歩だ。徒歩一時間、自転車を使えばもっと早くいけるけど、あえて歩くことに意義がある。歩いていくことで普段見えない風景が見えてきたりする。それに、誰かと一緒に行くときは、歩いて行く方が会話ともしやすいしね。

「あー、えっと、それにしてもいい天気だね！」

「・・・・・・・・」

「いい天気の日散歩をすると、体の中の空気が入れ替わる感じがするよね！」

「・・・・・・・・」

「今日は付き合ってもらって悪いね。疲れたりしてない？ 少し休む？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・。先ほどから一人会話が続けている。ここまで無視されると、むしろすがすがしいぐらいだ。」

当然だけど僕は今、二人で歩いている。決して一人演技ではない！ 久しぶりに二人で話したいと思って昨日の夜に連絡したんだけど、返信は空メールだった。それをどう受け取ればいいのかわからなかったけど、とりあえず集合時間と場所を送っておいた。

そして今日の朝、一応集合場所に行ってみたら彼女が来ていた。こないかと思つたよ、って感じで話しかけたらなんと、無視されてしまった。

どうして無視されているのかは、思い当たることがひとつあったので怒るわけにもいかず、どうにもこうにも状態になった。

とりあえず彼女が僕についてくる意思があるのかを確かめるために、イエスならジャンプ、ノーならステイって言ってみたら、ぴよんぴよんとジャンプをしてくれた。どうやらジェスチャーはしてくるようだった。

無言でジャンプをしているのはそうとうシユールだったけど、そんなことをいじっても仕方がないので、イエスの意思を受け取り、図書館へ出発することにした。

それから現在に至るまで彼女は一言も発していないのだ。いないのだ……。

彼女を反応させる方法はあるにはあるんだけど、できればそれは最後までとっておきたい。なんか恥ずかしいし。

「そういえば、光さんって画家なんだって？ あの人、ぜんぜんそんな雰囲気じゃなかったけど、人は見かけによらないんだねえ」

「……」

「画家にアスリート、後は料理人兼演劇役者、お父さんが作家でお母さんはその読者とアドバイザー、本当にいろんな分野に精通した家族だよ。あと知らないのは鞘^{さや}さんか、あの人も何かやっているの？」

「……」

『……』の数が減っている……。沈黙の反応さえ少なくなっているのか！？ このままではまずい、だけど、まだあの手は使いたくないなあ。

「最近はある程度あってなかったけど、何かおもしろいこととかあった？ 僕はこの間、駅前に新しくできたショッピングモールに祭さんといってきたんだけど、もうあそこには行っただけ？ もし行っていなかったら、映画とか見に行かない？」

「……」

なんか変な風になってる！？ コロンだけ？ どういう意味で使っているの？

ていうか、会話で質問を無視されると地味に傷つくな……。僕のガッツもそろそろ限界だ。

いや、負けるな、僕！ ここで負けたら終わりだぞー！！

「そういえば、読書って結構してたよね？ 最近はどんな本読んでいるの？ 僕は白力バ派にはまってるんだけど。あの時代の小説って、

今とはぜんぜん違う背景で書かれているのに結構共感できたりするよね。時代は変わっても人の心は変わらないってことなのかな?」

「ついに無反応!? 無反応って……。そんなシニールな返し手があったとは。もはや返してすらないけど。」

それに白樺しろがほと白力バのボケも完全にスルーされているし……。

何かこれじゃあ僕がただの馬鹿みたいじゃないか。

もう彼女の耳に僕の言葉が届いているのかすら疑問だ。相手の話すら聞かないとは、これ以上ない必殺技だな……。

当たり前だけど、会話って相手の話を聞かないと成立しないんだよね。

ということは、もし彼女が本当に僕の話聞いていないとしたら、これは会話と呼べないのか? それなら何だろう、何ていうものなんだろう……。独り言?

それに勇気を出してハテナ×2なんて荒業を使ったのにそれについての言及も一切なし、まさに鉄壁の無視だな。

しかたない、ここまで来たら、奥の手を使うしかないか……。

本当に嫌なんだけど……。

「そういえばこの間、一週間前だったかな……。まあそれぐらいの最近の話なんだけど、夕食に家族で寿司を食べにいったんだよ。僕と母さんと親父で出かけるのは月に一度の夕食ぐらいなんだけど、そこでさ、すごいシニールな体験をしたんだよね」

一応彼女の反応を見てみる。

……。話を聞いているのかいないのか、全然分らない……。

まあいい、聞いていると願って話を続けよう。

「夕食時の寿司屋ってさ、三十分とか一時間とか、それぐらい待つじゃん? その日もいつもどおりの込み具合で、十名様でお待ちの磯野様とか、そんなアナウンスを聞きながら待ってたんだよ。それで、シニールな体験ってのがこの後に起きたんだけど……。続き聞きたい? イエスならスキップ、ノーなら一時停止でお願いし

ます！」

僕が『ま』の文字を言い切る前には彼女はスキップをしていた。
意思表示早っ！！

高校生の女の子がスキップしている絵は、・・・、かわいい！！
これは『女子高生』だからではなく、『彼女』だからかもしれないけど。まあ、そこはあいまいにぼかしておこう。

なんていつている間に、彼女がどんどんスキップで進んでしまっている！！ スキップと徒歩って、こんなに速度が違ったのか・・・。
「あ、もうわかったからいいよ！ とまって」

僕はあわてて彼女のところまで走っていく。ていうか、意思表示するならもう話しちゃえいいじゃん！ っっておもうのは僕だけでしょうか。賛同者は拳手をプリーズ！！

・・・。はい、ゼロ人・・・。

まあ、彼女を攻め落とすのももうすぐ。今僕がほしいのは、見知らぬあなたの拳手じゃなくて、彼女の返事なんだから、全然傷ついてなんかしてないんだからねっ！！ 男ツンデレはいらないか・・・。

そろそろ本題に戻ろう、もすでに若干手遅れだけど、このネタはオチを引つ張れるほどに面白いものでもないし。引つ張れば引つ張るほどハードルがあがっていくのがこの世の真理。

「僕は次々と呼ばれていく名前を、知り合いがいるかなあとか思いつながら聞いていたんだよ。なにしろこの辺じゃ何個もない寿司屋だしね。友達一家が来ていても不思議じゃないし。そして桜さん一家が呼ばれた次に、それが起こったんだ。あー、ごほんごほん、『三名でお待ちのお客様、いらっしやいますか？』、もう一度言おうか『三名でお待ちのお客様、いらっしやいますか？』って店員さんが言っただ」

その店員さんの声を真似て言ってみた。我ながらなかなか似ていると思う。

「だいたいそうじゃん！！ うちとかもそうだし、何その待ち順無

視の呼び方！！　そこにいた皆がそう心の中で叫んだろっね、いや間違えなく。まあ当然誰一人として立ち上がらなかったね。普通のひとならそうするよね。でも、店員の人ときたらまた性懲りもなく『お客様はいらっしゃいませんか？』なんていつているんだよ。います！　ここに並んでいる人皆お客様です！！　僕とかもそうです！！　そう言いたかった。そんなことを思っているとき、おもむろに三人のお客さんが立ち上がったんだよ。そして、店員さんに何かを話していたんだ。皆がそのやり取りに注目していた。そして、二分かな、店員さんがいきなり顔を真っ赤にして、こう言ったんだ。『失礼しました。三名でお待ちなの、御客様、他の三名でお待ちのお客様はもうしばらくお待ちくださいっ』ってさ

・・・どうだ、一般の人には、ん？　ってなる様なこのネタ。しかし相手が彼女の場合、これは特殊効果を持つのだ。

「・・・、フツ、フツ、読み間違えかつ！！」

彼女は僕に突っ込みを入れた。ついに入れてくれた。

「ふう、やっと話してくれたね。幻」

そう、もうだいたい前に分かっていたと思うけど、本日の散歩相手は僕の彼女、間淵^{まふち}幻^{おとこ}だったのだ。

無視する彼女の攻略法（後書き）

ここから第三章です。第一章は導入。第二章が間淵家の掘り下げプラス祭編でした。

第三章ではまだ触れていない彼女や影さんも登場するかもです。

最後まで読んでくださった方、どうもありがとうございました。
次話は週末投稿予定です。

スキルアップ

「ふふふ、さすがは春君。私に見込まれかけたことだけはあるわ」
「まだ見込まれてないの!？」

それもシヨックだけど、あのつまらない話を賞賛されるのは何か嫌だ。馬鹿にされているような気がするから。

「さて、ヒロインのお姉さんとはかりイチャイチャしていた春君、図書館までは後何分かしら？」

「その、聞く人に誤解を与える呼称はやめろお！ 僕をダメな奴キヤラにしようとする気か」

あと、自分のことヒロイン言うな。聞いているこっちが恥ずかしくなってくる。

「あらあら、これは失礼。こんな呼び方じゃあ、この話から読み始める人に間違った印象を与えてしまうわね。私としたことが・・・。まあ失敗は誰にでもあるし、それを次に生かすことが大事よね」

んん。素直に間違え（本当はそこそこ正解）を認めてくれたのは助かったけど、『失敗は成功の元』タイプの言葉を自分で言うのはアレだなあ・・・、言い訳じみて聞こえる。自分のミスに自分で「ドンマイッ!」って言うっちゃうやつみたいな。

「それじゃあ、間淵^{まふち}幻の姉、間淵^{まつり}祭と、買い物と称して遊んでいた十坂春君。図書館まではあとどれくらいかしら」

「・・・。あと五分くらいかな」

だめだ。幻、しばらく見ない間にパワーアップしている・・・。

これはもう、正面から戦うのはあきらめよう。裏から隙を狙って・・・って、僕がコスイキャラになってる!!

これも彼女の罠か。だとしたら恐ろしい策士振りだ。戦略ゲームにでもはまったのだろうか。

「そう、下手に抵抗しないのはなかなかね。それが正解な場合もあるわ。それじゃあ、これから私の姉、間淵^{さや}鞘とちよっとしたあれこ

れがありそんな春君。図書館の用事が終わったら、どうするつもりなの？」

「フラグ立てた!？」

もしくは鞘さん（あの人のことはあまりよく知らないけど）とのデート的な展開を先につぶしたのか？ 身内にネタをつぶされるとは……。

「ああ、えっと、どうしようか。とりあえず、昼食はどこかで済ませたいね」

「もしくは、昼食は私の家でって手もあるわ。そうすれば、あなたも白姉さんとおしゃべり出来るだろうし、おいしいご飯も食べられるし、いいこと沢山じゃない？」

「ヒロイン以外のキャラとばかり遊んですみませんでした！ もう許してください!!」

腰を直角に曲げるような礼。こんな謝り方、今まで決行したことなんてないし、おそらくこれからもないだろう。

「ふんっ、そんな簡単に許してもらえなくても思っているの？ あなた、もし三人で無人島に行つて、自分だけ無視され続けたらどういう気持ちになるかしら？」

「えっと、傷つきます……」

「その傷の二十パーセント落ちが、私の今の心情よ」

「……うん？」

二十パーセント落ちつて……。自分の心情を正確に表現したつもりなのだろうか。そもそも無人島での傷つてのが、あいまい極まりないんだけど。

「……何よ？」

「いや、えっと……」

「とにかく、あなたは私に取り返しをつかない傷をつけたの」

「はあ……」

「責任、取つてよね……」

「何か雰囲気変わった!？」

自ら空気をやわらげてくれたのか？　いかにもラブコメっぽいその台詞、現実世界で恥ずかしげもなく言える人間がいたとは……。

「で、責任とつてくれるの？」

「あ、えっと……、僕にできる範囲でなら……」

「じゃあ、……ん」

「ん？」

彼女は手を、僕の方へ差し出してきた。何だろう？　仲直りの握手か？

「まったく、察しが悪いのは病気なのかしら？」

ちよつと待って、シンキング中。

……。

……。。

……む、何かひらめいた！　かも？

これ以上待たせるのは得策じゃないな。これでいくしかないっ！！

「お手をこちらへ」

「ん」

彼女の手を取って、そしてその手を持ち上げる。そのまま僕の顔の前まで持ち上げて、そのきれいな手の甲に、キスをした。

「……はい？」

「これが、僕の気持ちさ」

「……普通は手をつなぐ、でしょうが……」

「あれ？」

あ、ちよつとタイム。あれ、やつちやった！？　顔がどんどんあ

つくなってきた。そうか、冷静に考えてみれば、彼女の手を握ってそのまま歩き出すのが正解だったか……。昨日読んだ本の影響が出てしまった！！

「でも、キスもちよつとよかったわよ……」

「え？　ごめん、よく聞こえなかった。もう一度言ってくれる？」

「……でも、菊もちよつとよかったわよ……、って言ったのよ」

「何その脈絡のない感想発表！？ 何で今いったの？」

それに、さつきと何かが変わっているような気が……。いや、なんとなくだけど。

「小さなことを気にしないでくれる？ これだから は困るわ」

「の中がなんだか気になるけど、それを聞いたら『小さなことを気にするな』ってループするつもりだろ」

幻との会話でレベルアップしている僕には、そんなまやかしは効かないぜっ！！

「えっ……。ひどいっ！！ 春君、私をそんな風に思っていたの。・。・」

突然モードが変わった幻。あれ？ 何か、本気で傷ついているんだけど……。さつきまで、皮肉のやりあいみたいのをやってたじゃん！

僕のほうをキツとにらんで、目にはうつすら涙を浮かべている幻が、そこにいた。もしかして深読みすぎた……。この状況、一気に切り開かないとマズい展開になるかも。

「……おとぎい！」

「何よ、ひとでなし」

……。どうやら、しばらく見ていない間に演劇スキルを身につけたようだった。チャンチャラーン。

師匠はたぶん白さん。あの人も結構家にいるもんなあ……。

「あら、いつの間にか図書館に着いていたようね。それじゃあ中に入りましょうか」

本当にいつの間にか、目的地に到達していた。

……。何だろう、このぐだぐだ感は……。

行きと帰りがほぼすべて

『図書館の用事』なんていっても、所詮借りた本を返して借りた本を探して借りる、あえて言うなら本探しが一番の難関だけれども、それも予約をしてしまえばクリアする些細な問題だ。

そう、これは図書館と自宅の位置関係にも作用されるけど、一般的に言ってしまうと、『図書館に行く』において最も時間を要するのは、『図書館へ行くこと』なのだ。メインは『本』であっても、一番の苦労どころは『そこまで行く』ということ。

つまり何が言いたいのかというと、僕たちの現在位置について。

僕の用事は、もちろん図書館での事務作業などといった管理者側のものではなくて、本の貸し借りといった客的なもの。いや、この場合は本の借り借りとでも言うのだろうか・・・。

まあとにかく冒頭の通り、僕の用事もあつという間とはいかなくても、都道府県の名前をすべて思い出して言うぐらいの時間ですんでしまった。

あれだけ引つ張った図書館には一切触れずに、それならいいお前はどこにいるのか！ そんな問いがあつたとして、・・・、あつたとするよ。

僕は、というより僕と幻おしゆは現在、間淵家に到着したところだ。図書館の近くには、高校生が遊べるような施設もたいしてなかったのだ、またしても約一時間の散歩を経て、やつと今、幻の家にたどり着いたのだ。往復に約二時間、図書館内に約三十分。・・・、疲れた。

「ああやつと着いたのね。まるで一時間ほど歩いたのじゃないかってくらい、体中に疲労がたまっているわ」

「それは運動不足だね。僕は十分走ったぐらいいしか疲れなかったよ」
六十分歩行と十分間走、どちらがより疲れるのかは定かではないけど、それを今から解き明かそう！ と思う気持ちが全く生まれな

い程度には疲れている。

「とりあえず家に入りましょうか。広い家ですが、嫉妬しないでね」
「おいおい、僕をその程度の男だと思っているのかい？ 本当に広くあるべきなのは、家なんかじゃなくて心だってことを幼少期から悟っていたこの僕が、そんな瑣末なことを気にするはずがないだろう？」

「本当に心が広い人はそんなことは言わないわ」

「バッタもんは黙ってなさい、と幻。」

しかし、無駄口の応酬もこの疲労状態じゃあいまいちキレがない。とりあえず間淵家で休ませてもらおう。

「ただいま帰りました」

「お邪魔します」

きれいに掃除されたきれいな玄関。『履物の乱れは心の乱れ』なんて言葉はよく聞くけど、その格言を信じるならば、この家の住人心はこの上なく清らかなのだろう。

自分たちのはいていた靴もきちんと整頓して、居間へと歩いていく。

「あれ？ 白姉^{ましろ}さんがいない。こんなことはいつ以来かしら・・・、珍しいこともあるものね」

「いやいや、白さんにだってプライベートはあるんだから、家にいなくたって珍しくはないだろう」

確かに、僕が遊びに来るときにも、白さんは大抵家にいる。ちなみに光^{ひかり}さんと鞘^{さや}さんはめったに見かけない。ここは彼女らにとっても自宅なのだから、まさか帰ってこないことはないだろうが。僕がお邪魔している時間よりも遅くにいつも帰宅しているのだろう。

「どうやらみんなどこかへ出かけてしまっているようね」

「ふうん。そんなこともあるんだな」

「私たち、ふたりだけね・・・」

「何で過ちを犯すモード!？」

「今日、親遅くまで帰ってこないんだ・・・」

「連発!？」

「大丈夫、緊張、してないから・・・」

「なんの話でしょうか!！」

三連発・・・そういえば演技スキルも身につけたんだっけ、台詞だけじゃなく、表情や口調、それに仕草もプラスされていて、こっちが緊張してしまうほどの腕前だ。

「まあ、冗談は置いておいて」

あ、元に戻った。

「とりあえず、お風呂とご飯、どっちがいい？」

「へ？」

「それとも、わ・・・」

「お風呂がいいです!」

彼女の台詞を最後まで言わずに、かなり食い気味で言った。いいフレーズ阻止!

「そう、じゃあお風呂を掃除して、沸かしてきてもらえる? 私が昼食を作っておくわ」

・・・ああ、そういう意味だったのか。「お風呂とご飯、どっちの準備をしたい?」という意味だったことにいまさら気づく。というか、これは気づくほうがおかしいと思うけど。

「それじゃあ、お願いね」

彼女は風呂の位置と(屋敷なので道を聞かないとたどり着けない)掃除方法を聞いて、風呂へ向かうことにした。掃除方法を聞く限り、風呂も一般とはかけ離れたつくりになっているようだった。

あれ、そういえば、幻って料理できなかったような・・・。
.....

仕方ないか。女の子に、料理代わって! なんていえるはずがないし。そもそも僕自身も料理はそれほどの腕前ではないし。愛情さえあれば何とかなるだろう、とあきらめるしかないな。

幻の手作りランチ、こんな唐突にそれが訪れてくるとは、予想だになかった。

まあ、僕は任された風呂掃除をさっさと終わらせて、できるだけ早く料理の”手伝い”にいけるようにしよう。そうしよう！！

どれが嘘！？

「・・・わお」

やはりこの家の風呂は、風呂というよりは浴場というような、どちらも同じ意味なのだけれど、要するに大きかった。個人の持ち物がこんなに大きい必要があるのかは甚だ謎だけど、予想通りの規模だった。

しかし、僕が感嘆の声を上げたのは、別に風呂が大きかったからではない。いや、それにも驚きはしたけれど、それは時系列的に過去の出来事だ。

僕は現在、大きな風呂を掃除中、ではない。掃除はもう終えて、再び居間に戻ったところだ。幻^{まじゆ}がどんな有機物を生成しているか、なんて思いながら居間に戻ってきたところというわけだ。

そして、僕が今驚いているのは、その手作り料理。

「どうかしら？ まだまだ白姉^{ましろ}さんのようにはうまくいかないけど、一応口には入れられるかしら？」

そこにあつたのは、カルボナーラとマルゲリータ。パスタとピッツア。

『そんなの、誰でも作れるじゃん なに驚いてんの？』とか思ってたあなた、どうか誤解しないでほしい。僕は別に、イタリア料理が物珍しいわけではない。大してリッチな家庭ではないが、それくらいのものは食べたことはある。

僕が驚いている理由はほかにある。料理における要素は？ 完成品、食材、調味料、料理道具、盛り付け、取り皿。それも確かに大事な要素だけど、もっと単純な、シンプルな答えがあるだろう？ そう、シェフだ。

驚愕の理由は、このありふれた料理を『幻^{まじゆ}が』作ったこと、作れていることなのだ。

「ああ、えっと、料理得意だったっけ？」

「得意か苦手かと聞かれれば、余計なお世話よ、と答えるわ」

「イエス、オア、ノーでお願いします！」

「ふん、それはわかつているでしょう。でも最近、白姉さんに料理を教えてもらっていたのよ。どっかの誰かさんが『料理作れる娘って、最高だよー！』なんて言っていたから、ちよつと習ってみたのよ」

ああ、結構前の、夕食会るときだったけ？ 確か白さんに向けていたはずだけど……。というか、その前に、言いたいことがある。そんな言い方は、断じてしていない！」

人権侵害とはこのことか！

「あら？ あなたは千里眼でも持っているの？ その言葉を私に言った人が誰だかわかるなんて、なんだか監視されているみたいで怖いわ……。それとも、まさか自分が言ったことだとも思っただけ？ ……うわあ」

「……くう」

「なんて、冗談よ。私があなた以外の男の人と話すことなんて、あるわけじゃない。いいえ、あなた以外の人間と会話をするなんて、あるはずがないわ」

「スケールでかすぎっ！！」

しかも、明らかな嘘を……。嘘というか、戯言にもなっていない。

「いいえ、本当よ。だって私、自分と春君以外を人間と認めていないもの」

「その生き様はちつともかつこよくない、今すぐやめろおお」

そんな人間、それこそ人間枠から除外されるわ。

「くすつ、冗談よ。そんなこと信じているなんて、いろいろ大丈夫？」

「……」

いや、最初のほうは嘘だと思っていたけど、だんだん本当にそんなことを思っているイタイ人なのかと思ったよ……。勘違いだよ

かった・・・。

「それより、どうかしら？」

それは、おそらく料理についてだろう。うん、これは素直にすごいと思う。

「正直、びっくりしたよ。これは平均どころか、それ以上だよ」

「そうね。白姉さんは、どうやら教える才能もあったようね」

ああ、短期間でこのレベルまで達したのは、幻の隠れたセンスのおかげかもしれないけど、インストラクターの腕前も確実に作用しているだろう。

白さん、何気にオールラウンダーだな。あ、フリスビーは苦手だったっけ。

「それでは、冷めないうちにいただきましょうか。ちなみに食後は『行動の責任は誰のものか？』についての討論をやるから、軽く考えておいてね。春君も命題になれてきたようだし、これからは質問に答えていく形で進めていくから」

「え？ 『漫画を読むのは無駄なことなのか』じゃなかったっけ？ 昨日のメールには確かそう書いてあったけど」

「あれは冗談よ」

「そこも冗談！？」

なんか、幻が『信じてはいけないキャラ』に変貌しつつあるんだけど・・・。

「どうして嘘なんてつくんだよ」

「だって、・・・、好きだから・・・」

「うつ・・・、って話がすり替わっている！」

「言ったでしょう？ あなたは大分命題になれたようだから、次のステップに移ると。これからは事前の準備もなしよ」

「だったら、嘘の命題を送る必要はなかっただろ？ 命題形式を変えらって、メールすればすむんだから・・・」

「『あなたの命題ランクが上がったので、これからの命題のレベルもアップします』なんてメールが着たらイラッとしらない？」

「イラッとするけどさ・・・、それは文面の問題だろ？　はあ、もういいよ。こんなことで文句言ってたら、ランチが冷めちゃうし」

「どうやら精神ランクも上がったようね」

「イラッ！！」

はあ、いちいち反応しているとこっちが疲れてくる。でも、突っ込み役が僕しかいないし、これはもはや宿命なのか・・・。

「ふう、わかったわ。これからは大事なことは電話で事前に伝えることにするわ」

「わかってくれてよかった。あと、『ふう』がなければもっとよかった」

「それじゃあ、本当にそろそろいただきますしよう。それではお手を合わせて」

言いたいことはいろいろあるけど、今は幻が作ってくれた手料理を食べることにしよう。言いたいこともその後言っけど！！

僕も彼女に倣って両手を合わせる。それでは食事の礼儀を。

「いただきます」

「ごちそうさまでした」

幻の手作り料理の味、単純な料理としては可もなく不可もなくだった。幻の味もその料理能力、それをかんがみればその評価はかなり違ってくる。なんて、偉そうに批評家ぶってないで正直な感想を述べよう。

「おいしくいただきました」

「そう、それはよかったわ」

幻は、自分のと僕の皿をまとめて流しへ持つていこうとする。

「ああ、後片付けは僕がやるから、少し休んでてよ」

「いいえ、春君だって風呂掃除をしてくれたわけだし、これは私がやるわ」

「じゃあ、ふたりで片付けようか。僕が食器を洗うから、幻はそれを拭いてよ」

「・・・わかったわ、そうしてもらいましょう」

僕がやる！ って主張しても、幻はきつと自分の意見を曲げない。だったら折衷案、二人の意見を取り入れたものが最適だ。

「それにしても料理、本当に上達したよね。たぶん僕より幻のほうがうまいよ」

あまり公表していないけど、僕もそれなりに料理ができるのだ。

まあ、『それなり』は超えない程度だけだ。

「私が両目を開ければ、こんなものよ」

「本領発揮っ!？」

なら料理ができないのも仕方がない。というか、それ以外のことができている時点でかなりすごいだろ。それと、もしかしたら気づいていないのかもしれないけど、目、割と開けてたよ。

僕は食器をスポンジで洗って、それを彼女に渡す。彼女はそれを受け取ってふきんで拭いて、食器棚に戻す。こういう『家庭』の仕

事を彼女とやるのは、なんだか、悪い気はしないな。

「これで最後だね」

最後に二人分の箸を洗って、幻に手渡した。

「そうね、おつかれさま。飲み物いれるから、居間に戻ってて」

「了解」

先に戻るように促されて、居間にある上質そうなソファに座ることにした。

ふう、これでひと段落。飲み物でももらって、少しくつろごう。

そして、その後には……。『行動の責任は誰のものか?』、それについては考えさせられることがいろいろとあるけど、それよりも、命題形式の変更。会話をしながら命題をといっていくということなのだろうか。

思えば、僕たちはいつも、どちらかが出題してどちらかが答えるといった、一方通行とまではいかなかったも、ほぼどちらかが語り通す形式をとってきた。そう表現すると、なんだかそれが悪いことのように見えるけど、それは言うならば発表、別に悪いことはない。

でも、今回からは発表が討論になる。それはつまり、会話をしながら同時に考え事もするということだ。考えるセンスはもちろん、考えをまとめる瞬発力が重視される。それも、話をしながら話を聞きながらの思考、当然集中力も落ちる。

この前のピクニックでの四題命題のさらに難易度が上がったもの、と考えればいいのだろう。

「お待たせ。紅茶でいいかしら?」

幻が紅茶セットを持ってキッチンから戻ってきた。ここに座ってからまだ一分もたっていない気がしていたけれど、どうやらかなり考え込んでいたらしい。

「うん、ありがとう」

「これくらい、土下座には及ばないわ」

・・そりゃ及ばないだろう。

幻は僕の隣に座った。ほかにもいくらでも座れる場所はあるのに、

それにこれから『命題^{かいわ}』をするんだから対面しているほうが話しやすいのに、隣に座った。それもピッタリと。

こんなことでいまさら緊張なんてしないけど、心がまったく反応しなかったと言えは嘘になる。

「さて、それじゃ始めましょう」

紅茶を入れながら、開始を宣言した。久方ぶりの命題の始まり。

「『行動の責任は誰のもの？』これが今回の命題。この命題は少し曖昧だから、まずは具体例から入りましょうか」

確かに、僕が今回一番悩んだことは、命題の曖昧さ。いや、今までも十分曖昧だったけれど、時間は与えられていた。厳格な定義はなされていなくても、そこからオリジナルを^{自分の見解}考える猶予は与えられていた。だから曲がりなりにも討論、いや演説は成り立っていた。

しかし、今回は下準備がない。オリジナルを考える時間がない以上、具体例という導きがあるとしても助かる。もちろん、土下座するほどではないけれど。

「たとえば、ある少年が万引きをしたとします」

・・・、なんか嫌なたとえだな。でもこんな例を使うからには、それなりの理由があるのだろう。

「万引き、彼は万引きをしてしまった。このとき、この万引きの責任は誰にあると思う？」

第一に思いつくようなことは大体間違っているというけれど、そして今回もやはり間違っているのだけれど、僕はつい反射的に答えてしまった。

「そりゃ、万引きをしたその子じゃない？」

「そう。でも、もしその子が万引きを悪いことだと知らなかったとしたら？」

「・・・、それを教えなかった親が悪い、かな？」

たった数秒で意見が変わってしまったけど、もしその子が悪を悪と知らないのだったら、それを教えなかったその子の親に非があると思う。

「じゃあ、その子が万引きを誰かに強要されていたとしたら？」

「強要した奴も悪いけれど、それに従ったって言うのも・・・」

「なんだかよくわからなくなってきた。それに、誰が悪いなんて考えるのは浅ましいことのように思えてきた・・・」

「この具体例における行動とは『万引き』ね。その責任は誰にあるのかについて考えてみたけれど、その子の状況によって、また私たちの考え方によって、その責任者はころころと変わってしまうものね」

「ころころと、本当にころころと変わっていく。逆に、その万引きの責任がない人がいないような気がしてきた。」

「極論を言ってしまったえば、その子供とかかわったことのある人には皆、責任があるといえるわね。その子とかかわった時に、万引きがいけないことだって教えることが本当にできなかったのか、そう考えればね。そしてそのかかわった人にかかわった人にも責任があるといっても過言ではないわ。その人に、万引きが悪いことだって子供に教えるべきだと教えていなかったのだから。少なくとも、その子の背景を作った人間は皆、責任者ね」

「かなりスケールの大きな話になってきたけど、屁理屈が許されるのなら、そうとも言える。」

「さらに言えば、その盗まれた商品、それが魅力的だったことにも責任を見出せるわ。まあ、それを製作した方々は『とんだとばっちりだ！』と思うけど。とんだとばっちり、ふふふ」

「・・・。雰囲気がち壊した。もう慣れたけど。」

「でも、その万引きについて、本当に皆に責任があるのか？」

「そんなのは、所詮屁理屈じゃないか。言いがかりといってもいい。ないわね」

「ないのかよ！」

「さっきの持論はどうした！ その発言の責任は自分にはないって言うのか??」

「落ち着いて、さっきのは少し大げさに言っただけよ」

「少し、じゃなかったけどな」

「それならあなたに質問するわ。少年の万引きについて、その責任は誰にまであつて、誰からはないの？」

むう。そう言われると難しい……。

「うーん、その子供とその両親。いや、親に限らず、その子供を道徳的に導くべき人にも？」

「それって、つまりは社会。そしてその構成員、つまり皆ってことじゃないかしら？」

「あ……」

あれ？ 皆に責任があるというのはいいすぎだ！ だなんて言うておいて、結局たどり着く結論が『皆』か……。

「そう、結局皆なのよ」

皆。僕や幻や、僕らの家族や、知っている人や知らない人、皆。

「今回の命題で結局何が言いたいのかというと、それは決して、皆が悪い！ なんて、そこから何も得られない事実ではないわ。私が言いたいののは、『責任がない人なんていない』ということなのよ」

誰もが責任者、つまり無責任者ゼロ。やっぱり大げさに聞こえるけど、僕自身もその結論に達してしまった以上、大げさ大げさなんて言うまい。事実を受け止めよう。

「責任がない人はいない、それがどんなことでも。それが私の言いたいことよ」

僕はよく、そんなの僕には関係ない！ なんて心の中でつぶやいているけど、そんなことはない！ ということなのか。どんなことであれ、無責任でいてはいけない、いけない。

「一応ちゃんと結論をつけておきましょう。『行動の責任は誰のもの？』それは『誰も』。『誰も』はイントネーションで意味が変わる、対極の意味を持つ言葉。あなたは『誰も』をどう読むかしら？」

……。結論なんてとつくについているのに、あえてまとめなおした理由はそれが。

最後までギャグみたいで、なんだかしまらないけど、その読み方

「は
もちろ
ん・
・
。」

「あれ、ここは・・・」

あれれ？

あれれれれ？

あれれれれりえ、あ、かんじゃった。

なんてぼけている場合じゃない！ あいにくだけど、今の僕にはそんなギャグをやっている余裕はない。いや本当に！

現在パニック中。えっと、とりあえず、僕はさっきまで何をしていたんだっけ・・・確か、ベッドで本を読んでいたかな・・・。

自室で読書にいそしんでいたはずのリーダー（読む人）こと僕が、どうしてこんなところに？

って、あれあれといつまで言っても仕方がない。もしかしたらあるかもしれないけど、迷える子羊に救いの手が差し伸べられるかもしれないけど、ここは自分で動くところだろう。

『不測の事態に陥ったときにも己を見失わない』、それは僕にはまだまだ無理なようだ。でも、いまからでも、『しばらくしたら落ち着いた』にランクダウンするけど、現状を見つめてみよう、自分で。

「ふう、このドッキリにもそこそこリアクションしてあげたし、もういいかな。さ、そろそろアクションに移ろう」

誰に言うわけでもないけれど、とりあえず僕は言い訳じみたことを言ってみた。

さてさて、こういうのは5W1Hであらわせばいいのかな？ いや、『どこ』だけを説明すれば十分だろう。少なくとも、僕の取り乱し荷も納得してくれるだろう。

おっと、その前に腰を落ち着かせてもらえるかな？ あのふかふ

かしそうないすにでも座らせてもらおう。

ん、よし。なかなかのいすだ。これで本当に落ち着くことができた。それじゃあ、話を戻そうか。

「図書館っ！」

え？ よく聞こえなかった？ それは失礼、それじゃあもう一度。

「ライブラリイイ！！！」

どうだ、図書館だ！ ライブラリーだ！ 驚きだあー！！

それも、そんじょそこらの図書館じゃあない。いや、いつの間にか図書館にいる時点ですでに驚きだけれど、その図書館もまた、驚きに値する異常さなのだ。

県立図書館、僕が今までに行ったことのあるもつとも大きな図書館だけど、それでようやく『ここ』の広さ、本の多さを伝える物差しになる程度。

バームクーヘン状のフロア、そのカーブに沿うように、何列もの本棚がそびえている。ここからだとは断定はできないけれど、おそらくこのフロアを一周、この大きな本棚が設置されているのだろう。

そして、ここは四階、・・・、四階だ。情報のソースはたまたま目に付いたプレート。とりあえず信じて間違いないだろう。つまり、この規模のフロアが下にあと三つ（一階は受付やらないやら打としてもあと二つ）、そして上にもいくつか・・・。

中央が吹き抜けになっているので、ここからは何回にもわたって背お膳と並んでいる本が見える。

まさに本の館。

どうだ？ これなら驚いても仕方がないだろう？ むしろ、数分のあたふたで落ち着くことができた、そのことを評価してもらいたい。

なんて調子に乗ってみたい。

「それは言い過ぎね。すぐに落ち着いたことを評価？ 五十歩百歩、知らないかしら？」

突然、何の前触れもなく僕のひざの上に、幻おしゆきが現れた。
「うおお！」

驚いた！ これはリアクションしてやったわけではなく、本当に心のそこから驚いた。

「大丈夫？ まさかそこまで驚くなんて・・・」

幻が少し引いている。まるで予想外だったとも言わんばかりに。
「いや、さっきの叫びは妥当だよ」

・・・そうだよ？ だって、突然現れたし・・・。

「そう、春君はそんなことで驚くのね。なら、普段の生活も、あなたにとってはビックリの連続なのかしら？ こんなこと、毎日腐るほどおきているでしょうに」

「そんな日常、御免蒙る！！」
どこの日常だよ。

「ふっ、まあいいわ」

「何に対しての笑い！？」

僕の肝の小ささか？ でも、あれって・・・、普通は驚く、よね？
そもそも普通なんて独断以外の何者でもないけれど、そんな屁理屈はおいておこう。

「それにしても、どうしてこんなところに・・・」
落ち着いたといっても、僕が、僕たちがここにいるのが判明し

たわけではない。むしろ、冷静になったことでこの謎がより目に付くようになった。

不可解が不可解なまま残っていると気味が悪い。

「『どうしてここににいるか？』それは重要なことではないわ」

・・・そうかな？

「大事なのはここで何をするか？ もっとも、そんなことは決まりきっているけれど」

・・・そう？

「まさか、本がたくさんあるから読書でも始めるってわけ？」

「いいえ、でも『本』に着目しているのはグッドね」

グッドをいただいた。わあい。

「今ここでやるべきこと、それは命題よ！」

まあ、そう言うことはなんとなくわかっていたよ。でも、今やるべきことはそれではないだろう・・・。

場所は変わって、一階のロビー。一階のちょうど上が吹き抜けになっているところ、そこは憩いの場として用意されたスペースのようだ。

当然ながら、僕たちは別々のいすに腰を下ろす。

「さて、それでは命題をはじめましょうか」

命題、今ここでやるべきことではない。それは明らかだ。

でも、幻の一言によってそれが現在の最優先事項となった。

『命題が終わったら、ここから出ましょうか。出口ならさつき見つけてきたから』

・・・、命題が終わったら出る、逆に言えば、命題が終わるまでは出ない。

そんな脅迫まがいのことをされて、僕は命題に付き合わざるを得なくなつた。

まあ、命題に興味がないわけではないし、幻と語りたい命題がひ

とつあるし。この場所にぴったりな、うってつけの命題が。

「『本を読むとは何か』、家で本を読んでいてふと思ったんだ」

そう、ここに来る前、まだ僕が自室にいたときにそんなことを思っていた。

そうしたら、いつの間にかほんの館にいるんだから、いやはや驚きた。

「このシチュエーションにぴったりの命題ね。それに面白そうだから今日はそれにしましょう」

えっと、僕が質問をしながら命題をといっていくだっけ？ これって、出題側も意外と難しいな。幻は軽々とやっていたからその難易度に気がつかなかった。

今回の命題は僕の立案。つまり事前の思考タイムはあった。

でも、いくらこつちに多少の『下準備』があるからといって、僕のことはいわば『導き』。されるほうは助かるけれど、するほうは助ける役だ。難しくないわけがない。

まあそれでも、それをやらなくちゃいけないんだけど。やる前から泣き言は格好悪いな、とりあえずチャレンジだ。

「僕も君も読書はするほうだろ。それも生活のサイクルに含まれてるほどに」

「そうね、読書は毎日してるわ」

「そうすると、これまでにそれなりの量を読んできたわけだね」

「まあ、そうね」

「その中の、どれくらいの内容を覚えている？」

「・・・どうかしら？」

「題名だけなら？」

「きつと忘れてしまったのもあるわね」

「そうだろう、僕もそうだ題名だけならまだしも、その中身、内容まで聞かれると、それほど説明できないと思う」

「でも、そういうものでしょう？　すべてを暗記しているなんて、そんな人はいたとしても間違えなく少数派だわ」

「僕もそれには同意だよ。人は忘れる、それはいいことでも悪いことでもあるんだから」

忘れる、これについても対話してみたいけれど、今は今の命題に集中。

「忘れてしまった本、誰にだってあるであろうその本。僕たちはその本を、『読んだ』って言えるのかな？」

「・・・なるほどね」

どうやら言いたいことが伝わったらしい。さすが幻。

「昔読んだ本の内容を忘れてしまった。それは事実。なら、今が昔になったとき、たとえば二十年後、今読んでいる本の内容を忘れていたとしたら、僕たちは今、本を読んでいるといえるのかな」

今読んでいる本、それも永遠に記憶の中に鮮明に残るわけではない。本の内容を忘れてしまったなら、その本を読んだとはいえない。だったら、未来を見据えてみれば、僕たちは本を読んでいるのだろうか？　ただ眺めているだけなのだろうか？

「そうね、私は『読んでいる』と思うわ」

まっすぐに僕のほうを見て、そういった。言いたいことの出だしを見つけたようだ。後はその道をたどっていくだけ。

「そもそも私は、『本を読む』ことは『内容を覚える』ことではないと思うの」

まずは僕の考えの否定から。僕は本の内容を忘れたら、その本を読んでいないことになるといったけれど、そしてそれを半ば当然のように考えていたけれど、その前提が幻とは違うのか。

「『本を読む』ことは『本から何かを読む』こと」

本から読む、何を？

「その本を読んで何かを感じる。愛とは何か、人の心の汚さ、本にある善意、そんな、作品を通して考えさせられるあれこれを。」

そして、それらを自分の中に取り入れること。受け入れるのではなくて、取り入れること。信じるのではなくて、それを知ること。数ある考えのひとつとして、決してそれを盲目的に信じるのではなくて」

「それが『本を読む』こと」

「そう、それが私の思う、『本を読む』ということ」

なるほど、その本を読んで感じたこと、考えさせられたこと。自分を変えてくれる、変えてしまうもの。本に影響をされること、それが本を読むこと。

「たとえば、細かな内容を忘れてしまったとしても、そのときに感じたことは、あどきに思ったことは、このときに知ること、自分の中に残って、『わたし』の一部になる」

「『ぼく』の一部に」

「だから、いうなれば、『本を読む』ことは『わたしづくり』ということね」

「『わたしづくり』か。なんかいい言葉だね」

「そうね、われながら相変わらずの良命名だね」

・・・それは違う。

「さて」

幻が立ち上がる。今日の命題はこれで終わり、その合図。

僕も立ち上がった。さて、これで帰宅か。そういえば、結局ここはどこなんだろ。それと、ここにある本って、読んでもいいのかな？

これだけの量の本は、僕を少なからず興奮させている。もしかして、間淵家の持ち物なのだろうか、だったら何冊か借りたいな。ちよつと幻に尋ねてみようかな。

「こんな素敵な命題をくれた春君には、『お礼』をあげます」

僕が今まさに幻に話しかけようとした時、不意に、何の脈絡もな

くそういって、僕に抱きついた。

「はぐ？」

急に抱きつかれると、さすがにドキツとする。

「いいえ、目をつぶって」

『お礼』とやらはどうやら別のものらしい、なんて考えていると、幻の顔が、口が、近づいてくる。

こ、これは……。

幻との出会いから早四ヶ月、12月も中旬に入り、寒さにも慣れてきた今日この頃、じゃなくて！ そんな手紙の決まり文句じゃなくて、コレはアレなのか？ 僕の計画が完璧に崩されてしまうけど、ここでアレなのか？ そんな唐突な、いや、でもそういうものなのか？

幻が寸前のところで止まる、目をつぶっていてもわかるほどに近づいて、そしてそこで停止した。

ここからは僕の役目なのか？ そうだろう、だいたい、女のこの方からアレするのは、一回目は僕のほうからしたという、そんな気持ちを感じて、受け入れてくれたのだろうか。だとしたらありがとう！

僕は勇気を振り絞って顔を近づける。当然初体験だ、緊張もするさ。笑うなよ。

でも、それは幻も同じ。いや、幻が初体験かどうかはわからないけれど、この状況で緊張しないはずがない。はず。

でも、半端なく緊張している、このままだと息が荒くなってしまいそう。それはさすがにまずいだろう。なんとか一度落ち着かないと。

そう、リラックスのために、一度だけ目を開けて、幻の顔を見てみよう、きつと真っ赤に染まっているはず！ それを見れば僕

も落ち着ける。

そんなどうでもいい好奇心から、僕は眼を開いてみた。ゆっくりと、少しずつ……。

「あれ？」

真っ白だ。予想していた色ではなく、真っ白だ。
というか……というか、とういか、というか!!

天井だ。

僕の目に映ったのは、自室の真っ白な天井。他人に見せても何の遜色もない、立派な天井だった。

……。

……。

……。

「夢？」

11（後書き）

投稿に間を空けてしまつてすみません^^；

今回は二話に区切ろうかとも思いましたが、一話にまとめました。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。よかったら、これからも暇つぶしにどうぞ!!

家族再会

「こんにちは」

本日、十二月二十日。後三日で学校も終業式を向かえるこの頃。そういえば、学校での出来事についてまったく語っていないなあ・
・といまさらながら思う。

学校、スクール、ハイスクール。呼び名は何でもいいが、とにかくそこでの日々について、あまりにも語っていない。それこそ、僕の日常にそれが含まれていないと思われても仕方がないくらいに。

誰にも日常があるように、この僕にも日常がある。ないとは言わせない、ある！

日常。朝起きて、学校へ行って（途中で幻おとこと合流）、授業を受けて、下校して（ここも幻と）、帰宅して、勉強して、読書して、命題について考え、寝る。そしてまたはじめからのサイクル。

ところで、今の『日常』の中に『食事』が含まれていないからといって、当然だけど、僕は食事をしていないわけではない。そんなわけではない。当然食べる。皆が食べるように、僕だって食べる、『人間』なのだから。

ほかにも、風呂に入っているとは言っていないけど、風呂にも入っているし、究極的に言えば、息をしているとは言っていないけど、息だってしている。

おいおい、そんな『当たり前』のこと、そんな『当然』のこといちいち言うなよ！ そう思うかもしれない。だが、それでいい。僕の発言の狙いは、そう思ってもらうことなのだから。

まあ、そう思ってもらうのはあくまで取っ掛かりだけ。

取っ掛かりの次、それは思い出してもらおうこと。知ってもらわ
んてあつかましいことは言えない、ただすでに皆知っていること
を、僕にも適応してもらおうこと。

それは何かって？

それは、『僕の語ったこと』と『僕の日常』は、合同ではない、
イコールではないということ。それらは決して統合関係なんかじゃ
ないってこと。

『僕の日常』をすべて、『僕が語ったこと』から知ることは不可
能。『僕の語ったこと』だけが『僕の日常』とすることも不可能。
それが思い出してもらいたいことだ。

そう、僕は『学校へ行く』ことを語っていないけれど、だからと
いつて『学校へ行く』ということがない、学校に行っていないわけ
じゃあない。

まあ、『学校へ行く』といっていないからといって、学校に行っ
ているということになるわけじゃないけれど。とにかく、（語って
いない〴〵やっていない）の等式は成り立たないということ。そうい
うことだ！！

……。たかが僕が学校へ行っていることを知ってもら
うために、どれだけしゃべっているんだろう。こういうのを口下手と
いうのか。

いや、一応話せて入るのだから、口下手じゃなくて話下手か。

話下手……それって最悪のスキルじゃないか……。

主人公が話下手、これだけ聞くと、ちょっとシニールで面白そう
だけど、『話下手な彼と対人下手の彼女の命題コメディ』なんてあ
つたら目を留めてしまうかもだけど、絶対に序盤からイライラする
よな……。

僕は今までみんなにこんな不快を与えていたのか……、みんな

そーりー。

うん、僕なりに誠意を見せて謝ったことだし、そろそろ思考終了。僕が学校に行っていることもわかってもらえただろうし、僕が話下手なことは目を瞑ってもらおうとして、そろそろ本題に戻ろう。話下手ながらも、ちぐはぐながらも。

「おう、おひさじゃん！」

冒頭の僕の挨拶、そこから話はそれにそれてしまったけど、軌道は修正されたよ！ 今のはそれへの返事だね！

「お久しぶりです、光^{ひかり}さん」

僕は今、間淵^{まふち}家の玄関にいる。玄関が開いていたので挨拶をしてみたところ、光さんが出てきてくれたわけだ。

開けっ放し。といっても、間淵家には門があつて、そこからも歩くといえるほどの距離を歩くこの家に、たとえ家へのドアが開いていたからといって侵入するような、そんな肝の太いこそ泥はいないだろうから、決して無用心になるわけではない。

僕が今日この時間に来ることは伝えていたので、勝手に入ってね〜という歓迎のしるしだったんだろう。その気遣いも、僕の小心スキルによって台無しにされたわけだが。

そんな僕に対して、間淵家の歓迎スタイルに応えられなかった僕に対して、光さんは笑顔で話しかけてきた。

「まああがりなよ。時間を守るあたしや春くんと違って、うちの連中はまだ準備が済んでいないようだし。まったく時間も守れない人間が、何を守るんだか・・・」

意味深なことを言いながら中に入るように促してくる。・・・な

んだか今の光さん発信フレーズについても考えてみたいけど、ここは自重しておこう。話下手だしね！・・・。

「じゃあ・・・おじゃましま〜す」

もはや親しみ深い家となった間淵家に入る。

「とりあえず居間いこうか。白も準備は終わってたし、お茶でも入れてくれるだろ」

自分で入れるつもりはないのか・・・。まあ、光さんはお世辞にも家事が似合うなんていえないけど・・・。そういう人がやるとギヤップ萌えがうまれるんだけどなあ・・・。

なんてことはこれぼっちも思っていないよ。ないともさ！

「さて、居間には今、何人いまそかり〜つと。お〜、春くんはもう来たぞ」

居間に入って、僕の来訪を知らせた。ちなみにそこにいたのは白さん、お母さん、お父さん。

「こ、こんにちは・・・、こんにちは」

「あら〜もう時間だったかしら。ごめんなさいね、幻と祭まつりがまだおわっていないみたいなのよ」

「まったく、時間も守れない人間は何一つ守れないというのに・・・。すまないね春君。二人の準備が終わるまで、少し待っていてくれるかな？」

「あ、はい」

今のお父さんの言葉・・・、なるほど、さっきの光さん名言の元ネタはお父さんだったのか。

光さんも、僕が気づいたことに気づいたらしく、珍しく頬を赤く染めている。確かに恥ずかしいよな・・・。

「あ、こちらにどうぞ。今、緑茶を入れますので。それとも何か、別のものがいいですか？」

「緑茶を、お願いします」

喫茶店の店員よろしく、滑らかに注文を聞いてきた白さん。さす

がに今のはかまなかったか。

二人はまだ準備中か。そんなにいろいろ用意する必要はないと思うけどなあ。

あ、そういえば京の行事についてまだ行っていなかったけ？
これは失礼。

それでは言わせていただく、今日は待ちに待った、とても楽しみなその行事とは。

『
』

舞台変わらず

「お待たせっ！！　　ありゃ？　　はるっちも着いてたんだ！　　おはよっ！」

白^{ましろ}さんが出してくれた飲み物も残すところあと一口という時、二人が居間へやってきた。

「こんにちは、祭^{まつり}さん・・・」

まずは元気な声の主に挨拶。ちなみに現在時刻、十二時半で、おはよの時刻はとくに過ぎていくわけだけど・・・そのあたりは価値観の違いなのかな。とりあえずこちらは昼用の『こんにちは』で返しておいた。

「幻も、こんにちは。なんか結構時間かかってたみたいだけど・・・、もう準備は終わったの？」

そしてもう一人、僕の同級生であり、今年の夏に初対面で命題を吹っかけてきた変人であり、僕の恋人である間淵^{おしづ}家が末女^{おしづ}幻。恋人、そうきちんと確認したことはなかったけれど、ここまできてただの友達だと思われていた、なんて顛^{てんまつ}末はないだろう。それはギャグを通り越して、もはや読者への冒^{ぼう}瀆^{とく}だ。ましてや今日の僕の計画は、そのこのあいまいなところを明確にするものだといえそうだけれど、彼女^{おとぎ}が彼女^{こいびと}でないと、僕がただの奇人変人、かなり痛い人になってしまう。

「ええ春くん。ご機嫌麗しゅう」

ご機嫌麗しゅう。まあそれも挨拶だけれど、僕の脳内にも挨拶力テゴリーに含まれているけれど、僕はそのフレーズを使用する人間を初めて見た。まあ彼女の場合、お嬢様、ではあるからそれを使うに値するのかもしれないが、始めの会話ぐらいふざけないでほしいと思う僕であった。

「どうやらこれで全員そろったようね。時間は・・・予定より少し早くいかしら。まだだいぶ余裕があるわね。でも、向こうでドタバタして疲れるのも嫌だし、早めの出発としましょうか。皆、異存はないかしら？」

そろそろ出発ころかな？　なんて思っていたとき、そんな声が聞こえてきた。声の主のほうを、いやもう既に正体はわかっているのだけれど、それでも万が一の聞き違いをの可能性を排除すべく、振り向いた。

皆の指揮をとっているのは、やはり幻だ。まるでそれがそうあるのが当然であるかのような、不自然な感を一切与えないような、そんなリードだった。僕たちを待たせたことなんてなかったかのように、一切悪びれることなく出発を促した。

「いや、いやいやいや。幻、進行の主導権を握ろうとする前に、いろいろ言うことがあるだろう？」

怒っていないよ。怒っているわけじゃあない。感情的にならないで理性的にいこう。怒るのはあまりうまくない。でも、僕が何か言いたくなる、その気持ちはわかってくれるだろう？

遅れたこと謝れし！！　とか言うキャラって、ほぼ確実にセコいやつだと認識される。もしくはストーリーにおけるリアクション役あとは、正常ぶって周りの人間の面白さの引き立てる役とか。それは語尾がなんであつても、おそらく変わらないだろう。

そう、『謝れフレーズ』は百パーセントで発言者のランクを下げる、鉄板ワードなのさ！

そんなフラグを踏むのは面白くない。僕にそこまでの自虐的趣味はないことだし。

まあ、とはいっても悪いものは悪いわけで、だからそれとなく『

言うことはないか？』なんていてみたんだけど。悪を良しとするのは、幻のためにもよくないしねっ！

そんな僕のへっぴり腰主張でも、幻ならきつと気づくだろう。そして謝るだろう。なんだかさつきから謝る謝るばかり言っている気がするけど、そんな疑いもかき消してくれるような、満点の返答をしてくれるだろう。

まあ満点は言い過ぎかもしれないけれど、九十点は取ってくれんだろう。なんて批評家ぶってみる僕。

「言うこと？　・・・。えっと・・・。あら、私としたことが・・・うっかりしていたわ」

よかった、幻が空気の読める女の子で。これが話の通じないような間抜けだったら、さらに『謝れ』に近いことを言わされて、つまりは地雷の近くまで進まされて、僕がセコいやつにならざるを得なかったところだ。

「言い忘れていたけれど、私、この前の試験は学年一位だったわ」

「ええ？　幻ちゃんまた一位取っちゃったの？　すごいねっ！」

「勉強は得意だもんなあ。ま、あたしの血族だけはああるな」

・・・。百二十点っ！！

ダメだ。彼女のほうが一歩も二歩も上手だった。

こんなときのために隠してあった懐刀『学年一位』、そしてそれに反応する姉二人。完全に計算されつくしている。

僕の謝罪要求プレッシャーを感じていないことはまずありえないから、それを避けるために、自分が謝らないためのとんちだろう。

そんなに頭をひらめかせて、そこまでして謝りたくないか？　と思ってしまうが、僕の想像を超えるパフォーマンスを見せてくれた

ということ、今回は百二十点をつけさせていただきました。

彼女のとんちを採点することで、なんとなく僕のほうが上みたいなオーラをだしておいて、心を落ちつけようとする僕。

「そうだな。そろそろ出発してもいい頃合だろう。だがその前に、幻、約束の時間を守れなかったことを春君に謝りなさい。私たちにいい。もちろん遅刻自体は許すべき行為ではないが、私たちは家族だから、お前と祭が遅れることは想像に易かった。それを踏まえての行動をしていたのだからそれほど迷惑はかかっていない。だが春君には謝りなさい。たとえどんな理由があつたところで、彼の貴重な時間を無駄にしてしまったのだから、そういうところはきちんとしておきなさい。今後のためにもね」

「・・・はい」

父親の威厳。

僕のこしゃくな変化球にうまく対応してしてやつたりのところに、回避不可の直球が飛んできた。

なるほど、謝罪要求でも己の品位を落とさない、そんなやり方もあつたのか。まあこんなかつこよすぎる台詞が似合う程度の品を持つた人間にしか使えようがないけど・・・。なんだか格の差がはっきりと見せられたな。

「春くん。待たせてしまつてごめんなさい。それと猪口才な攻撃を華麗によけてしまつてごめんなさい。・・・許して、くれる？」

僕の方へ歩み寄ってきて、いすに座っていた僕の元へ、方ひざを立ててがかんで両手を取り、うるつとした目で上目使いにそう聞いできた。

ドキンときた。

かなり芝居がかった動作だが、幻のような美人がこれをやると、正直かなりこたえる。明らかに失礼なフレーズや不自然な振る舞い

に目がいなくなるほどの、彼女の瞳に吸い込まれしまうほどの、そんな魅力を持っていた。

それを客観的に描写できている時点で、僕の心にもいくらかの余裕はあるのだろうけれど、心臓の鼓動、思考の停止具合、どんなに強がってもいつもどおりとはいえない。

一言どころか一言で許してしまいたい、そんな風に思わされたけれど、ここで許してしまえばこれから先、同じような手口で言いくるめられてしまう気がする。ここはちゃんと考えて行動すべきだ。それこそ、今後のためにも。

僕は取られた手を握り返し、自分が立ちあがるとともに彼女も立たせて、その魅力的な瞳、目と目を合わせてやつしく微笑むようにして言葉を紡いだ。

「当たり前だろ。僕は君が好きなんだから。たとえ幻を待っている時でも、それが無駄な時間だなんてことはない。僕はそう思っているんだから」

そういつて、軽く彼女を抱き寄せる。

策には策を技には技を、そういう思惑もあるけれど、僕のこの言葉に嘘偽りはない。それは確かだ。

僕の言葉の効果はどうか。抱擁をといて。彼女の反応を待つ。

……。ぷしゅー。

彼女はまるで音を立てるように、顔が真っ赤に染まった。

そういえば、今まで彼女が僕に演技がかった振る舞いをしたことはよくあったけれど、僕が彼女にそれをしたのはおそらく初めてだった。幻、不意の出来事に意外と耐性がないのかもしれないな。

というか、僕も自分の台詞を反芻して、だんだん恥ずかしくなってきたんだけど。恥ずかしっ！！

そんな甘い（のか？）言葉を返して、その気恥ずかしさも少し落ち着いたところで、僕は今、二人きりじゃないことを思い出させられた。忘れていたほうがどうかしていたと思うかもしれないが、彼女の言葉、それに対する僕の言葉、僕の頭はそれがけに集中していて、それ以外をシャットアウトしてしまっていたようだ。

僕を現実に戻したのは、幻の肩越しにいた、にやけ顔の光さんだ。彼女のにやけ具合が目に入った瞬間、僕は幻にも劣らず真っ赤になった。

「いや、お熱いことで。すごいもん見せてもらったぜ」

「うわっ、幻ちゃん真っ赤だよ！ はるっちにほれちゃったかな？」

「ラブラブですね・・・」

「あらあら、愛は人を盲目にするって言うけど、春君も意外と大胆なのね」

「これなら今後も安心だな。幻を君に頼んでもいいようだ」

・・・とりあえず、いいですか？

うわあああ！！！！ 恥っ！！ 恥かしっ！！！！

なんてことをやってしまったんだ！ 幻の部屋で二人きりならいざ知らず、ここは彼女の家の居間。彼女の父母、ついでに姉が三人ほぼ全員集合状態でやってしまった！！

やっぱり慣れないことはしてはいけないということなのか？ だとしても、それを悟るための教訓だとしても、これはあんまりだ！

あまりにもひどいよ！

今の僕には、行動の責任ぐらい自分で持つべしとか、そんな戯言を言っている余裕はない。まったくない。

かなり恥ずかしい目にあってしまった。幻はどうしているかと、再び目を向けてみると、彼女は僕に微笑んでいた。周りなど意に介さず、ギャラリィには目もくれず。

「春くん、ありがとう」

そして、今度は彼女の方が抱擁をしてきた。

このタイミングでっ！？ この場面でっ！？ この状況でっ！？ 回りを気にしないといっても、限度があるだろう。いや本当に！ 僕を抱擁する幻、それを温かい目で見守る幻一家。・・・まるで悪夢だ。

さっきは気づかなかったけれど、これだけ密着していると、その、なんていうか、やわらかい感触が伝わってきたりしているのだが、僕はこの状況でそれを喜べるほどにたがが外れた人間ではない。気恥ずかしさよりも、気まずさが何倍も勝っている。ああ、何でこんなことに・・・。

「さて、二人の問題も解決したようだし、そろそろ出発しよう」

改めて、少々のごたごたを終えて、幻パパが発発を促した。やはりこういうのは、一家の大黒柱の役目だろう。先ほどの痛手も、幻が台詞を奪ったことに起因するのか・・・、というか痛手を受けたのは僕だけだけど・・・。

そういえば、僕たちの目的地はまだ触れていなかったっけ？ 触れていなかったな。

でも、今日は散々ひどい目にあっだし、なんだか素直に話す気にはなれないな、なんて意地悪なことを考えてみる。

よし、今回も恒例のアレで終わらせよう。僕の恥ずかしいシーンをこれでもかってほど見たんだがら、それくらいは我慢してくれるだろう、僕の八つ当たりのために！！

んん、ゴホン。僕たちのこれから赴く場所、紆余曲折をこえてついに進みだす僕らが向かう先。

それは。。。

「よう、いざ音楽会へ、レッツゴー……」

……。祭やな……。

12 / 彼女

旋律。僕はこの日、旋律を覚えた。

何十人もの人が指揮者の指揮のもとで、ひとつの作品をつくっていく。形は残らない、それでも心に、客席で聞いている観客の心に、少なくとも僕の心には確かな形を持って残った。

これまで数え切れないほどの人が、それこそ星の数にも劣らない数の人たちが、その生涯を音楽とともに生きてきた、そしてこれからももっと多くの人が音楽に魅了されていく、その音楽の持つ力、神秘的な何か、そのほんの一部を垣間見たような気がした。

すごい。

とても稚拙で、僕の体験を、僕の感動をこれっぽっちもあらわせていないけれど、本当にすごいと思った。耳に入ってくる、体に染み渡ってくるその音、そしてそれを奏でている演奏者。世の中には僕の知らない美しいものがまだまだあるんだなあと、つくづくと思われた。確実に、僕の中の世界が広がった。

来てよかった。

音楽なんて最近のJポップくらいしか知らない、クラシックどころかジャズだってブルースだってでんで知らないこの僕。今日のコンサートに誘われたときは正直どうしようか迷ったけど、おこ幻の言葉に従っておいてよかった。『すばらしいものには、知識や経験なんて関係ない。ただ感じて、それが体を、心を伝わるもの』か。そうはいってもやっぱり・・・とか思いながらも、結局招待してもらった僕だが、幻の言葉が正しかったことをようやく知った。

本当に、来てよかったー

「お疲れさまっ！ 鞘ちゃんも影兄もすごかったね！」

「祭姉さん、ありがとう。私も自分で満足できる演奏ができたわ」

「うん。皆来てくれてありがとうね。それに春君、久しぶりだね。元気だったかい？」

コンサートも終わり、現在は演奏後のパーティ。演奏を終えた影さんと鞘さんが合流して、間淵父母は知り合いに挨拶に回っている。当然ながら今までこんなところに来た経験はないので、正直かなり緊張している。影さんの挨拶にも若干声を上ずりながら返答する。

「は、はい。今日の演奏、なんていうか・・・すごかったです！」

僕が感じたのなんてほんの一部なんだろうけど、音楽の力を見せられたというか・・・」

「春君」

影さんは自分の唇に人差し指のふしあたりを当てた。

「言葉にしないでいい。今日感じたことは、君の中に少しでも残ってくればうれしいよ。それで音楽に興味を持ったりしてくれれば、万々歳だね」

「は、はい！」

やっぱりこの人かっこいいなあ、そう思った。

「あら、こんなところにいたの？」

慣れない場所にいたせいで少し疲れてしまったので、体の空気を入れ替えようと思って、会場の外、大きな自然公園を散歩していたところ、後ろから鞘さんがやってきた。

「あ、鞘さん。どうもです」

「うん。散歩してるの？　よかつたら、私もいい？」

「ええ、もちろん」

「ありがとう」

そう言つて、僕の横に並んで歩く。そういえば鞘さんと二人で会話をするのは初めてかもしれない。そう思うとだいぶ抜けてきていた緊張が再び戻ってくる。

「ふふふ、そんなに固くならないで。かわいい顔が台無しよ」

もう一度ふふふ、と笑いながら両手を後ろに組んで僕の顔を覗き込んでくる。

目と目が合った。なんだかからかわれているようで恥ずかしい。

「なんて冗談。怒った？」

「いいえ、怒ってなんか・・・」

なんだかペースを持つてかかっているな。しかし、それがわかったところでどうにもならない。

問題の原因がわかることと、それに対処することとはまるきり違うのだ！　って、偉そうに言うことじゃないけど・・・。

「ねえ、音楽は好き？」

彼女は再び僕の横に並び、こちらを見ながらたずねてきた。

「え？　えっと・・・」

「大丈夫よ、落ち着いて。はい、深呼吸よ。吸って、吐いて、吸って」

言われるがままに深呼吸をする。

「あ！　今、私の胸見てたでしょ」

「ぶっ！！」

吹き出した。吸っていた息を吹き出した。

「あらら、冗談のつもりだったのに。でもそんなに反応してるってことは・・・、もしかして・・・」

「いいえ違いますやつていません僕は何も見ていません！！」

句点も読点もなしで一息。誤解を解くために必死になっている。

そりゃ、必死にもなるだろう？

「んん、そんなに必死に言われると、余計怪しい・・・かも？」

「ノオオオウ！！！」

なんだかどんどん深みにはまっていくような・・・。

「容疑は深まる一方・・・」

「I don't watch your mune!!」

「あははっ。muneって・・・ふっ、あはははっ」

つばらせてしまった。僕の名誉と学力のために弁解しておくけど、胸がbreastだってことぐらい、わかってるんだからねっ！！

・・・本当だよ？

「ごめんごめん。ちよつとからかってみただけ。リアクションのあまりの面白さに、つい」

「・・・」

さすがにすぐに許すことはできない。ちよつと黙って困らせるのが許されるぐらいには、僕の負った傷は深いよね？

「ごめんって」

「・・・」

「ごめんねってば」

「・・・」

「えっと・・・胸見たいんだっけ？」

「違います!!」

負けた。この人、黙秘すらもさせないのか・・・。

「ふふっ、楽しいわね」

そりゃあなたはね、とは言わない。

「でも、これで緊張もほぐれたでしょ？」

「え？」

言われてみれば確かに。保身に気が行っていたせいか、いつの間にか彼女と冗談のような会話ができるようになっていた。ここまで見越していたなら、すごいな。

「緊張もほぐれたところでもう一度。do you like o

ngaku?」

さっきの僕のネタの変化形か。今度のは知能を疑われることなく、冗談だってわかる単語だな。言い訳を付け加える必要もあるまい。

僕はもう一度深呼吸して、意見を述べる。

「正直言うと、今まではそれほど興味はありませんでした。クラシックとか、一切かかわりのない人生を送っていたので。でも、今日のコンサートで生の音を聞いて、なんていうか、こんな美しいものがあつたんだなあって思いました」

リラックスして、心のうちを滑らかに言えた。会話に大事なものはリラックス、そういうことかな。

「そう、それはよかったわ。演奏している側としては、私の音が聴いている人に届いて、その人が何かを感じてくれるとすごくうれしいのよ。今日は春君に音楽の楽しさを伝えられた、それだけで大満足よ」

にこつとかわいらしく微笑んだ。自然とこちらも微笑がこぼれてしまう。

「音楽はね、ずっと昔から、きつと何千年も前でも、奏でられてきたと思うの。長い歴史の中、いろいろなものがかわっていったけど、音楽と言う存在と、それを愛する人たちはいつの時代にも、どの場所にも変わらずいたのよね。そうやってずっとずっと愛されて奏でられてきたのが音楽。今このときにもどこかで音楽が奏でられている。なんだかロマンチックよね」

たそがれの空を眺めながら、そんなことを言う彼女。

「ふふつ、ちよつとしゃれすぎかしら?」

「いいえ、そんなことないと思います。僕もロマンチックだなんて思います」

自分の気持ちを正直に述べた。なんだか緊張もだいぶ解けてきた。「そっか。君はこんな話でも聞いてくれるんだね。ありがとっ」

彼女の人となりが少しわかったような気がした。

「そういえば、君は命題の話が好きなんだよね」

散歩も十分ほど、体の緊張はもう完全に解けた時、鞘さんはその声をかけてきた。

「え？ ああ、幻とよく話したりはしていますね」

急な話題にも、何とか返答する。

「今日は君が私の演奏を聴いたんだよね？」

「えっと、そうですけど」

「じゃあ、こんどは私が君の命題を聞く番だね」

ポン、と手を叩いて、今思いついたかのようかの発言。いや、明らかに狙っただろ！ なんてことはとても言えない。

「そうだね。じゃあ聞かせてもらおうかしら。えっとね、『どうして音楽を聴くのか』、それがききたいな」

ニコツと微笑んでそう告げる鞘さん。これは僕の力では断れないな……。

「……わかりました。拙論ですがお聞き願ひましょう」

僕はおどけて、右手をへその前に、左手を腰に当て、紳士がそうするように、軽やかにお辞儀をした。

「まあ楽しみ！」

彼女も道化に付き合ってくれて、両の手を頬に当てて、楽しそうに微笑んだ。

これまでの何度かの対話式命題の経験を生かして、僕にはちょっと試してみたいことがあった。今回はそれをやってみよう。

「えっと、ご存知のとおり僕は音楽には疎い男なので、鞘さんにもいくつか質問させてもらいますが、いいでしょうか？」

「うん、私でよければ」

快い返事をもらえた。これで準備はばっちりだ。

「音楽を始めたきっかけ？ えっと・・・家の両親が音楽好きで、小さいときにお母さんにピアノを習ったのがきっかけかな。私に限らず、幻ちゃんだってピアノ弾けるのよ。今度弾いてもらったらどう？ まああの子は、子供のときやってました、でやめてしまったけど。子供のときはピアノやってました！ ってよく聞く台詞よね。それだけ音楽が愛されているということかしら」

「ええ、お母さんもピアノが弾けるのよ。お母さんもそのお母さん、私のおばあちゃんに習ったみたいで、そういう意味では音楽と共に生きている家族なのかも」

「ふふっ、音楽が友なんて、面白い言葉遊びね。さすが春君、私たちは音で表現するけど、あなたは言葉で表現するってわけなんだ」

「フルートを始めたのは小学三年生のとき。オーケストラの演奏を聴いて、それがフルート協奏曲で。モーツァルト、知ってるわよね？ モーツァルトのフルート協奏曲、私が今日演奏した曲もそれだったのだけど。そフルートについてはそれがきっかけかな。親戚にはフルートが吹ける人もいたから、勉強する環境としては困らなかったわ」

「ええ。親戚にも音楽を好む人は多いの。私にとってはそれが普通だけど、春君にとっては珍しいのかしら」

「どうして音楽を続けているのか？ そうね・・・ちょっと照れくさいけれど、笑わないでね。音の持つあの、心を揺さぶって、体を震わせて、神秘的でまぶしいパワーそれに魅せられているからかしら。あんな音を自分も出してみたい、あんな力を自分にも仕えるのか知りたい、それが私が音楽を続けている理由」

「うん、そうね。何事もそうだけど、『続ける』ことは簡単じゃない。何度練習してもぜんぜん上達しない、そういうこともあるわ。だんだん悲しくなってきた、自分には才能がない、これ以上やっても無理、そう思うこともあるわ。ーでもね。とても高かった壁を越えられたとき、ずっとできなかったことができたとき、そういうときに感じる喜び、何にも変えられない達成感、それが音楽を続け

ている支えになっているのかも知れないわ」

「って、私の身の上話と命題に何か関係があるの？　話が冗漫な人は嫌われるわよ？　そろそろ君の意見を聞きたいんだけど」

「え？　もうまとまっている？　何よ、それならそうと早く言ってくればよかったのに。それじゃあ、ぜひお聞かせ願いましうか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ふふつ、なるほどね。君が私にいろいろ聞いてきたのは、そういうことだったのね。なんだか頭を整理されたような、私の中にあつたけど見えてなかったものを示してくれたような、不思議な感じね」

「ええ、満足よ。でも、欲を言えばもうひとつだけかな」

「君の意見は、どうなの？」

「それで、私に声もかけずに散歩に出かけて、私は置いてけぼりにして鞆姉さんと一緒に散歩して、私を仲間はずれにして鞆姉さんと命題について話して、私のいないところで行われた対話は、たのしかったですかしら？」

歌うように言葉をつむいでいる。表情は笑みを浮かべているだろう。とても楽しそうな、そんな分言いを漂わせていた。

しかし――彼女は今、僕を尻に敷いている。

・・・。

いや、比喩的なそれではなくて、将来の暗示とかそういうものでもなくて、本当に、実際に、ここ幻の部屋において彼女はうつぶせの僕にのっかかっているわけだ。僕の頭を見るようにまたがって、かかとで肩のあたりをぐりぐりやっている。

・・・、説明しよう。『こんな情けない図ができるまで』につい

て語ってみよう。聞いてくれるかな？

まずは現在がどの時系列にあるのか、取っ掛かりはこれかな。

端的に言えばパーティ後。もう少し詳しく言うなら、あの音楽会が終わり、車で間淵家一家に帰宅。ちよつとしたお茶の時間を経て、現在幻の部屋。時刻は午後八時半。

「謝罪するべきことはないかしら？」

「謝るときはうつ伏せじゃなくて？」

「次の質問に必ず軽いと答えること」

彼女の放った言葉の一部だが、これでなんとなくわかるだろう。

『こんな情けない図ができるまで』終わり。

「それで、どうだったの？」

依然として僕に座ったまま、彼女は口を開いた。

「え？」

今日は『え？』ばかり使っているような気がする。なんだかアホキヤラみたいで嫌だな……。

「だから、あなたの鞘姉さんへの答え。一つ目のほうは何て言ったのって聞いているのよ」

「ああ、それはね……」

『音楽を広めるため』。僕が鞘さんに応えた考えはそれ。

僕があの時何をしていたのか、もう大体わかつているだろうけど、一応答え合わせ。僕はあの時――書庫を得ていたのだ。僕の意見を裏付ける証拠。

厳密に証拠というなら、もっと人数を増やして統計を取る必要があるのだろうけど、ちよつとした会話程度でなら一人で十分。僕の意見を納得してもらう程度なら、それでオッケイ。

たとえば、『音楽を聴いて、自分もやってみたいと思った』『自分の音楽を聴いて、音楽が楽しいと思ってもらえればうれしい』などなどの発言。そこから導き出した、ちよつと変わった意見。

「音楽には人をひきつける力があり、魅せられた人はまた別の人へ音楽を伝える。そうして音楽が、自分が絶えないように人に伝播させている、ね」

まるで生き物のように、子孫を残すかのように――音に魅せられた人の心の中で生きて、そして別の人にも人を通して移動、その人の心の中でも生きていく。

「音楽に意志を持たせて、人の手から離れた、人の力を超えた存在として見るわけね。ふふっ、ロマンチックね」

ロマンチック。又は残酷。だって人は音楽に支配されている――僕の意見からはこの主張が生み出されかねないから。

でも、もしかしたら――そうなのかもしれない。そう思っておこう。

「それで」

彼女は体勢を変え、今度は僕の上にうつ伏せになった。僕のほうが背が高いので、彼女は全身で僕に乗っかっている。

「二つ目の意見――あなた自身の意見は？」

そう、一つ目のアレは、鞘さんの意見というか、思いから生み出した、彼女に影響されての意見。僕自身のとはまた別物なわけだ。

「えっと、すっげー単純だよ？」

「かまわないわ」

「――耳が気持ちよくなるから」

これが僕の、何も格好をつけていない率直な意見。教養のなさがにじみ出ているようなもの。

「・・・ふふっ」

「ん？」

「それも、悪くはないんじゃない？」

彼女は微笑んだ。顔は見えなくてもわかる。――これだけそばにいるんだから。

幻への鞘さんとの命題の報告も終わった。これでパーティでおい
ていってしまったことも埋め合わせられたかな。

今日の僕がすることは、すると決めていることは後ひとつ、残っ
ている。大事な大事な、今日の中ではもちろん、今までの人生の中
でも。

深呼吸。

うつ伏せのまま深呼吸してリラックス。緊張するな、リラックス
だ。

そして、先ほどのままの体勢、そこに変化をつける。僕は、体を
右に四分の一回転、左に半回転した。彼女を振り落とさないように
ゆっくり、寝転んだ状態で正面から向き合う。

「春、くん？」

「幻」

彼女の方に手をかけ、体を起こす。余計な力を入れないで、据わ
った状態で正面から向き合う。

「幻」

「春くん」

彼女の手をとり、立ち上がる。ゆっくりと、立った状態で正面か
ら向き合う。

「幻」

「はい」

手が震えている。やっぱり緊張せずにはいられないか。しかたな
いのかもしれない、それほど大事なことのだから。

彼女と正面で向き合う。目を見つめ、彼女も目を見つめ返してく
る。

僕の緊張が移ってしまったのか、彼女も心なしか手が震えている。
言おう。勇気を出して、馴れ合いに甘んじないで。面と向かって
ちゃんと言ったことのない、その言葉を。

「
幻、
好きだ
」

12 / 彼女（後書き）

今回はどこで区切っても不恰好になってしまう気がしたので、だいぶ長くなってしまいました^^;

さて、次回から最終章です。最終章は命題大目になると思います。最後まで読んでくださった方、ありがとうございました^^

序：居間にて

間淵家の居間。一家全員がここにいる。それと僕が。

入り口から一番奥にある椅子。一家の主のその正面に、僕と幻は立っている。僕たち二人の左右にはそれぞれ三つずつの椅子。それぞれにその持ち主が腰を下ろしている。

「では、契命題ちぎりめいだいを受けるということでいいのだね」

正面の椅子の所有者、一家の主人からの最後の確認。それを見守っている全員の表情に、かすかな緊張が走る。僕の返事はもう決まっている。

「はい。お願いします」

皆の視線が僕へ向く。契を結んだ僕に。決断をした僕に。

啓あきりさんが、凧なぎさんが、光ひかりさんが、祭まつりさんが、鞘さやさんが、白ましろさんが、影かげりさんが、契の証人となった。

もう引き返すことはできない、なかったことはできない、決定的な一步を踏み出した。

――もちろん、引き返すつもりもない。なかったことにするつもりもない。

――己が決めて進んだ一步なのだから。

恐れはある。おびえはある。それでも、迷いはない。

体は震えている。鼓動は高鳴っている。それでも、その表情に曇りはない。覚悟を決めた男のそれだ。

「幻は、それを了承するか？」

続いて、彼は幻に、僕の契相手に問うた。

「ええ。私は彼を契相手として認めます」

彼女もまた、迷いなく、曇りなく、己で決断してそう答えた。――
―そう答えた。

「わかった。十坂春と間淵幻。二人の契命題をここに認めよう」

そのとき、左右の六人は同時に腰を上げた。

彼もまた立ち上がり、右の手を差し出した。僕も右手を差し出し、握手をした。

「がんばりなさい。君がこの契を果たせることを、切に願おう」

「ありがとうございます、啓さん」

体ごと右へ向き、一番左の椅子の主のところへ、歩を進める。

「応援しているわ。幻ちゃんのこと、よろしくね」

「こちらこそ。凧さん」

その右となりへ。

「期待しているよ。といっても、もちろん手は抜かない。妥協しない僕を納得させるんだよ」

「がんばります、影さん」

さらに右となり、こちら側の列の右端へ。

「ついに腹を決めたな。やるからには最後まで貫け。全員を納得させて妹をもらっていきな」

「もちろんです、光さん」

続いて、振り返り、その正面の彼女の下へ。

「はるつちと幻ちゃん、二人なら大丈夫。そうに決まってるよ！」

「そう願います。祭さん」

右へ。

「やっぱりあの子の相手は君よね。幻ちゃんと二人で、二人の力を

合わせてこの試練を潜り抜けなさい」

「わかりました。鞘さん」

最後の一人。

「あ、あの、その……。ん、こほん。あなた方のこれからの道、そのはじまりが契命題。この坂を越えて、それからもずっと二人で歩んでください」

「はい、白さん」

そして、僕の隣の彼女。

「春くん、よろしく願います」

「よろしく願います。幻」

十二月二十日。午後九時三十七分。僕達の契命題の参加が認められた。

全員との握手が終わり。再び啓さんの前へ戻る。

「それでは、契命題、最初の一人は祭だ」

「はい」

祭さんはもう一度立ち上がり、啓さんの隣、僕達の正面へと歩む。
「それじゃあ、最初はわたしだね。日時は十二月二十四日、四日後だね。その日の午後七時、夕食前にここで。都合は大丈夫かな？」

「はい」

「ええ」

「それじゃあ決まり。それと肝心の契命題ね。『なぜ努力するのか』これが最初の命題。二人とも、クリスマス・イブまでに自分の考えを整理してきてね。契を認める条件は、わたしを納得させること。二人のうちどちらかでもちぐはぐな意見だったら、決して認めません。相談とかは自由にしてくれていいけど、最終的に発表するのは自分の中にある思いだからね」

「はい」

「わかったわ」

契命題。間淵家の幻を除く七人。それぞれの納得する考えを発表
することで、幻との契が認められる。その第一題が今、祭さんの口
から伝えられた。

一、祭契命題

自室。ベッドの上。十二月二十三日の夜十時、僕は明日のことを考えている。

十二月二十四日、クリスマス・イブ。

去年までの僕なら、この日に思考することといえば、クリスマスイブのつぶし方。彼女はもちろん、こんな日に一緒に遊ぶ親友もいなかった僕のような人間には、面白いことなんて何一つない日だった。まああ、強いて言うならクリスマスケーキぐらいが数少ない楽しみか。

だけど、今年の僕は 契命題、これを差し置いてほかに考えるようなことはないだろう。

ここ数日、そのことばかり考えている。命題にはだいぶ慣れてきたけれど、今回はいつもとは勝手が違う。その抑圧が緊張を生み、緊張から命題の予行を試み、導き出される芳しくない結果がプレッシャーとなり・・・そんな蟻地獄に陥っている。それがわかっていても抜け出せないのだから、なかなかどうしておかしな話だ。

「ふう」

自然とため息が出る。そういえば、ため息をすると幸せが逃げて聞いていたことがあるけれど、それって人間にはもともと限られた幸せが生まれつき備わっていて、それを消費して生きているってことなのかな。いや、何も供給源がないなんて言っていないか。幸せを呼ぶ、なんて言うともまるで胡散臭いラッキーアイテムみたいに聞こえるけど、そんなものがあってもおかしくない。順当に考えればそれは愛か何かかな。同時にもうひとつ、ため息をしすぎて幸せがゼロになった人間の末路というのも気になる……。

あれ？ いつの間にか話の軸がずれている！僕は明日のことを話していたのに。

気を紛らわせるならもつと現状に関係のある話をしたほうがいい

かな。たとえば、契命題についてとか。

契命題。僕が幻おかしなに告白して、これが始まった。

それはつまるところ何なのかというところ……間淵家の人間と結婚するための試練だ。

契命題自体は幻のお父さんが作ったらしいけど、それ以前から間淵家ではそういう伝統が続いているそう。自分の娘を任せられるかはかる試練。それはいろいろな形をとって、僕が受けるそれが契命題というわけだ。

つまり、幻との交際を正式に認められる条件が契命題。間淵家の家族から与えられる命題について自分の意見を語り、相手を納得させることを達成することというわけだ。

「はあ」

改めて現状を認識したところで、またしても幸せが逃げていく。

これからやるのが決まっていて、さらにそのルールすらも明示されているのに、いったい何にビビっているんだい？　なんてあきれるかもしれない。

しかし言おう、それは軽率であると。

僕がこんなにも心配しているのは、そのルールについてなのだから。

もう一度確認してほしい。『与えられる命題について自分の意見を語り、相手を納得させる』、これってかなりあいまいだと思わない？

相手を納得させる、この不明確なルールが気にかかって仕方ない。つまり、僕がどんな意見を述べようと、相手が納得したと思わない限り認められないわけだ。納得なんて外からじゃわからないし、論点に関係のない感情、たとえば僕のこと嫌いとか、そんなこんな

が混じりかねないじゃないか。

「ふう」

わかっている。本当はわかっている。そんなこと当たり前だって。人と人との関係に個人的思考が入らないわけがない。要するに、僕は当たり前のことをさも問題のようにいつて、僕が失敗したときの責任を僕以外の何か、他人の気まぐれ、それに押し付けようとしているだけだ。

「ああ、かつこわりい」

もう寝よう。これ以上考えても悪方向へ落ちていくだけだ。

見えないカオスにビビったところでどうしようもない。備えあれば憂いなしとはいっても、何を備えればいいのかわからないときだ。つてある。そんなときは必要以上に考えないことも大事なはず。なんてつたつて、僕は僕のできることでしかないんだから。

「おやすみなさい」

ふつきりで少し楽になった頭を休ませるよう、僕は意識を閉じていく。明日へ向けての休息。

「それじゃあ、はじめよつか」

祭さんが開始を宣言した。

間淵家。和室。これまで一度も足を踏み入れたことのない、広さ十五畳程度の畳部屋に、僕と幻、そして祭さんが向かい合って座っている。ほかには誰もいない。ギャラリーは禁止なようだ。

「それじゃ、最初のはるつちね。バツチリ聞くから、ズバツとどうぞ！」

僕の緊張をほぐすためか、いつもどおりフランクな祭さん。

「はい」

肩の力を抜いて、雑念を追い払って集中する。そして、はじめる。「どうして努力をするのか。それが今回の命題でしたね。まず何のために努力するのかについて考えて見ます」

大丈夫。声もそんなに震えていないし、頭だっただけ働いてる。さっきの祭さんの励ましが効いているのだろうか。

「努力の理由、それは目的達成のため。はじめはそう思っていました」「はじめは……ね」

相槌を入れてくれる祭さん。些細なことだけど、僕が話しやすいように心を配ってくれてる。

「でも、目的達成が理由だとしたら、それがかなわなかったとき、その努力は、それまでのがんばりは無駄になってしまうのか。もしそうなら、努力は目的を達成したときだけ価値があって、それ以外ではやつてもやらなくても同じ、ということになってしまう」

「それだと現実と反してしまうわね」

幻も僕のサポートをしてくれる。自分も緊張しているだろうに……心が少しあつくなる。

「そう。現実では、目的を遂げたか否かにかかわらず、がんばったことに価値がある。努力自体に価値があって、それは無駄になるものじゃない」

無駄な努力なんてない。きれいごとじゃなく、本当にそうだと思うっている。

「だから、努力の理由は別のところにある」

「それは何かな?」

「それは　　生きるため」

「生きるため、とはどういう意味かしら?」

幻からの問い。話の流れがスムーズでやりやすい。

「いまから話すよ。自分が何かががんばっているときのことを想像してみてください。たとえば運動、たとえば学問、たとえば料理」

最後のひとつに幻は反応した。適当にあげた例だったけど、彼女にとっては想像しやすいものだったらしい。最近料理うまくなって

たしね。

「そのとき、どんなことを思っていたか、思い出してみてください。……どうですか？ 意外とおもいだせないでしょう」

僕自身も自分が努力しているときに何を思っていたかなんて思い出せない。

「がんばっているときは、それしか頭にないとか、とにかく夢中だった、とかよくいうけれど、実際のところあまり、いやほとんど覚えていない。いわば謎、それが正体」

「確かに、力いっぱい走っているときとかって、何を考えているのか思い出せないにゃあ」

かわいらしい語尾は大歓迎だけど、今日このときは遠慮してほしかった。思わず微笑んでしまった僕の隣、そこには幻がいるのだから。

「そうね。何か努力しているとき、つまりは集中しているときの自分の思考はわからない。それがわかったら集中していることに矛盾するものね。わん」

……。語尾装飾に失敗した人間の末路か。まあそれでもかわいいけど。

「とりあえず、努力しているときに何を考えているかわからない、というところまでは納得してもらえますか？」

「うんうん！ 大丈夫だよ」

「では次に、何を考えているか分からないことを承知で、何を考えているのか想像してみてください」

祭さんの、そして幻の反応を待つ。

「うーん。どうだろう……。プラスかマイナスで言えば、たぶんプラスのことを考えていると思うけど……」

「私もそれくらいしか想像できないわね。きっと自分の想像する楽しい未来、そんなことを想像しているんじゃないかしら」

二人とも、こんな無茶な願いにも付き合ってきちんと想像してくれている。

「それでいいんです。プラスなこと、楽しいことを想像している。それはきつと、そのときの高揚した気持ち、目的に向かって進んでいるときのわくわくする気持ちから導いた想像だと思うけど、その想像が導かれることが重要なんです」

「んん、どういうこか、よくわからないかも」

「あ、すみません。努力しているときはわくわくしている、それは当然といっていいでしょう。しかし一方で、目標を追いかけることへの疲れ、なかなか思うようにいかないもどかしさ、そういったものもあるはずです。いいことだけでなく悪いこともある」

「どんなことでもそうだけど、いいことだけのことなんかない。当然何かしらのマイナスの要素も絡んでくる。」

「にもかかわらず、そういったプラスとマイナスを併せ持った努力を振り返ってみると、僕たちはなぜかプラスのことばかり覚えている。楽しかったことと同じくらいつらかったこともあっただろうに、どうしてかつらかったことはそれほど覚えていない」

「確かに、それを確かめる例ならたくさんありそうね」

料理の特訓とかね、とは言わないでおこう。料理がうまくなるまでには、それに見合った失敗、それを経験しているはずだけど、今幻に残っているのは、料理が得意だという事実。人はそうやってできているんじゃないんだろうか。

「同じ楽しいでも比較的努力の少なかった楽しみ、その場限りの楽しみってというのは意外と忘れちゃったりする。それも考慮すると、最初の命題への僕の考えが完成する」

「わわっ！ ついにはるっちのまとめが聞けるのになっ！」

話の続きをわくわくして待つ祭さん。顔にこそ出さないが幻だつて聞きたいと思ってくれているだろう。

「つまり、努力をするのは楽しい思い出を作るため。将来つらくなくなったときに思い出せるような楽しい思い出をを未来の自分にプレゼントすること。またがんばろうって、壁を乗り越えて生きていけるように」

がんばったことは忘れない。それが自分の糧になり、明日の自分を支えてくれる、なんて言ったら格好つけすぎかな。

「それが、はるっちの考え、そういうことでいいのかな？」

「はい」

自信を持って答える。僕のできることはできた。後は祭さんの判断を待っただけだ。

「では、宣言します。わたしはあなたの主張に納得しました。私はあなたと幻ちゃんの契を認めます」

祭さんはやさしく微笑んだ。そして右手を差し出す。

「幻ちゃんのこと、よろしくね。わたしもはるっちよりかつこいい人を見つけちゃうからっ！！」

「祭さん」

祭さんと握手をして、第一の契命題は終わった。

って、あれ？

「そういえば、幻も命題についての考えを話すんじゃないっけ？」

「ああ、それはね」

祭さんが答えてくれる。

「私たちが判断するのは、はるっちが幻ちゃんを幸せにできる人か、ってことと、幻ちゃんがこの家を出ても立派に生きていけるかってことなんだけどね。後の方のは割りと体裁だけで、はるっちのことを認めた後に、最後の締めをかねて幻ちゃんと私たちが命題について一言語るってことなの。って幻ちゃんから聞いてない？」

僕は首を横に振る。そんなこと、完全に初耳だ。

「え、あら。ふふっ、それは春くんを油断させないためよ。余計な情報を聞いて春くんの集中にさし伝えたらまずいものね。ええそうよ、わざとってなかっただけで、全然まったくこれっぽっちも忘れてなんかなかったわ」

……。幻、忘れてたろ。

「命題については事前に相談するのはしないって決めたのは春くん

だったし、このことも『命題について』に含まれることだから言わないでおいたのよ」

……、いや、確かに言っただけ。事前に相談することで、逆に自分の考えがぶれてしまいかもしれないからって、幻の考えに曳航された『自分の考え』ができうるからって、相談は無しにしようって言っただけ……、それは事前に知っておきたかった。

まあ知っていたからってどうこうなるものでもないか。でもとりあえず、忘れていなかったふりはする必要はないと思う。ていうか、するな。

「じゃあ、次はわたしたちだねっ！ それじゃ、幻ちゃん、先にどうぞっ！！」

「努力をする理由。それは自分のやりたいことを見つけるため。いろいろなことに挑戦して、自分が本当にやりたいことを見つけるためだと、私は思うわ」

「つぎはわたしね。がんばる理由。世界を広げるため。自分の知らないことでもがんばって、そうやって自分の知っていること、自分の見えている世界を広げるためって思うかな」

二人がそれぞれの考えを語った。二人とも僕とは違う意見。短いながらも言いたいことが伝わってくる。

やっぱり、こうやって自分の意見を聞いてもらって、相手の意見を聞いてって楽しいなあ。

「じゃあ、これで私の番は終わり、白ちゃんましろが夕食を作ってくれてるから、はるっちゃんも食べていくよね」

「はい、お願いします」

「それじゃ、わたしは先に行くから。夕食は三十分後だからねっ！！」

そう言って、祭さんは部屋を出て行く。部屋には、僕と幻が残された。

「ふう、何とか終わったなあ」

「あら、春くんはお疲れのようね。そんなに緊張したの？」

座っている状態からそのまま後ろに倒れた僕の顔を覗き込むように、幻が聞く。

「そりゃしたさ。しないわけがない。このまま眠りたいぐらい疲れたさ」

一応見回してみるけど、この部屋には枕になるものが何も無い。

「何をお探し？」

「ちよつと枕になるものを。まあ、なくてもいいか。悪いけど、夕食までの三十分、ちよつと休ませてもらうよ」

人の家に来てなんだけど、正直僕はそれほど疲労している。今までの緊張は、それほどのものだった。

「そう、わかったわ。三十分たったら起こしてあげるわ。私は読書でもしてるから、気にしないでいいわよ。ああ、それと枕も貸してあげるわ」

枕なんてどこにもなかったけど、といぶかしみながら幻のほうを見ると、その正座しているひざを指差している。反対の手には、ブックカバーのかかった本を持っている。部屋に入るときから持っていたのだろうか。

「どうしたの。私は読書してるだけだから、別に使ってもいいわよ。すまし顔でそう言う幻。……、えっと、それじゃあ。」

「お言葉に甘えて」

幻の枕を貸してもらおうことしよう。家の枕よりもやわらかくて暖かい枕を。

「お疲れ様」

幻がトレイで紅茶を運んできた。飲み物をこぼさないよう慎重に歩いている姿がかわいらしい。

「ありがとう、幻もお疲れ様」

カップを手渡してくれた幻にお礼を言う。僕が疲れている程度には、いやもつと疲れているだろうに、彼女はそんなそぶりは見せず、当たり前のようにもてなしてくれる。そのことにお礼を言いたいけど、御礼を行った直後にまたお礼、というのはあまりよくない気がする。あまり言わないからこそ、本当に伝えたいときにその気持ちが伝わるんじゃないかなあ、なんて一人考えてみる。

間淵一家との夕食も終わり現在は幻の部屋。壁際においてあるソファ、僕の隣に幻が座った。

「いいえ、私は自分の考えを一言話ただけだから。春くんほどお疲れではないわよ」

嘘だとわかる。契命題での幻の述べた意見は確かに少量だった。でも命題においては、自分の意見を述べるについては、内容量と努力量が反比例する。

短かったら意見がはつきり伝わらなくていいわけじゃあない。大事なのは濃度じゃなくて絶対量。ダイエット食品だって栄養が十分じゃ話にならないように。

「そう。僕ももうばつちりだよ。おとぎちゃん枕で充電できたし」

とたん、隣が明るくなる。そのときは雰囲気できたことでも、後に振り返るとかなり恥ずかしいこと、あの枕も幻にとってそれだったらしい。というか、ほとんどそれを承知で言ってみただけ。彼女の脳内での数秒の感情合戦では、怒りが勝利したらしい。動揺から怒りへのシフト。

「ふんっ。そうやってふざけるんだったらあの枕はもう捨てること

にするわ」

つんつ、とそっぱを向く幻。相手から顔を背けるのは拒絶の最もわかりやすい方法らしいけど、この状況で幻にやられてもただ可愛いと思うだけだった。っていや、別にのろけてるわけじゃないんだけど……

冷静なようでもたまにこういう反応も見せる。そんな一つ一つの仕草に心があつたまる。なんて言ったらますます怒られそうだから黙っておく。

「冗談だよ。ありがとう」

もう一度お礼を言う。今度は枕を貸してくれたことに。

「ふんつ。何のことかしら？」

思ったより恥ずかしかったらしい。それが怒りに変換されて、今の彼女はかなりふてくされている。

仕方ない、僕も恥をさらすとするか。甘い台詞や心が動かされる言葉というのは、基本的に受身側の得る感情だ。その発言者は、まあ人それぞれなのかもしれないけど、基本的に恥ずかしい。それでも幻枕が幻として消えてしまうのを防ぐためなら、僕は喜んで恥をかこう。

「何のことって？」

「あなたが何について感謝しているかぜんぜんわからないわってことよ」

「ああ、それは……」

言うことはすでに決まっていますが、理性がやめておけと伝えてくる。それは恥ずかしいから、心の中でつぶやくのもやめておけ、と忠告してくれる。

それでも言おう、口に出して、恥ずかしい台詞を。

「幻が優しいこと」

「……」

「ふざけてごめん。ありがとう」

「……」

「今日もありがとう。幻が可愛いから、つい、からかいたくなっちゃっただけだから」

「……」

「許してくれると、うれしい」

「……ふん。そ、そこまで言うなら、別にいいけど」

「本当？」

「……うん」

「ありがとう」

ぐあああ！

顔から首元までがほかほかする。気を紛らわすために叫びたい気分だ。意識的に恥ずかしいセリフを言うことがこんなにダメージがあるとは。どうやら僕がキザになれる日は永遠に来ないようだ。まあ望んでもないけどね。

「今何時だろう？」

「え？ 九時十七分だけど」

ちゃんと返事をしてくれる。本当に許してくれたようだ。

「時間なんて聞いて、それがどうかしたの？」

いきなり話題が変わったことを少しいぶかしみながら、彼女はそ

う尋ねた。

「うん。ちょっとね」

九時十七分、ちょっと早いぐらいかな。でも早いにこしたことはない。遅くなるよりはぜんぜんいいし、なんだかんだで時間になってしまっただろう。

「いまから散歩しない？」

契命題だけが今日の予定じゃない。今日は十二月二十四日なのだから。むしろ、こっちが本命といっても良い。

散歩。間淵家からおなじみの公園までゆっくりと歩いていく予定。左隣には幻、散歩の意図をつかめない様子で歩いている。

「サンタクロースってさ」

家を出て三分、外の寒さにも慣れてきて、僕はこの時期に定番の話を切り出した。

「サンタクロースってさ、いつまで信じていた？」

「どうかしら。あまり良く覚えていないけれど、たぶん小学校の中学年くらいかしら」

「僕もそれくらいかな」

小学校三、四年生。なまじ知識がついてきて、根拠のないものを批判したくなる年頃。その幼い攻撃を真っ先に食らうのがサンタクロース。サンタクロースは認めないけどプレゼントはもらう、そんな矛盾にはまだ気づかず、とりあえずサンタクロースは卒業する。僕はそんなよくいる子供だったことを思い出す。

「サンタクロースってなんだろう？」

僕は契命題ともうひとつ、このことも考えていた。架空の人物、大金持ちの子供好き、そう言ってしまえば終わりなのかもしれない

けど。

「サンタクロースとは何か。ふふっ、季節を捉えた面白い命題ね」

僕のあいまい極まりない問いにも付き合ってくれるようだ。できれば今日この命題を幻と話してみたかったから、素直にうれしい。

「実はさ、僕はもう結論までまとめてあるんだ」

今日はいつもと違ってもう既に考えてきてある。幻へのクリスマスプレゼント、それが僕の意見というのも面白いかなと思って。

「あら奇遇ね。私も同じ命題について考えてきたのよ」
「え」

あれ。何食わぬ顔で放ったその言葉が僕の計画にひびを入れたことに彼女はまったく気づいていない。

「クリスマスだし、ちよっとお洒落なプレゼントというつもりだったのだけど」

「……ふっ。ははははっ」

思わず笑ってしまった。なるほど幻も僕とまったく同じことを考えていたらしい。

よく考えれば、僕がそうであるように、幻だってこの数ヶ月、いや彼女の場合はもっと多くの期間命題に触れている。彼女も僕と同じように考えてもおかしくないか。

「そっか。幻もサンタクロースについて考えてきてたんだ。それじゃ、互いの意見を贈り物にして、プレゼント交換といこうか」

「ふふっ。粋な交換会ね」

僕からプレゼントを渡すつもりが、思いがけなくプレゼント交換になってしまった。でも、それはそれで面白そうだ。

「じゃあとりあえず結論から。サンタクロースとは子供のときに皆が教わる大先生」

「私の結論は、サンタクロースはふるさと」

二人ともぜんぜん違った結論に達したようだ。これこそが、あいまいな命題から生まれる面白み。ひとつの命題には人の数だけ考え方があって、それがあっててどれが違うなんてない。考え方優劣な

んでない、どれもひとつの立派な意見だってことを思い出させてくれる。

「まずは私から話させてもらっわね」

これから楽しい話が始まる、僕たちをそんな空気が包んだ。

「サンタクロースといえば、まずは『まやかし』というのが出てく
ると思うけれど」

「え？」

……。そうだろうか？ それは少しひねくれすぎな……

「サンタクロースといえば、まずは『まやかし』というのが出てく
ると思うけれど」

……。

「うん……」

まずは話を聞こう。わざわざこんないやなはじめ方をするのには、
きつとそれなりの理由があるはず。もしなかったら……。そのとき
は幻をひねくれっ娘認定しよう。どうでもいいことだけど、『子』
を『娘』にするだけで、そのワードが素敵に見えるのは僕だけだろ
うか、なんてどうでもいいことか。とりあえず、今は幻の話を聞こ
う。

「それは子供の発想よね」

子供の発想。彼女をひねくれっ娘認定するのは軽率だった。話は
最後まで聞こうということだな。って、そもそもあんな微妙なところ
でいったん区切る幻にも、何かの悪意を感じるけど……

「そうやって子供はサンタクロースを『まやかし』と笑ってその空
想から離れていくわ。まるで里出のように。もっとも、それができ
ないまま大人になるというのも、素敵なのかもしれないけれど」

フツと笑う幻。案外、祭さんとか白さんはいまだに信じているん
じゃないかな、と思うけど……。あとで質問してみよう。

「それで」

いったん区切る幻。ここからが本題とでも言わんばかりに。

「サンタクロースから離れた子供は、サンタクロース離れた子供

は当然だけど大人になる。いつかは大人になる」

「うん」

「そしていつかは結婚して子供を育てる。全員がそうとは限らないけれど、今はそうなるかと仮定して頂戴。サンタクロースを『まやかし』とした子供はいつか自分が子供を持つ」

いつかは子供を持つ。それで？

「そのときにもクリスマスはやってくるわよね。絶対とはいえないけれど、それも今はそうと仮定してくれば助かるわ」

まあ、ここで「クリスマスという制度が消えるかもしれない」なんて言っても仕方がないだろう。クリスマスはもはやただの信仰じやなくて、社会に完全に組み込まれている。クリスマス限定、クリスマスフェア、そういったものが消えてしまふとは、なかなか想像しにくい。

「そのときに、再びサンタはやってくる」

「……ん？」

よくわからなかった。どういう意味だろう？

「今から説明するわ。さっきの言うならば、格好付けね。あなたが納得した後には、きっとそれにしびれてしまうわね」

無駄にハードルを上げる幻。

「あなたは、サンタがいないとわかる前にはサンタのことを信じていたわよね」

「そりゃ、もちろん」

「それを教えたのは？」

「……あ！」

そういうことか。なるほど、サンタがやってくるとは、言いかえ妙だ。

「そう、もうわかったと思うけれど、サンタクロースを教えるのは親の仕事。子供がそれを信じるのは、親に教えてもらったから。つまり、親は、大人になったあなたは、一度『まやかし』としたサンタクロースを再び想うことになる。一度離れたそれにもう一度近づ

く、帰郷ね」

つまりは里帰り、か。

「つまり、サンタクロースというのはふるさと。最初に言ったこれが私の考え」

子供に教えるために再び近づく、サンタクロースは故郷。なるほど。

「どうかしら？　こんな考えも面白いと思わない？」

「ありがとう。いいプレゼントだったよ」

髪をかきあげてから深呼吸をする幻。僕は正直に感想を述べた。

「じゃあ、今度は僕の番だね」

「ええ、素敵なプレゼントをもらえると期待して聞くわ」

コホン、とわざとらしく咳をして始める。

「サンタクロースは大先生。それはね、ほとんど一言で納得してもらえと思うんだ」

今回は長く話して納得してもらうんじゃないくて、短い言葉で意見を伝える。この前の幻のまねかな。

「はら、悪い子にはサンタさんからプレゼントはきませんよ！」

自分の母親を意識して言ってみた。

「そういうことね」

一言でわかるとは言ってみたけど、本当にわかるのか。結論を聞いてから、「ああ、一言目でわかってもらえそうなものね」なんてさながらコロンプスの卵状態になると思ったんだけど……

ちよつと悔しいから今度は解読不可能な意地悪文を。

「悪い娘にはサンタさんからプレゼントは来ないよ！」

「それは卑猥^{ひわい}だわ」

「え！？」

「だって、それって、いやらしいおじさんの発言にしか見えないもの……」

「同音異義語を会話で見抜く！？」

マジか。確かに、ホステスに言い寄るいやらしいおじさんをイメ

ージして言ってみただけ、そんな思考背景まで見抜かれるのか……
ちよつと寒気がするよ…… いや冬だからじゃなくて……

「もともサンタクロースというのは、良い子にはプレゼント、悪い子にはおしおき、という風習があったらしいんだ。親や先生の言うことには逆らいたい年頃でも、プレゼントをくれるサンタに逆らうわけにはいかない。そうやって、サンタクロースは一人の道德の先生をやっているっていう考え。面白いかな」

すでに見抜かれていまさら説明するまでもないんだけど、一応最後まで義務は果たした。

「ええ、ありがとう。素敵なプレゼントよ」

本当にそう思ってくれているのかもしれない。だけど、僕は満足できなかった。もっと、もっといいものがあつたんじゃないだろうか……

なんてことになるのはわかっていた。

まるで策士のような台詞だけど、これは強がりじゃない。実は、プレゼントはこれだけじゃない。

「そろそろかな」

「え？」

「僕のもうひとつの、僕から幻へのクリスマスプレゼント」

僕は上を指差した。そして、これはもはや運だったが、ちょうどベストタイミングで……

「あ、雪……」

雪が降ってきた。ホワイトクリスマス。時間を気にしていたのは、このタイミングを見極めるためだった。

「これが、僕から君への、二つ目のプレゼント」

驚く幻の目を見て、ロマンチックを意識してそう言った。格好い

い台詞は言ったほうは恥ずかしい、その法則にのっとり今の僕も自分がかかなり恥ずかしいが、ここは乗り切る。

だって、まだ終わりじゃないんだから。僕はコートの中に隠していたそれを取り出す。

「これはが三つ目」

幻の肩をやさしく引き寄せて、小さい声で言う。

「一緒にいかがでしょうか。お姫様？」

白いマフラー。それを二人の首にかけ、くるっとまるめる。一人で使うよりもずっとあたたかかった。

幻の頬にぼくの頬をくつつけて、

「ちょっとはいけど、メリークリスマス」

恥ずかしさが極限まで達したところで、僕は計画を完遂した。これで全部だ、たぶんうまくいった。

「……もう」

一言そう言っ、て、幻は僕と腕を組んだ。もう。なんて僕に負けないくらい恥ずかしい台詞、それでも言われたほうは、やっぱり悪くないな。

僕たちは二人でくつついて歩いた。寒さに負けないように、少しでもあたたかいように。

「最後の台詞は、目を見ていうようにしないとダメよ」

そんな手厳しい一言も忘れない彼女であった。

13（後書き）

サンタクロースとは何か？

白「子供が最初に思い浮かべる、想像力を働かせる課題」
祭「みんながちょっとあつたかくなる伝統」

二、白契命題（前編）

僕はまたしても間淵家と行動をとみにしている。最近、自分の家族よりもこの家族とともに過ごしている時間が長いんじゃないかって気になるくらいだ。まあもちろんそんなことはなくて、僕は主に僕の家族とともに過ごしているんだけど、そう感じるのは僕の語る話が主に間淵家関連の話だからかもしれない。他人には自分と同じだけ生きている時間があって、自分の知らないその人の時間があるってこと、つまり僕には語っていない僕の時間もあるということなんだけど、そんなことを察して意欲している人はおそらくいないだろう。僕だって、他人に自分と同じほどの時間があることを、無意識においては理解していないし、それを考えている今だって理解しようとは思わない。正確に言えば、思えない。能力的に、構造的に。なんてあきらめたようなことを言うと、無理だと思ってしまふと、そうだと思ったことは絶対に達成不可能になる、というのが僕の哲学なんだけど、こればかりはあきらめよう。できないことは認識している、認識できているだけ上等だ、なんて逃げ文句でも打っておいで。

なんてどうでもいいことはおいておいて、そろそろ状況説明に移ろう。あまり場面の説明は得意ではないのだけど、今朝に読みきったあの本の書き方を意識しながらやってみよう。失敗は成功の元！なんてやる前からネガティブになりながら。

僕は、僕は揺れない車に乗っている。走行中にもかかわらずまったくといっていいほどゆれない、つまりは高級車に乗っている。高級車の中でも高級な部類なのだろうか、あまり車に詳しくないし、そもそも高級と付くものには無縁な家庭で生活している僕にはわかるはずもないことだが。

窓際に座っている僕は、松の木々を見ている。きれいに舗装され

た道の左右には松の木々がそびえていた。もしかしたら松ではないのかもしれないが、それがたとえ杉であったところで、クヌギであったところで特になんというわけでもないだろう。

太陽はおそらく真上になるのだろう。木々の影はどれも短く、幹は光に照らされていてところどころにあるくぼみまでよく見える。

昼食は車になる前にご馳走になったので、それほど空腹は感じない。僕たち、というと僕が主体であるかのように聞こえてしまうので、間淵家とでもしておこうか。間淵家は三台の車を用いて移動している。この車に乗っているのは、白さん、幻、そして僕。幻を真ん中にして三人で一列に座っている。

間淵家を出発して一時間、目的地は間淵家の本家、すなわち^{なぎ}凧さんの実家だ。話によると、あと三時間ほど車に乗っていれば到着するらしい。

今は車内で口を開いているものは一人もないけど、出発からずっと全員が無言ですわ手いるわけでは、もちろんない。先ほどまでは、間淵家本家のまわりにあふれている自然、自転車で（車ではなく自転車を使うことに意義があるらしい）十分ほど行ったところにある幻や^{さや}鞘さんがいつも行く古本屋、間淵家本家に住んでいるおじいさんとおばあさん、それから幻たちのいとこ三人についての話を聞いていた。主に幻がしゃべっていて、白さんも時々話していた。

それならどうして今はみんな押し黙っているのかというと、ちゃんとそうなるべき理由がある。

これから、白さんによる契命題が行われるわけだ。

ふう、ようやく伝えるべきことを伝えられた。契命題、これがこれから行われるのだ。第二回の契命題。

今回は、事前に命題を伝えられなかった。契命題は間淵家の一人
一人がひとつ担当するもの、つまりそれらにはあまりきちんとした
ルールがないようだ。事前に命題を伝える人もいれば、当日直前に
伝える人だっている。白さんは後者で、祭さんは前者だったわけだ。
というか、始まりも唐突だった。車内で一時間ほどお喋りして、
そして五分前、

「時間があるようだし、せっかくだからここで契命題やってしま
いましょうか」

ということもなさげな一言で始まったのだ。

何の命題について語るのかもまだ知らされていない。彼女はど
うやら本当に思いつき出始めたらしく、事前の準備も一切していな
かったようだ。今、僕の隣の隣でそれが生み出されている。まさか過
ぎる展開に、ただただ驚くばかりだ。こういう破天荒な方法は、て
つきり光さんが影さんの担当だとばかり思っていたから……

幻は特に驚いた風には見えなかった。長く暮らしている家族同士、
なんとなくこうなることを予想していたのだろうか。そうだったな
ら、僕にもそれを伝えておいてくれてもよかっただろうに……

「はい、決めました」

と、不意に白さんがそう言った。本当に不意で、『なんて考えて
いると……』なんて言う余地もなかったほどだ。

「それじゃあ聞きましょうか」

ずっと正面を向いていた幻が目をつむって促した。白さんは一度
うなずいて、その小さな口を開く。

「では、今からする話を聞いてください」

白さんは一度目をつむり、それから開いた。そのときにはいつも
のおどおどした感じは完全に消えていた。凜とした女性がそこに
いた。演劇もこの人の特技だったことを僕は思い出す。

「敵対している二国の王子、王女が互いに恋をしてしまいました」

白さんはある物語、僕も前に一度読んだことのある物語を語りだした。

「二人が出会ったのは二国が一度和睦をしようとしたとき。王子の国側が王女の国へ赴いたときでした。好奇心の強かった王子が庶民に変装して街を歩いていたときに、同じく変装してお忍びで街へ遊びに来ていた王女に会いました」

確か、古い国の物語だったと思う。この話を読んだのは一度だけだけど、読み終わった後に何か心に置いていかれたことを覚えていいる。言葉にはできない、でも確かに何かが心に残ったことを覚えている。

「目が合った瞬間、二人は恋に落ちました。庶民の格好をした王子が手を差し出し、同じく庶民の格好をした王女が手を取りました。そして、二人は街を歩きました」

あの時心に残った何か、それが今また動き出している気がする。白さんの語り方が物語に臨場感を生み出している。

「お互いに一言も話さずに、二人はただ街を歩きました。ただ互いの手の温度を感じて、隣にいる相手の心を感じて」

車は相変わらず無音で走っている。僕の想像を、物語の情景を思い浮かべるのを邪魔するものは何もない。

「日が暮れて、二人は帰らなければならない時間になりました。二人とも気軽に街を歩いていい身分ではないので、召使が自分が外出していることに気づく前に帰らなくてはなりませんでした」

早すぎる別れ。確か、ここでもうやく二人が……

「別れ際に王子が恋に落ちた女の子に名前を尋ねました」

ここは特に覚えている。物語で一番有名なシーンかもしれない。僕の心は、この物語の世界に溶け込んだ。

「王女は、本当の名を語りました。庶民にまぎれているのだから偽名を使ってもよかったのに、またそのほうがよかったらうに、その本当の名を語りました」

王家の名は特別で、誰が聞いてもその身分がわかるようになって

いた。ましてや、敵国の王女、王子がその名を知らないはずはなかった。

「王子は無言で王女の瞳を見つめました。そして、自分もまたその名を口にしました」

王女もまた、王子の名は知っていた。ここで互いは決して結ばれることのない間柄であることを悟った。

「二人は黙って抱き合いました。道端で抱き合う二人を邪魔するもの、目を向けるものすらいません」

王子はいろんな思いを持ったまま、ただ彼女の温かさを感じた。そして、言った。

「『あと十年、僕たちが二十七歳になるころ、そのころまでに僕らの国の争いをなくそう。そして、そのときもしもまだ君が僕のことを覚えていて、もしも僕の告白を受け取ってくれるなら、そのときに結婚してほしい』王子は王女を抱いたままそう言いました」

互いにまだ十七歳、国と国の争いを消すことがどれくらい大変か、本当にはわかっていなかったかもしれない。それでも、本気でそう思い、本気でそう約束した。

「『互いの国が仲良くなり、そのときにもしもあなたが私のことを覚えてくれていて、もしもまた私を抱きしめてくれるのなら、私はその告白を喜んでお受けします』王女は王子に抱かれたままそう言った」

二人は心から添う約束した。だけど……

「その後、二人は互いに国をよい方向に導こうとがんばりました。国を説得して、この争いが終わるようにがんばりました。だけど、二人の約束から三年が過ぎた夏の夜……」

王子はある貴族を説得しに出かけた帰りに、後ろから……

「王女側の国の王子、王女の兄は、彼女が敵国の時期国王とした約束を知りました。彼は妹が敵国にだまされていると思います、妹には何も言わずに、当時二国間ではもっとも卑劣な手段といわれているものを実行しました」

王子は道端に倒れ、そしてそのまま……

「王女の兄は、弓矢部隊の中で一番腕の立つ青年を連れて闇夜にまぎれて王子の国へ侵入し、そして……王子を暗殺しました」

王子は夜が明けるとともにその魂もどこかへ旅立ってしまった。

ここではないどこかへと、一人で……

「その話はすぐに二国間に広がっていき、当然王女もそのことを知りました。王女はただただ泣き続けました。部屋から一步も出ず、悲しみにくれるばかりでした。そして……」

王女は兄が王子を殺したことを悟ったけど、兄に何も言うことはできなかった。王女は心の中にあつた何か大きなものが消え去ったことを感じて……

「王女は悲しんで悲しんで……それでも死は選びませんでした。王子との約束、二国間の争いをなくすことだけは果たそうと思ったのです」

王子を追って自分も死ぬ、ということをしなかったことに一種の驚きを感じたことを覚えている。王女は生きて戦うことを選んだ。

「それから四年が過ぎ、王女の父は病で死にました。そして王女は家臣の推薦で国の主になりました。兄ではなく妹が次の王になりました」

国の実験を握り、王女は国の代表として相手国と話し合うことができるようになった。

「相手国も王が代わり、彼女の恋した王子の弟が次の王となりました。二人は話し合いで戦争を終わらせることを目指し、三年の月日がたったとき、それは現実になりました」

戦争で互いの国力も疲弊していて、どちらの国も、王の言葉に逆らってまで戦いを続けるものはいなかった。

「ちょうど王子と王女が約束をしてから十年たったとき、戦争はついになくなりました。そしてその夜、王女もまた、どこかへ消えてしまいました」

亡き王子のところへ旅だったのか、どこか知らない国へ旅立った

のかはわからないが、王女はここではないどこかへ向かった。一人で……

「という話ですが、知ってましたか？」

僕が物語の余韻に浸っている間に、白さんはいつもの白さんに戻っていた。彼女ほど演技が上手な場合は、いや、彼女に限らず、『いつもの彼女』、『本当のその人』なんてのはただのこちらの思い込みなのかもしれないけど、白さんは先ほどの凜とした感じから、微笑がかわいらしい少女になっていた。それを戻るといのか、変わるというのかはわからないけど。

「ええ」

僕が返事する前に幻が先にそう言った。そんなに有名な話でもなかった気がするけど、やっぱり幻も知っていたか。

僕はうなずくことで白さんに応えた。でも、この話がどうしたのだろう。ただの余興とかなのだろうか。

幻も同じことを考えているらしく、白さんをいぶかしげに見ている。

「二人ともこの物語を知っていましたか。なら少しやりやすいかもしませんね。特にこの話を読んだことがなくとも大丈夫といえは大丈夫なのですが、それでも手助けにはなると思います」

よくわからないままに話が進んでいく。僕らはまだ今回の命題すら聞いていないのだから理解できるはずもない。早く情報がほしい。「それで、白姉さん。その話がどうしたのですか？」

車の中は相変わらず静かだ。松らしき木々はずっと途切れることなく左右に並んでいる。

「今回はいつもとは少し違った風にしてみましたか」

「違った風？」

僕は続きを促すように、そう尋ねた。白さんは一度うなずいて、「今日は何かについて、あなたの意見を聞いて私がそれに納得できるかどうか、というものとは違った形式でやってみましょう」

前提はない。間淵家の一人ひとりが自分の好きなように契命題を行っことになってる。確かにそうだけど、このあまりに型を崩す白さんのやり方に驚きを隠せない。型なんて確かにないんだけど、それでも、いままで経験してきたものは、いずれも決まったプロセスがあった。細かいところは違っても、大きく見れば同系統といえるものだった。

でも、今回はどうやらそうではないらしい。白さん独特の、今回限りの特別なプロセスによる契命題が始まるらしい。

「それでは、発表します。今日の命題は、この物語の解釈にします」
静かな車内と高い木々。ただ白さんの言葉がよく聞こえた。

二、白契命題（前編）（後書き）

光「前編、なんて初めてじゃねえか？」

影「どうだったっけね。よく覚えていないな。それにしても、相変わらず白は奇抜だねえ」

凧「そうねえ。春君、きつと驚いてるでしょうね。白ちゃんは我が家で一番の変わり者だけど、見た目は一番の真人間だからねえ」

白「ご、誤解を招くことを、言わないで！　ください……」

次回、後編です。最後まで読んでいただきありがとうございます。あ、作中作のあれは、もしかしたら短編として書くかもしれないかもしれません。それでは^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3596v/>

命題と恋愛

2012年1月8日18時45分発行